

南 整 理 遺 跡

2000

財団法人 岐阜県文化財保護センター

序

南整理遺跡の所在する関ヶ原町大字野上は、北に相川が流れ南に南宮山がそびえる狭隘な地で交通の要衝に当たります。古代においては西に不破の関、東に美濃国府をひかえ、壬申の乱の行宮が設置されたといわれる重要な拠点です。また中世においても「野上宿」としてしばしば文学作品に登場し、当時の繁栄ぶりが偲ばれます。現在、近世に整備された旧中山道の沿道には松並木の一部が遺存し、関ヶ原町の指定を受けて厚く保護されております。

今回の調査では縄文時代から江戸時代に至る遺構・遺物が数多く発見されました。中でも古代と中世を主体とする集落跡は、今後の研究の進展により該期の生活様相や集落形態を窺い知る上で貴重な資料といえます。

伝統的かつ歴史的な風土の中で、地域史解明のために埋蔵文化財発掘調査の成果を活用していただく上で、本報告書がその一助となれば幸いです。

なお本報告書が刊行されるまでには、関係諸機関並びに関係者各位、関ヶ原町教育委員会、地元の皆様からの多大な御支援、御協力を賜りました。

末尾ではありますが、お世話になりました方々に改めて厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

財団法人 岐阜県文化財保護センター
理事長 村木光男

例　　言

- 1 本書は不破郡関ヶ原町大字野上字南整理に所在する南整理遺跡（岐阜県遺跡番号21362-01562）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は一般国道21号関ヶ原バイパス建設事業に伴うもので、建設省中部地方建設局岐阜国道工事事務所から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘調査は財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 発掘調査は平成9～10年度に実施し、宇野隆夫国際日本文化研究センター教授（前富山大学教授）の指導のもと安田正枝（平成9年度）、三輪晃三（平成10年度）が担当した。
- 4 本書の執筆は以下のとおりである。

第5章 第1節…宮野義則

　同章 第2節…藤根久・平野礼子

　同章 第3節…山形秀樹

　同章 第4節…新山雅広

　その他、編集 …三輪

- 5 地形測量・水準測量・空中写真測量は株式会社イビソクに委託して行った。
- 6 遺物の写真撮影はフォトスタジオ サトウに委託して行った。
- 7 自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに委託して行った。
- 8 発掘調査及び報告書の作成にあたって次の方々や諸機関から御助言・御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・順不同）。
- 井川様子・泉拓良・伊藤裕偉・内堀信雄・大岡明臣・太田三郎・奥義次・金子健一
　鈴木とよ江・鈴木正貴・砂田佳弘・野口哲也・原田義久
　関ヶ原町教育委員会・関ヶ原町文化財保存審議会・関ヶ原町歴史民俗資料館・
　垂井町教育委員会
- 9 本文中の方位は国土座標第VII系の座標北を示している。
- 10 土及び土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄1995『新版 標準土色帖』16版 日本色研事業株式会社による。
- 11 調査記録及び出土品は財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

目 次

序

例 言

目 次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経緯	4
第2章 遺跡の環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	10
第3章 基本層序	12
第4章 遺構と遺物	15
第1節 遺構・遺物の概要	15
第2節 第1調査面の調査	16
第3節 第2調査面の調査	54
第4節 包含層及びその他の遺構出土の遺物	64
第5章 自然科学的手法による報告・検討	83
第1節 鉢に付着した赤色物	83
第2節 鉄滓の分析	86
第3節 放射性炭素年代測定	89
第4節 花粉化石群集	90
第6章 まとめ	93
図 版	

図版目次

- | | |
|--|-------------------------|
| 図版1 南整理遺跡遠景 | 図版16 繩文土器の突帯の各種類、土師器 |
| 図版2 調査地全景 | 図版17 須恵器、灰釉陶器 |
| 図版3 堀立柱建物跡1、堀立柱建物跡2 | 図版18 中世土器 |
| 図版4 堀立柱建物跡4、堀立柱建物跡3～5 | 図版19 小碗・小皿、灰釉陶器・山茶碗 |
| 図版5 棚1 | 図版20 信楽・常滑他 |
| 図版6 積石遺構1 | 図版21 古瀬戸・大窯 |
| 図版7 積石遺構2、石垣、除去後の検出遺構 | 図版22 土師器 |
| 図版8 盛土状遺構 | 図版23 中国磁器 |
| 図版9 SD10・14・23 | 図版24 近世陶磁器・土製品 |
| 図版10 流路跡3、流路跡5 | 図版25 加工円盤・土錐、瓦 |
| 図版11 道路状遺構1 | 図版26 石器、銭貨 |
| 図版12 道路状遺構2 | 図版27 金属製品 |
| 図版13 SK22、SK26、SK52、SX18、
SK110～114 | 図版28 鉄滓の断面写真 |
| 図版14 第2調査面 | 図版29 鉄滓No.1 金属部の電子顕微鏡写真 |
| 図版15 繩文土器・弥生土器 | 図版30 産出した花粉化石 |

挿 図 目 次

図1 調査地の位置図	1	図38 SK22の遺物出土状況図及び出土遺物	47
図2 試掘坑の位置及び土層柱状図	2	図39 SK26・52の遺物出土状況図及び出土遺物	48
図3 地区設定及び地形測量図	5	図40 SX18の詳細図及び出土遺物	49
図4 調査地周辺の地形	7	図41 SK110～114の詳細図	50
図5 調査地周辺の地割状況図	8・9	図42 各土坑の出土遺物	53
図6 調査地周辺の遺跡地図	11	図43 第2調査面検出遺構配置図	54
図7 第1調査面土層検出状況図	12・13	図44 SX50の詳細図、SX55の詳細図及び出土遺物	55
図8 調査坑南壁土層堆積状況図	14	図45 土器集中区の時代別出土状況	56
図9 第1調査面検出の主要遺構	15	図46 推定等高線と各集中部の位置図	57
図10 掘立柱建物跡2	16	図47 個体別出土状況と接合関係図	58
図11 掘立柱建物跡1	16	図48 土器垂直分布図	59
図12 掘立柱建物跡3	17	図49 各個体の出土状況図①	60
図13 掘立柱建物跡4	18・19	図50 各個体の出土状況図②	61
図14 掘立柱建物跡5	20	図51 土器集中区出土土器①	62
図15 柵1	21	図52 土器集中区出土土器②	63
図16 柵2・3	22	図53 包含層及びその他の遺構出土遺物①	64
図17 掘立柱建物跡出土遺物	23	図54 包含層及びその他の遺構出土遺物②	66
図18 横石遺構1	25	図55 包含層及びその他の遺構出土遺物③	67
図19 横石遺構2・石垣	26	図56 包含層及びその他の遺構出土遺物④	68
図20 横石遺構1・2出土遺物	27	図57 鉢の各部位に付着する赤色物の螢光X線スペクトル図	84
図21 盛土状遺構	29	図58 鉄滓No.1金属部の螢光X線スペクトル図	87
図22 盛土状遺構出土遺物①	30	図59 鉄滓No.2のX線回線スペクトル図	87
図23 盛土状遺構出土遺物②	31	図60 花粉化石分布図	92
図24 溝・自然流路跡の配置図	32・33	図61 小碗と小皿の組成図	94
図25 各溝の土層堆積状況図	34	図62 中世前期 中国磁器の組成図	94
図26 各溝の出土遺物①	36	図63 中世後期 中国磁器の組成図	94
図27 各溝の出土遺物②	37	図64 古瀬戸の器種別組成図	94
図28 流路跡2・4出土遺物	38	図65 中世前期の土器組成図	95
図29 墨書き土器	38	図66 中世後期の土器組成図	95
図30 流路跡3の土層堆積状況図	39	図67 包含層における時代別土器出土状況図	96
図31 流路跡3a出土遺物	40	図68 各遺構等における軸の方方位の傾向	98
図32 流路跡3b出土遺物	41	図69 主要遺構変遷図	99
図33 道路状遺構1	43		
図34 道路状遺構2	44		
図35 道路状遺構2の土層堆積状況図①	44		
図36 道路状遺構2の土層堆積状況図②	45		
図37 道路状遺構2出土遺物	46		

表 目 次

表 1 調査地周辺の遺跡一覧表	11	表21 土器観察表⑦	80
表 2 掘立柱建物跡・櫛の属性一覧表	23	表22 土器観察表⑧	81
表 3 各溝の属性一覧表①	35	表23 土製品観察表	81
表 4 各溝の属性一覧表②	36	表24 土鍤観察表	81
表 5 各流路跡の属性一覧表	38	表25 石器観察表	82
表 6 道路状構 2 の各土坑属性一覧表	44	表26 銭貨観察表	82
表 7 各土坑の属性一覧表①	51	表27 金属製品観察表	82
表 8 各土坑の属性一覧表②	52	表28 鉢各部位の付着赤色物から検出された元素と顔料の種類	83
表 9 各土坑の属性一覧表③	56	表29 検討した鉄滓試料の特徴	86
表10 包含層出土遺物一覧表	69	表30 花粉化石一覧表	91
表11 遺構出土遺物一覧表①	70	表31 小碗と小皿の組成表	94
表12 遺構出土遺物一覧表②	71	表32 中世前期中国磁器の器種別組成表	94
表13 遺構出土遺物一覧表③	72	表33 中世後期中国磁器の器種別組成表	94
表14 遺構出土遺物一覧表④	73	表34 古瀬戸の器種別組成表	94
表15 土器観察表①	74	表35 中世前期の土器組成表	95
表16 土器観察表②	75	表36 中世後期の土器組成表	95
表17 土器観察表③	76	表37 遺構別土器出土状況	97
表18 土器観察表④	77	表38 遺構別中世土器出土状況	97
表19 土器観察表⑤	78		
表20 土器観察表⑥	79		

付 図 目 次

付図 1 第1調査面西地区遺構全体図

付図 2 第1調査面東地区遺構全体図

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

建設省中部地方建設局岐阜国道工事事務所では、交通混雑の緩和、冬期における円滑な交通の確保、地域開発の促進等を図るために一般国道21号関ヶ原バイパスの建設を計画した。

この建設事業に先立って平成7年7月14日、岐阜県教育委員会からの照会に対する建設省中部地方建設局岐阜国道工事事務所の回答によって、第1工区内の不破郡垂井町側に日守遺跡、同郡関ヶ原町側に南整理遺跡（図1）が所在することが確認された。そこで岐阜県教育委員会の委託を受けて当センターでは、同年10月23日～同月25日にかけて遺跡の広がりと遺構面数及び深度等を把握するために試掘確認調査を実施した。調査の結果、遺構は検出できなかったものの、広い範囲にわたって弥生時代と古代から中世の遺物が出土した。「改訂版岐阜県遺跡地図」（岐阜県教育委員会1990）によれば、これまでの分布調査によって南整理遺跡は繩文～平安時代の遺跡と登録されていたため、岐阜県教育委員会ではこれとは別の遺跡と判断して「野上遺跡」と命名し登録した。試掘確認調査により遺物が確認された範囲は事業による破壊を免れ得ないため、記録保存を目的とする本発掘調査が必要と判断され、平成9～10年度に中部地方建設局から岐阜県教育委員会が委託を受けて、当センターが本調査を実施した。

調査終了後当センターと関ヶ原町教育委員会が協議した結果、調査地内の検出遺構は隣接する南整理遺跡の範囲に広がりその一部と判断された。そこで関ヶ原町教育委員会から岐阜県教育委員会に、野上遺跡の登録を抹消し調査地は南整理遺跡の範囲に含める旨の変更報告が出された。当センターでは平成11年3月3日に岐阜県教育委員会教育長から遺跡の名称変更の通知を受けたので、本報告では南整理遺跡として報告する。



国土地理院発行 1:50,000地形図（長浜）、（大垣）より
図1 調査地の位置図 (S = 1/50,000)

2 第1章 調査の経緯

試掘確認調査では遺跡の有無を確認するだけにとどまらず、遺跡の広がりに関する情報も得ることができたので、ここでその概要を述べる(図2)。試掘坑は未買収地を除く都合10箇所に設定し、西から順にNo.1～10と呼称した。調査地のはば中央のNo.6とNo.7の間には、町境である不帰川^{ふきがわ}が位置する。標高は西端のNo.1が約69.6mと最も高く、No.8が約65.7mと最も低い。東端のNo.10では約66.5mを測るために、調査地全体の東西地形は皿状を呈している。調査方法はバックホウにより約2×4m(No.1～3)と約3×5m(No.4～10)の規模で掘削を行い必要に応じて人力により精査し、掘削した土からの遺物の有無確認と試掘坑内の壁面精査による遺構の有無確認に努め、併せて土層堆積状況を記録した。この際各土層番号は試掘坑ごとに命名したため、調査後に土層堆積の対応を検討した。

調査の結果、二つの大きな成果を得た。第一にNo.2・4～6の試掘坑で包含層を検出したことである。このうちNo.2～6の包含層は間層を挟んで上下2層に分かれる。出土遺物はいずれも小片のため図示することができなかったが概ね上層が古代～中世、下層が弥生時代に属する。包含層の面的な把握と、No.1では遺物は出土しなかったものの土層の観察から旧中山道に伴う遺構の可能性が高いため、

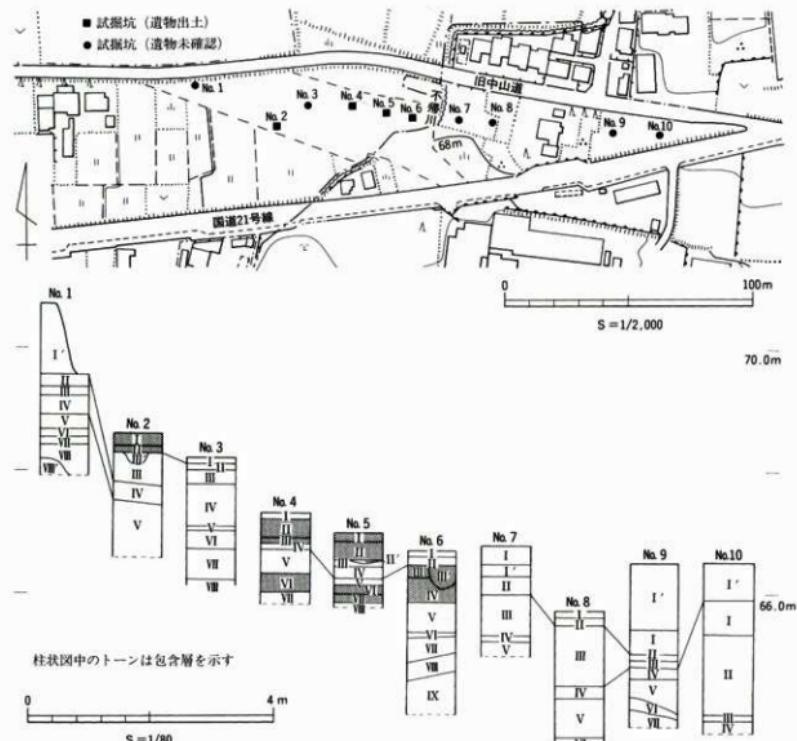


図2 試掘坑の位置及び土層柱状図

No.1～6は遺跡の範囲に含まれることが判明した。第二に土層堆積状況は不帰川の東西で大きく異なることである(図2)。つまり東側No.7～10からはシルト質土・粘質土と砂礫の互層が見られ、東にいくにしたがつてしまりのある黒色粘質土が厚く認められた。一方西側のNo.4～6では黄褐色や明褐色の粘質土が連続して認められたがNo.1～3では類似した土層はなかった。これらのことから調査地の土層堆積は、基本的に現地形と深い関連をもつように考えられた。

各試掘坑の土層観察結果は次の通りである。

No.1

- I' 層 暗褐色土(縮まりが悪い)
 - II 層 深い暗褐色土(I'層より縮まりがあり、小礫が多い)
 - III 層 明褐色土(粘性あり)
 - IV 層 暗褐色土(粘性が強く、縮まる)
 - V 層 暗褐色土(径3～6cmの礫が多い)
 - VI 層 明褐色土
 - VII 層 くすんだ明褐色土(礫が多い)
 - VIII 層 明褐色土(礫が多い)
 - VIII' 層 明褐色土(VIII層よりやや色が暗い)
-

No.2

- I 層 黒褐色土(表土、包含層)
 - II 層 灰褐色土(下層に鉄分が沈着、包含層)
 - III 層 褐色土(径0.5～3cmの礫が多い、礫のブロックあり)
 - III' 層 褐色土(やや黒い)
 - IV 層 褐色土(やや黒く粘質)
 - V 層 褐色土(礫が多い)
-

No.3

- I 層 黒褐色土(表土)
- II 層 褐色土(礫を少量含む)
- III 層 褐色土(やや色が暗く礫を少し含む)
- IV 層 褐色土(礫が多い)
- V 層 明褐色土(粘質で礫を少し含む)
- VI 層 暗褐色土(粘質で礫を少し含む)
- VII 層 褐色土(亜円礫が多い)
- VIII 層 灰褐色シルト

No.5

- I 層 黒褐色土(表土、包含層)
 - II 層 暗褐色土(礫が多い、包含層)
 - II' 層 灰褐色土(レンズ状に堆積)
 - III 層 明赤褐色土
 - IV 層 暗灰褐色土(礫が多い)
 - V 層 明暗灰褐色土(粘質が強い)
 - VI 層 明褐色土(粘質、炭を含む、包含層)
 - VII 層 明褐色土(やや暗く粘質、炭を含む、包含層)
 - VIII 層 明褐色シルト
-

No.6

- I 層 黑褐色土(表土)
 - II 層 暗褐色土(礫が多い)
 - III 層 明褐色土(礫を含む、包含層)
 - III' 層 明褐色砂礫(径1～3cmの円礫)
 - IV 層 明褐色土(粘質が強い、包含層)
 - V 層 黄褐色シルト(礫を少し含む)
 - VI 层 黄褐色シルト(やや暗い)
 - VII 層 黄褐色シルト
 - VIII 層 暗黄褐色シルト
 - IX 層 黑褐色シルト(湧水あり)
-

No.7

- I・I' 層 (整地土)・(搅乱)
- II 層 暗褐色土(礫を含む)
- III 層 明褐色砂礫
- IV 層 黄褐色土(粘質で礫を含む)
- V 層 明褐色土(砂礫多い、湧水あり)

No.4

- I 層 黒褐色土（表土、包含層）
- II 層 褐色土（堅く縮まり小礫が多い、包含層）
- III 層 褐色土（やや暗く小礫が多い）
- IV 層 褐色土（やや色が薄く小礫が多い）
- V 層 褐色土（礫が多い）
- VI 層 明褐色土（砂を多く含む粘質土、包含層）
- VII 層 黄褐色シルト（礫を含む）

No.9

- I'層 （整地層）
- I 層 黒色土（旧表土、やや粘質）
- II 層 灰褐色土（堅く縮まる）
- III 層 暗褐色土
- IV 層 黑褐色土
- V 層 褐色土（小礫を含む）
- VI 層 黑褐色土（小礫を含む）
- VII 層 灰黄褐色砂礫

No.8

- I 層 黒褐色土（畑地耕作土）
- II 層 暗褐色土（径5~10cmの礫を含む）
- III 層 褐色砂礫
- IV 層 黒色土（粘質あり）
- V 層 黑褐色土（礫を含む）
- VI 層 黄褐色土

No.10

- I'層 （整地層）
- I 層 黒色土（やや粘質で小礫を含む）
- II 層 明褐色砂礫（径1~3cmの礫）
- III 層 黄褐色砂質シルト
- IV 層 明褐色砂礫

第2節 発掘調査の経緯

本調査を実施するに当たり、建設省中部地方建設局岐阜国道工事事務所との事前協議によりバイパス建設工事用搬入路の確保のため、平成9年度は工事予定地内の既存の搬入路の北側2,000m²を対象とした。調査地内中央には南北方向に1条の用水路が存在しこれを保護するために必然的に調査区は二分されたため、便宜的にこれ以東を東地区、以西を西地区と呼び、平成9年度調査では搬入路の付け替えのため西地区を先行して調査を行うこととなった。また平成10年度調査では同事務所との事前協議により南接水田の法面保護をふまえ、工事用搬入路を含む900m²を対象とした。

調査地内は国土座標に基づき8m四方で割り付け、地区名は北から南に向けて順にZ・A~Eのアルファベット、西から東に向けて順に19・20・1~16の算用数字を付し、北西角の杭番号により呼称した（図3）。

調査前の土地利用は明治時代頃に開墾された水田であったが、微地形の復元と旧中山道に沿って帶状に認められる高まり（以下「盛土状遺構」）の現況を把握するため地形測量を実施し、区画整理前の昭和62年度測量図に合成させた（図3）。これをみるとZ5・Z6とZ10~Z13にかけて凸状の起伏が認められる。A2~A4とZ7・A7の二箇所には小山状の高まりがあり区画整理以降の残土と思われ、その直下まで削平が及んでいなければ盛土状遺構が良好な状態で保存されていると予想できた。また当初旧水田内の等高線はほとんど変化しないと考えられたが、D13からA16の方向にかけては周辺の標高に比べて低く、埋没谷や自然流路などの旧地形か人為的な削平を反映しているものと考えられた。

この地形測量の結果をうけて平成9年度調査では、盛土状遺構の検出に際してはこれに直行する形でトレンチを設定してバックホウで掘削し、その断面観察によって検出位置を確定する形をとった。また周辺の土層堆積状況と遺構面・包含層の詳細な位置を把握するため、必要に応じて調査地内にトレンチを設けた。これにより表土直下に遺構が存在することが判明したためバックホウによる掘削でこれを面的に広げ、第1調査面とした。この際に東地区ではトレンチ内から若干量の縄文土器が出土したため試掘確認調査の結果も考慮して、ほぼ東地区的全面と西地区的西半について第1調査面以下の調査も行った（第2調査面）。

平成10年度調査では第1調査面の遺構検出中三箇所に及ぶ現代搅乱坑が認められ、いずれも深度の大きな搅乱坑であったが壁面観察では遺構・遺物共に認められなかったため、第1調査面より下部については調査不要と判断した。

なお遺物の取り上げについては、包含層出土遺物は主に地区単位で行い、遺構内出土遺物はトータルステーションの遺物システムを使用したがその全てを網羅することはできなかった。そこで本報告では特に必要と判断した個々のデータのみ抽出し、掲載した。

調査体制と調査日誌抄を以下に記す。

(財) 岐阜県文化財保護センター調査体制

調査部長 山元敏治

調査部次長 高橋幸仁

担当調査課長 中島康夫（平成9年度）、柘植卓伸（平成10年度）、飯沼暢康（平成11年度）

担当調査員 安田正枝（平成9年度）、三輪晃三（平成10～11年度）

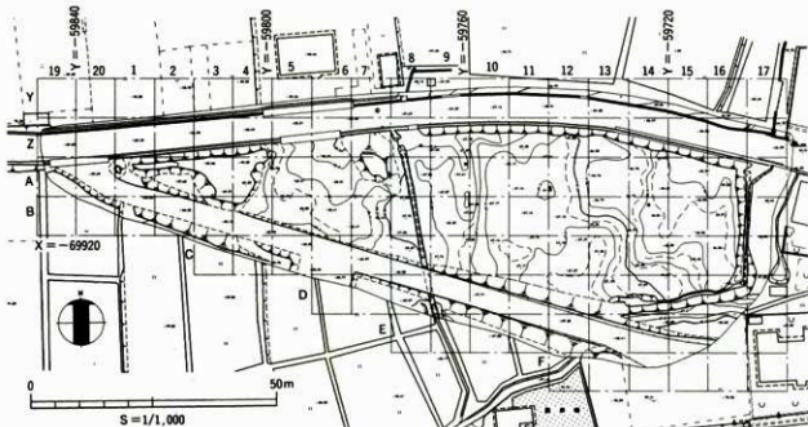


図3 地区設定及び地形測量図

6 第1章 調査の経緯

発掘作業員 方山禮吉、河村節子、木村豊、國枝さと子、田中キシ子、田中小三郎、田中真一、
谷口純一、中村ふみ代、野網義一、野原茂、早野よさを、樋口彰、藤木薫、
藤原八重子、本郷三郎、松井豊彦、松井久美、松原勝、山口義男
整理作業員 小澤真紀子、河崎文子、後藤幸子、野尻みどり、戸下賀代子

調査日誌抄

平成9年度

- 4月25日 地形測量実施。
28日 西地区表土除去開始。
5月6日 調査開始。西地区基準点測量実施。
7日 西地区から着手し盛土状遺構を検出。
7月3日 花粉分析のための土壤サンプリングを実施。
23日 積石遺構1・2の空中写真測量実施。半裁後写真撮影・図化後に完掘。
30日 東地区表土除去開始。
8月4日 東地区基準点測量実施。
26日 東地区調査着手。
9月19日 西地区空中写真測量実施。
22日 指導調査員宇野隆夫教授現地調査指導。西地区第2調査面検出開始。
10月29日 西地区埋め戻し。
2月12日 指導調査員宇野隆夫教授現地調査指導。
13日 東地区空中写真測量実施。
17日 バックホウ掘削、東地区第2調査面検出開始。
3月20日 平成9年度発掘調査終了。
23日 東地区埋め戻し。

平成10年度

- 6月1日 表土除去開始。
8日 調査開始。東地区から着手。基準点測量実施。
7月1日 道路状遺構2を検出。検出状況を図化後半裁し、写真撮影・図化後に完掘。
2日 西地区的調査を着手し、以降東西両地区的調査を同時並行で行う。
15日 櫛1を検出。柱穴を半裁し写真撮影・図化後に完掘。
21日 西地区西端で盛土状遺構基底部を検出。
9月3日 C5・C6区周辺の確認。
9日 空中写真測量実施。
10日 流跡4・5の検出、掘削。
19日 埋め戻し(～25日)。
23日 平成10年度発掘調査終了。機材撤出。

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

南整理遺跡は不破郡関ヶ原町大字野上字南整理に所在する。北に伊吹山地の支脈である相川山地、南に鈴鹿山地の北端となる南宮山によって囲まれた狭隘の地に、現在 JR 東海道本線・JR 東海道新幹線・国道21号線が東西に並行して走る交通の要衝に当たる（図4）。

第四紀更新世に伊吹山地から南流する藤古川・梨木川・相川の活動によって発達した旧扇状地は、隆起と浸食を繰り返しながら関ヶ原台地を形成させた。関ヶ原台地は上位面・下位上段面・下位面に分類されているが、下位面を浸食して谷底平野を形成する相川には南宮山塊から一の谷川・西谷川・堂谷川・平木川・不帰川などが流下する。本遺跡はこのうちの不帰川の左岸に位置している。

遺跡周辺の現代の土地利用をみると、住宅地と畠地が多く水田は少ない。水田は利水環境に恵まれたわずかな谷底平野に多く、扇状地や台地上ではマンボと呼ばれる地下トンネルや貯水池などの灌漑施設が必要である。明治～大正時代に開墾し水田を営む場合もみられるが、桑畠や茶畠が多い。

当遺跡が所在する大字野上周辺を対象に作成され、その成立年代が明確な地籍図¹⁾のうち最も古いものは明治21年に遡る。この地籍図は1/1,000の縮尺で字母毎に分割して作成されておりそのまま繋ぎ

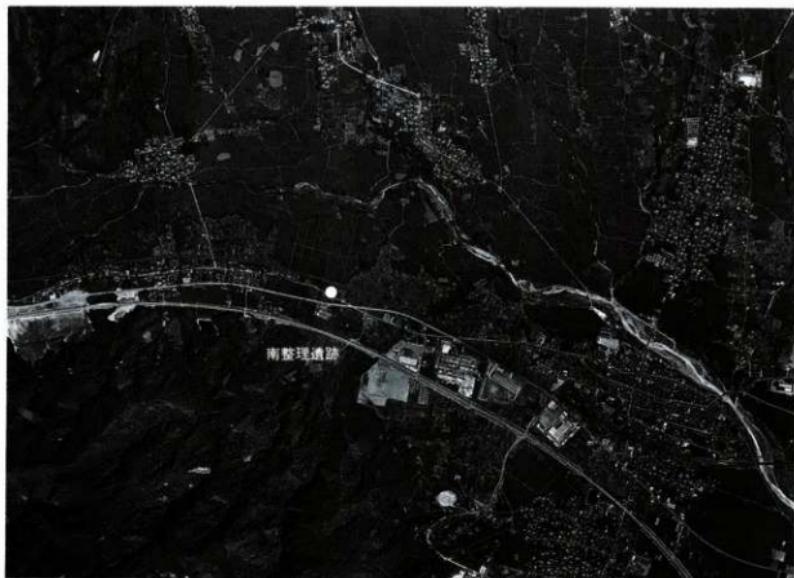


図4 調査地周辺の地形 (S=1/25,000)

合わせると歪みが大きくなるため、都市計画図を参照して全体図を復原し作成した（図5）。

明治時代の土地利用の状況をみると、旧中山道に沿って短冊形に地割りされた宅地が東西に帯状に広がる。その範囲は字名で東は宮ノ下、西は太子谷口までに限られている。宅地の周辺には畠地、相川に面した谷底平野には水田が広がる。水田の分布はこの他に西から順に一の谷川と堂谷川の下流域、平木川扇状地の扇頂部、不帰川下流域に主に認められる。土地利用は自然地形と土壤環境に左右されやすく、近年の区画整理域を除くと近代と現代の土地区割がよく一致することから、土地利用の状況と土地区割は、少なくとも近世から現代に至るまで大きな変更がなかったと考えられる。従って近世以前の土地区割が何らかの痕跡となって遺存している可能性がある。

一般に中山道は宿場町の出入口で大きく曲げて、町屋内の展望を妨げる場合があると言われている。

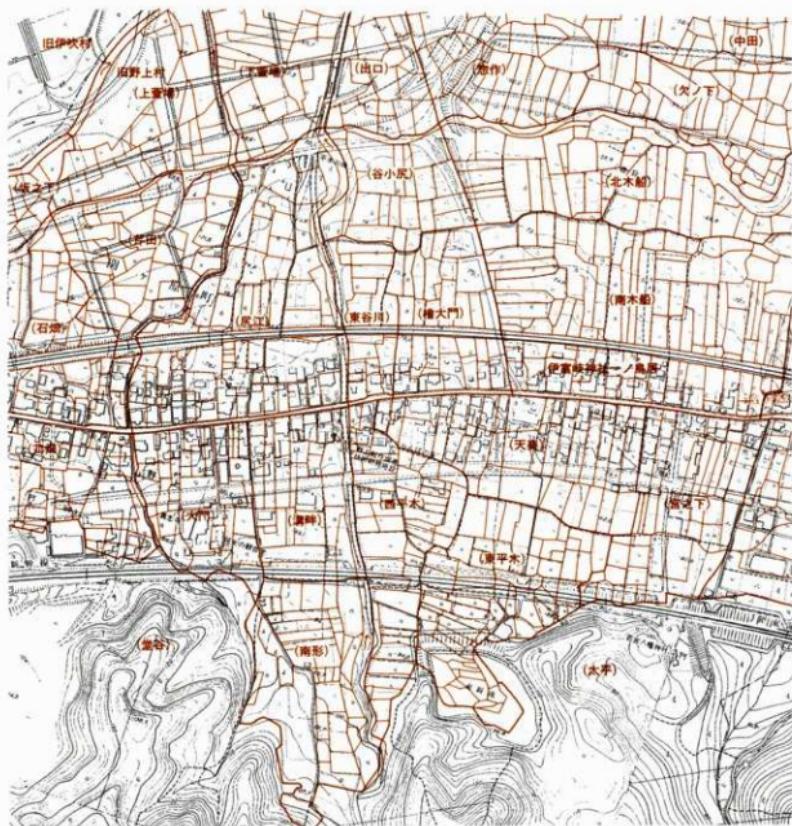
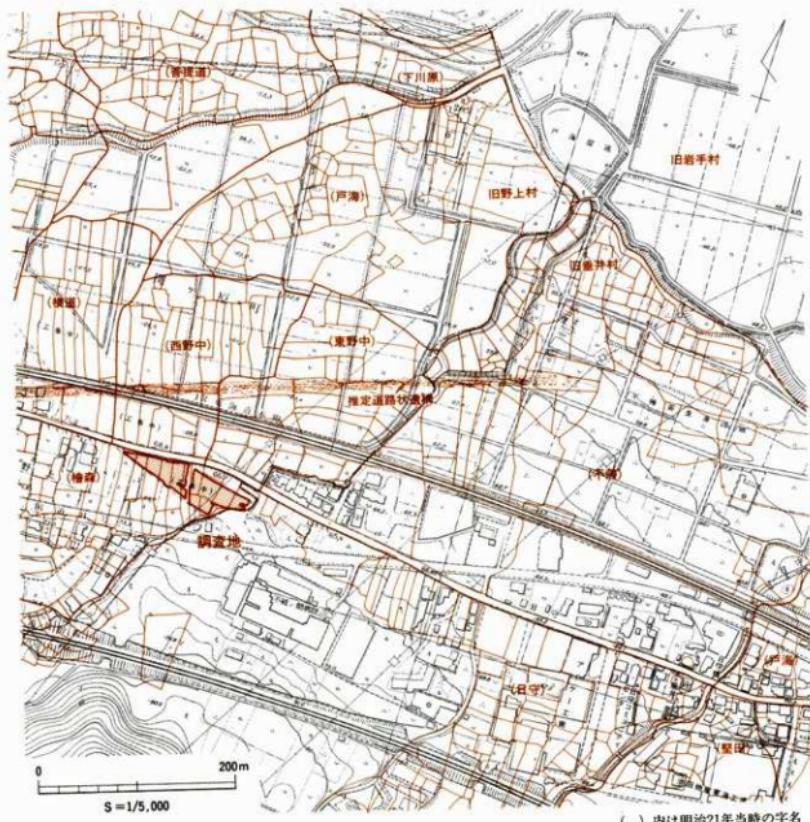


図5 調査地周辺の地割状況図

野上のは宿場町ではないが、西は桃配山から一の谷川下流域の低湿地を避けるようにして山裾を選び、東は町境付近から垂井宿場町に至るまで南に大きく迂回しているように見える。この中山道に面した宅地と畠地の区割りの方位は概ね真北からN9.0°Wの範囲であるが、字横道・西野中・東野中の畠地割りの場合はN19.5°Wとさらに西に傾斜する。これに直行して東西に直線的に延びる帯状区割りが認められ、その方位はN72.5°Eを測る。その範囲は宇南木船から垂井町大字日守字不帰まであり、道路などの痕跡の可能性が考えられる。

注

- 1) 都市計画図は関ヶ原町役場・垂井町役場所蔵のものを複写し、地籍図は両役場所蔵のものをトレイスした。



第2節 歴史的環境¹⁾

当遺跡の周辺には周知の遺跡が数多く点在しており（図6・表1）、発掘調査によってその内容が明らかにされたものも多い。ここではそれらを中心に時代順に概略を述べる。

旧石器時代の遺跡は発見されていない。縄文時代では梨木川流域で中野A地点遺跡（檜崎1965）と小関御祭田遺跡（大知・藁科1997）がある。中野A地点遺跡では中期後葉～末の竪穴住居跡1棟・平地住居跡3棟・屋外炉3基・集石遺構10基、小関御祭田遺跡でも中期後葉～末の竪穴住居跡1棟・集石遺構2基などが検出されている。この他広範囲にわたって早期から晩期の遺物が採集されているが、うち晩期土器は関ヶ原町松尾遺跡・垂井町日守遺跡・長尾遺跡・大滝野瀬遺跡で出土している。

弥生時代と古墳時代の遺物散布地としては、関ヶ原町南形遺跡・垂井町日守遺跡・朝倉遺跡・境野遺跡があるが詳細は不明である。古墳については相川の南北で分布が分かれることから、首長墓系譜は2つにグルーピングされている。すなわち相川南部の南宮山麓では南山古墳群・二又第一号墳・兜塚古墳へ、相川北部の平野部では忍勝寺山古墳・南大塚古墳へと続く系譜である。南山古墳群の中には古墳時代前期の可能性のある大型方墳も含まれ、地域色の濃い伝統的な墓制が展開したとされる（中井・原田1998）。なお周辺の分布調査では垂井町日守遺跡・長尾遺跡・上石津町堂ノ上遺跡などで鉄滓または銛滓が数多く採集されており、発掘調査では関ヶ原町不破の関跡でも炉壁・羽口と共に多量に検出されている（波多野編1978）。いずれも所属時期を特定できないが、製鉄と深い関連がある垂井町南宮大社や伊富岐神社の存在も含め、鉄生産に関わる重要な地域であったことが伺われる。

古代では大字野上の地は壬申の乱の舞台となり、「続日本記」によれば尾張宿祢大隅は大海人皇子を私邸に迎え行宮としたとしている。その後美濃国西端に不破関が整備され美濃国府・不破郡家・不破駅家などの官衙や、有力豪族によって宮廐寺・宮代庵寺・大領神社などが集中して造営された。美濃国分寺・美濃国分尼寺もその北東部に隣接しており、これらを結ぶ形で東山道が機能していたと想定されている。律令体制下においては条里が施工され、大垣市杭瀬川から南宮山東麓にかけて不破郡条里の遺構（阡線方位はN 5°W前後）が所々で認められている（中井編1997）。

中世には野上宿・垂井宿が宿駅として繁栄する。野上宿は和歌や一条兼良の『ふち河の記』や菅原孝標女の『更級日記』などに登場し、斑女伝説でも著名である。『なくさめ草』では「野上などいふ所は、さともかすかに、うかれ女もなし」とあり衰退したような印象を受ける。15世紀中頃の様子である。一方の垂井宿は13世紀前葉頃には整備され、以降発展を遂げる。この他中世遺跡としては長屋氏屋敷跡・南宮大社経塚群・栗原九十九坊跡・民安寺跡・伊富岐神社1・2号経塚などがある。

近世に入ると中山道が整備されるが、調査地の約500m東には一里塚が遺存し、大字野上では沿道の松並木が天然記念物として関ヶ原町の指定を受け保護されている。

注

1) 遺跡地図と名称及び所属時代は、「改訂岐阜県遺跡地図」（岐阜県教育委員会1990）に依った。ただし南整理遺跡の所属時代は今回の発掘調査の成果を踏まえた。なお垂井町内の様相については、飯沼暢康・鈴木隆雄（当センター調査員）より助言を得た。



図6 調査地周辺の遺跡地図 (S = 1/50,000)

表1 調査地周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1562	南整埋遺跡	調文～近世	2013	法華塚	中世(室町)
1551,1552	中野A地点遺跡、B地点遺跡	繩文	2014	長屋氏屋敷跡	鎌倉・室町
1553	開ヶ原与市塚	中世(鎌倉)	2015	郷学西水施跡	近世(江戸)
1554	大栗毛遺跡	繩文	2016	童井の泉	
1556	森前遺跡	繩文	2017	紙屋塚	奈良・平安
1557	池下遺跡	繩文	2018	金蓮寺跡	鎌倉・室町
1558	堂ヶ谷遺跡	繩文	2019	春王安王の墓	室町
1559	南方遺跡	調文～平安	2020	宮越寺跡	白鳳～奈良
1560	溝畦遺跡	調文～平安	2024	朝倉グランド遺跡	奈良・平安
1561	天楽遺跡	調文～平安	2025～2028	朝倉1号古墳～4号古墳	古墳
1964,1965	伊富岐神社1号經塚、2号經塚	平安	2029	真禪院遺跡	奈良・平安
1966	長尾遺跡	調文～平安	2030	宮代道跡	奈良・平安
1967,1968	長尾1号古墳、2号古墳	古墳	2031	隅松寺古墳	古墳
1969～1973	長煙1号古墳～5号古墳	古墳	2032	よろい塚古墳	古墳
1974	乙井古墳	古墳	2033～2037	中屋敷1号古墳～5号古墳	古墳
2000	国分尼寺跡	奈良	2038	兜塚古墳	古墳
2002	辨送山古墳	古墳	2039	南宮神社神宮寺跡	近世(江戸)
2003	美濃国府跡推定地	奈良	2040	最勝寺觀音堂	安土桃山・江戸
2004	民安寺跡	平安	2041	大領神社北古墳	古墳
2005	国府上恩跡	奈良	2042	大領神社古墳	古墳
2006	忍勝寺古墳	古墳	2043	森上古墳	古墳
2007	若宮古墳	古墳	2044～2046	杉ノ本1号古墳～3号古墳	古墳
2008	ごがね古墳	古墳	2047	宮代魔寺跡	白鳳～奈良
2009	赤辺古墳	古墳	2048	谷の舞古墳	古墳
2010	新井中根古墳	古墳	6967	南野遺跡	調文～平安
2011	垂井一里塚	近世(江戸)	7001	日守遺跡	繩文・平安・奈良
2012	日守塚古墳	古墳	7002	朝倉遺跡	調文～弥生

第3章 基本層序

調査年度により層位番号は別に付け(平成9年度はローマ数字、平成10年度は算数字)、遺構番号は通し番号とした。遺物の注記もこれに従い、本書では層位・遺構番号は発掘段階で命名した略号や番号に依った。ただし遺構の性格が判明したものについては名称を変更し、同一遺構であることが判明したものについては欠番扱いにした。次に調査年度間の層位の対応について述べる。平成9年度調査では表土をI層、遺構検出面の土層をII層、II層以下をIII・IV層とした。厳密な層位の対応は困難であるが、敢えて記すとI層が1・2層、II層が3・4・7層、III・IV層が4～7層となる。

基本層序は以下の通りである(図8)。

- 1層 2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト質埴土他(表土・水田耕作土・整地土・搅乱を一括)
- 2層 5Y 2/2 オリーブ黒色シルト質埴土(鉄分が沈着し、しまる。)
- 3層 2.5Y 4/2 暗灰黄色埴土(よくしまる。径3cmまでの円礫を多量に含む。)
- 4層 2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト質埴土(部分的にマンガン斑が見られる。水分を含み小規模な自然流跡路が多数点在する。遺物を少量包含する。)
- 5層 10YR 3/4 暗褐色重埴土(径5cmまでの亜円礫を少量含む。)
- 6層 10YR 2/3 黒褐色軽埴土(径10cmまでの亜円礫を含む。)
- 7層 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色埴土(粗砂から径30cmまでの円礫・亜円礫を多量に含む。)
- 8層 10YR 2/2 黑褐色軽埴土(径2～5cm程度の円礫を含む。)

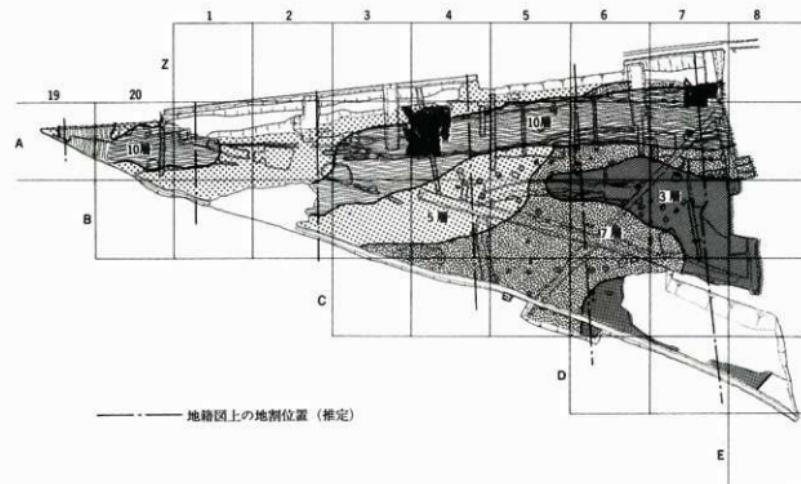


図7 第1調査面土層検出状況図

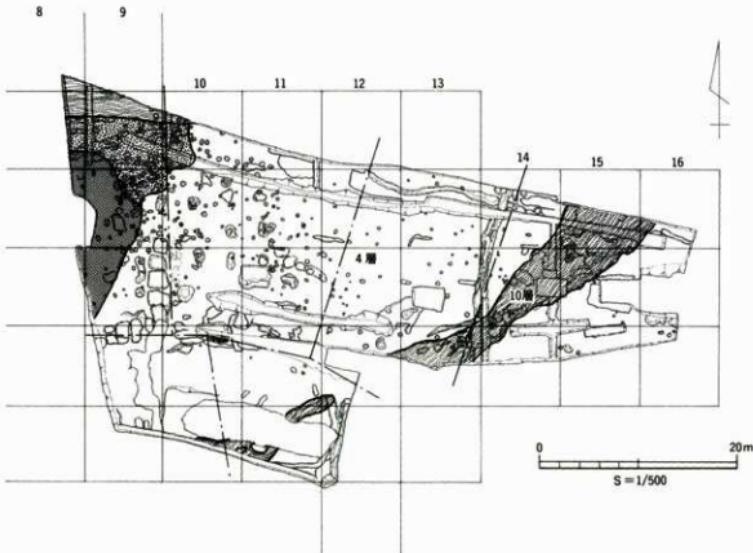
9層a 10YR 4 / 3 に由い黄褐色シルト質埴土（径5~15cm程度の円礫・亜円礫を含む。）

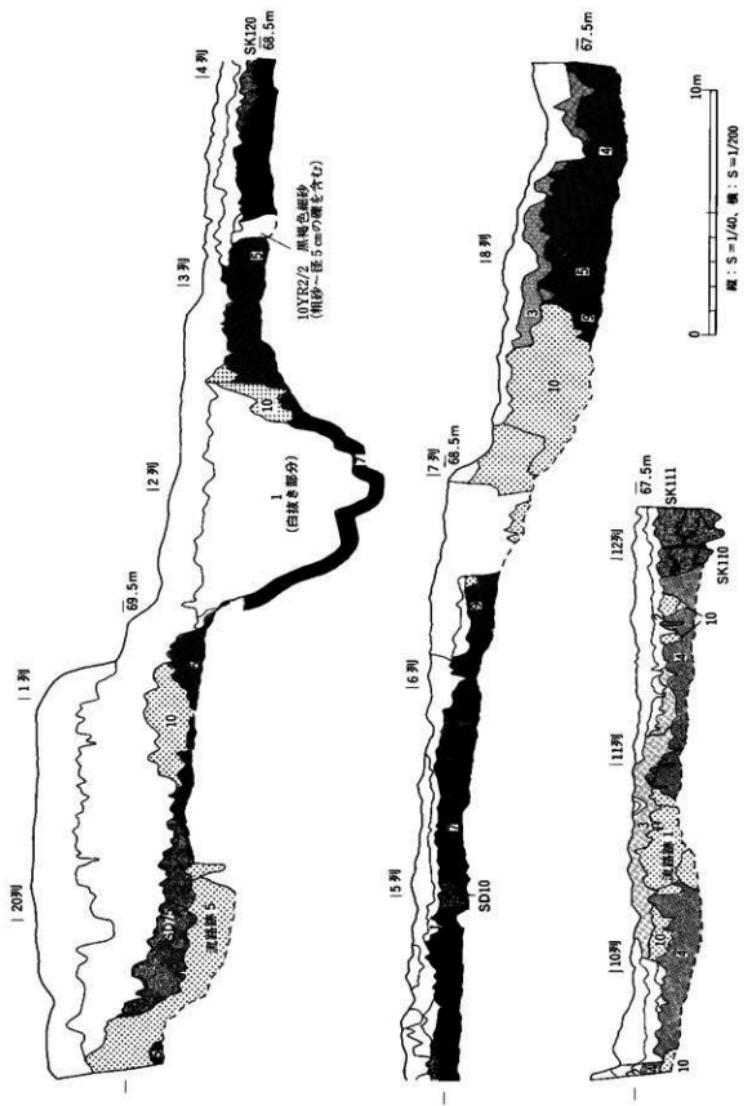
9層b 7.5YR 4 / 4 褐色重埴土（径5cmまでの円礫・亜円礫を少量含む。）

10層 5 Y 2 / 1 黒色砂土他（粗砂から径10cmまでの円礫・亜円礫で構成される。7層を除く全ての自然流路跡を一括した。遺物を少量包含する。）

第1調査面土層検出状況図（図7）は空中写真から読みとて作成した模式図である。基本層序のうち1~3層は現代の削平等がない限り調査区のほぼ全面で確認されたが、4層以下はその範囲が限定される。調査区中央のみに帶状に広がる7層を基準にしてみると、以西・以北に5~10層が、以東・以南に3~4層が分布する。その他の土層については次のことが発掘段階で判明している。6層はB4区から西北に向かって層厚を増しながら緩やかに傾斜し、A2区で最大厚52cmを測る。8層はB6区からA7区にかけて局的に分布し、C6区で最大厚75cmを測る。9層はD7区からB8区の線上で検出高が最も高く標高約67.3mを測り、東西に落ち込む。調査地東端で類似土壤があり同一土層とするならば東地区の中央が大きな崖地を呈する可能性がある。以上のことから、調査地中央に南北から北東にかけて9層が帶状に堆積し、その東西に埋没谷が存在したと想定する。その谷の西側を8→7→6→5→10層の順に、東側を4~10層によって埋没する。つまり9層の起伏を埋める形で堆積が進行したといえようである。

第1調査面は4~5~7の各層の上面で平面的に検出されたが3層上面で確認できた箇所もあることなどから、遺構面や直上の包含層がかなりの削平を受けたものと予想される。第2調査面はIII・IV層中で行い、第1調査面の遺構の掘り残しや小規模な自然流路跡が存在した以外、積極的に認められる遺構は検出できなかった。





第4章 遺構と遺物

第1節 遺構・遺物の概要

第1調査面検出遺構の概要

第1調査面では、古代～近世に至る遺構を検出した。その主な内訳（図9）は古代～中世後期の掘立柱建物跡5軒・柵3条・道路状遺構1条、近世の積石遺構2基・石垣・盛土状遺構1条・道路状遺構1条であり、この他各時期の溝・自然流路跡・土坑・小穴を多数検出した。



図9 第1調査面検出の主要遺構

第2調査面検出遺構の概要

第2調査面では溝・土坑・小穴を数箇所で検出したが、覆土内の出土遺物が少ないとほんどの遺構の所属時期は不明である。ただしこのうちの土坑1基は中世前期に位置することが判明した。この他遺構検出面で縄文時代晚期の土器集中区を検出した。

遺物の概要

出土遺物は縄文時代草創期～江戸時代末まで多岐にわたり、土器・陶磁器類が大半を占めごく少量の土製品・石器・金属製品・錢貨・鉄滓・焼粘土塊・炭化材で構成される。その数量は接合前破片数（1cm以上）で土器・陶磁器は8,286点に及び、石器9点、金属製品32点、錢貨8枚、鉄滓13点（第5章第2・3節で詳述）である。このうち土器・陶磁器の主体は縄文時代晚期末・古墳時代・奈良時代後期・平安時代末～鎌倉時代初頭・室町時代後半に属する。個々の遺物の分類・年代観は既存の編年（参考文献に一括して記載）を参考にした¹⁾。焼粘土塊は小片が計9点出土したがうち1点は繩の羽口の可能性もある。炭化材については土坑から出土したものを取り上げたが、材の端部を截断したもののがほとんどであり、重量値のみ掲載する。

次節以降では出土遺物のうち土器・陶磁器は遺構・遺跡の性格を端的に示すものを抽出して図示し、他は図示可能な遺物は原則として全て掲載した。

注

1) 遺物の分類と観察に際しては、成瀬正勝・春日井恒・小野木学・増子誠（当センター調査員）の助言を得たが、本書における分類名の記載・観察内容の責任は編集者にある。

第2節 第1調査面の調査

1. 挖立柱建物跡・槽(図10~17、表2、図版3~5)

掘立柱建物跡1(図11、図版3上)

当初P29~P32などを槽跡と想定したが、SK117・P417・P24がこの軸と並行することから最終的には 2×3 間の建物跡とした。SK117は東端をSD75に切られる形で検出されたため、東柱筋の中央も同じ理由により滅失したものと判断できる。いずれの柱穴の覆土も単層で黒褐色または暗褐色の砂質土であり、P30~P32からは少量の炭小片、P31からは焼成を受けた小砾が出土した。P31では掘方下面で柱当たり痕が検出され、直径約15cmを測る。

出土遺物には須恵器蓋杯(図17-1)などがある。

本遺構の所属時期は建物の軸の方位と柱穴内出土土器から、古代である。

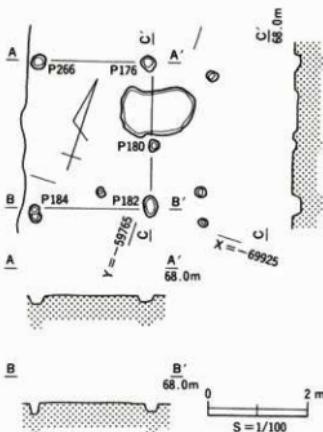


図10 挖立柱建物跡2

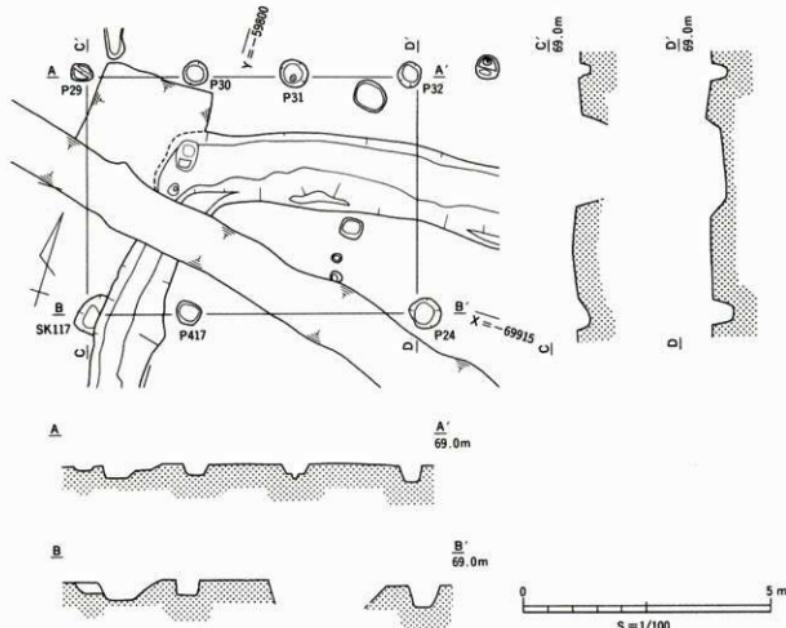


図11 挖立柱建物跡1

掘立柱建物跡2(図10、図版3下)

建物跡の東北隅を検出し、全体の規模は不明である。いずれの柱穴も柱痕跡ではなく、覆土は単層で黒褐色または暗褐色の砂質土である。

出土遺物には須恵器と灰釉陶器があるが、いずれも細片で図示できなかった。

本遺構の所属時期は建物の軸の方位と柱穴内出土遺物から、古代である。

掘立柱建物跡3(図12、図版4下)

P163・P235・P239は他の柱穴に比べてやや径が小さく深さも浅いことから北辺に1×2間の下屋または庇が付き、P163は深さが浅いことから南北に梁間方向をとる2間四方の建物跡であると考えられる。いずれの柱穴も柱痕跡ではなく、覆土はほぼ単層で黒褐色または暗褐色の砂質土である。SK34のみ上下2層に分層でき共に黒褐色の砂質土で水平堆積ではあるが、下層は粗砂が目立つ。

出土遺物には銭貨(元豊通寶、図17-21)などがある。

本遺構の所属時期は建物の軸の方位と柱穴内出土遺物から、中世前期である。

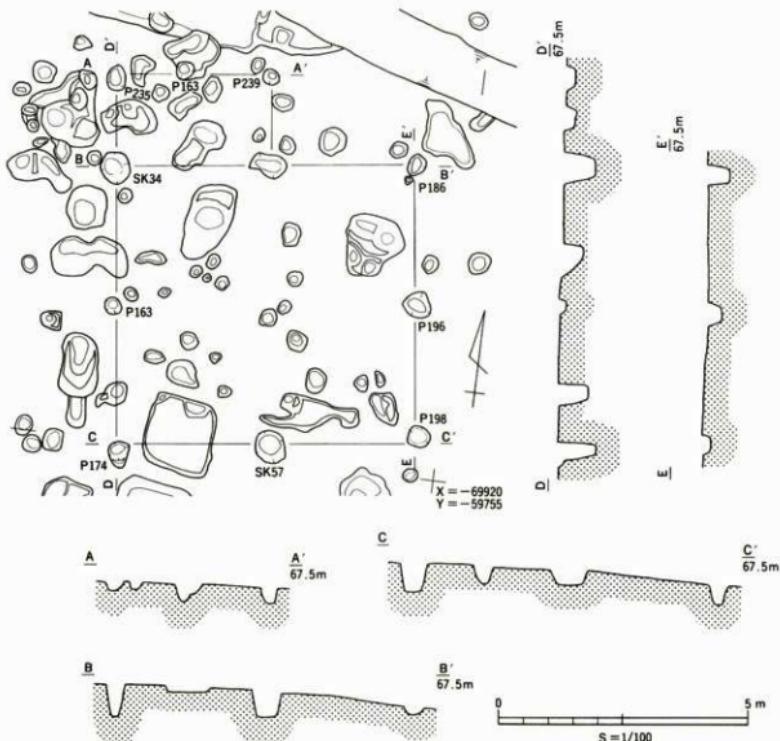


図12 掘立柱建物跡3

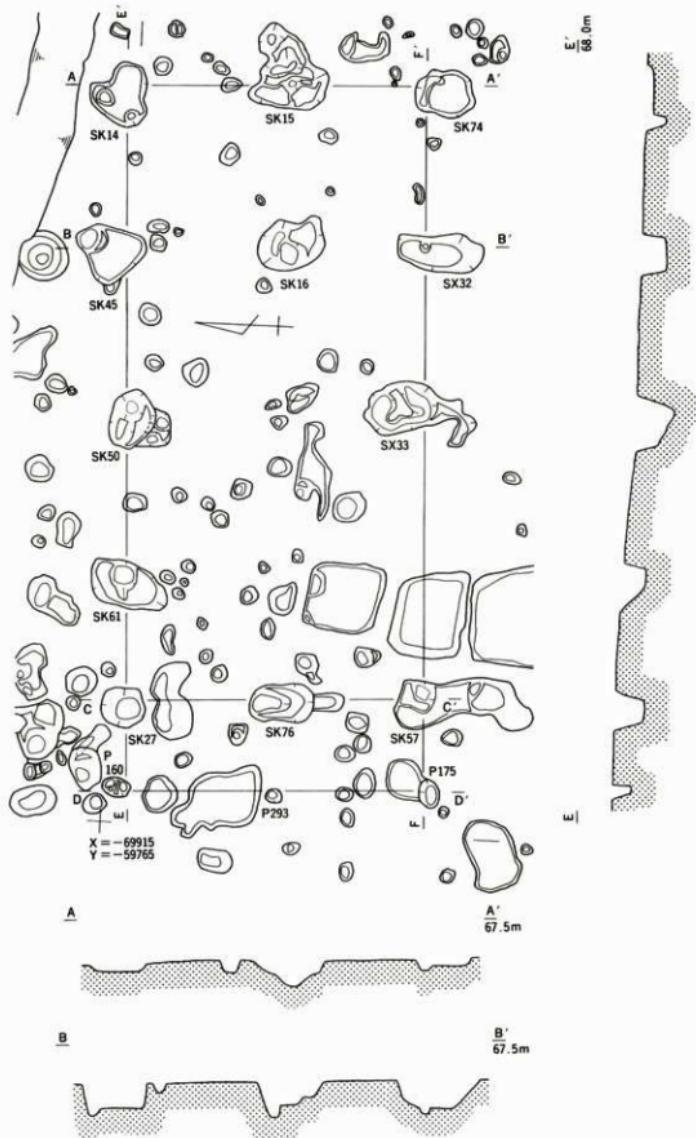
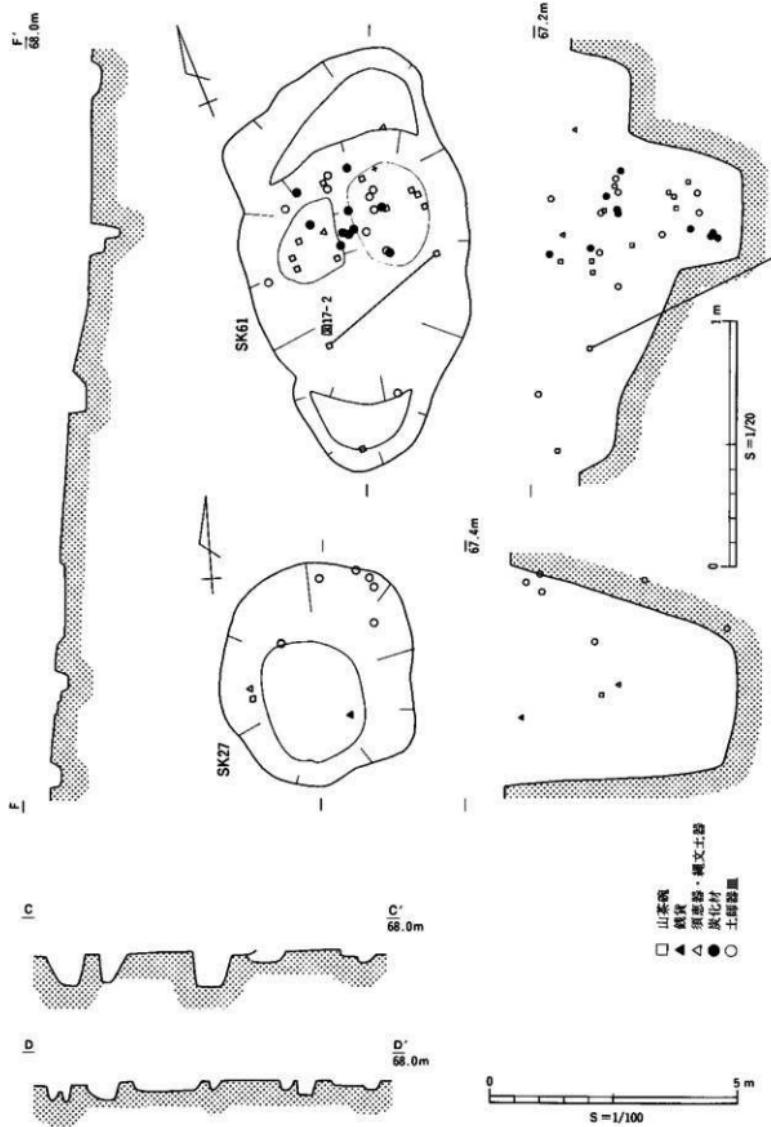


図13 振立柱建物跡4



掘立柱建物跡 4 (図13、図版4上)

P160・P175・P293は他の柱穴に比べてやや径が小さく深さも浅いことから、西辺に1×2間の底と考えられる付属施設がつく2×4間の建物跡である。いずれの柱穴も柱痕跡は検出されなかつたが、SX32では柱掘方下面で柱当たり痕が検出され、直径約26cmを測る。各柱穴は掘方の規模が大きく、時期の異なる別の遺構と重なりそれに伴う遺物が混入する可能性がある。そこで覆土内出土物が比較的多く、遺物の接合事例がみられた2例を取り上げて検討する(図13右図)。

SK27は断面観察によると上下2層に分層できる。出土遺物のうち銭貨(聖宋元寶と□豊通□)が上層から出土した。いずれも破碎しており聖宋元寶については二次焼成を受けている。中世後期土師器皿も破碎した個体で占められ上・下層に広く分布するが、中世前期山茶碗は出土点数が圧倒的に少ない。柱穴の覆土堆積状況と遺物の所属時期からみて、柱抜き取り後に土師器皿が混入したと考えられ

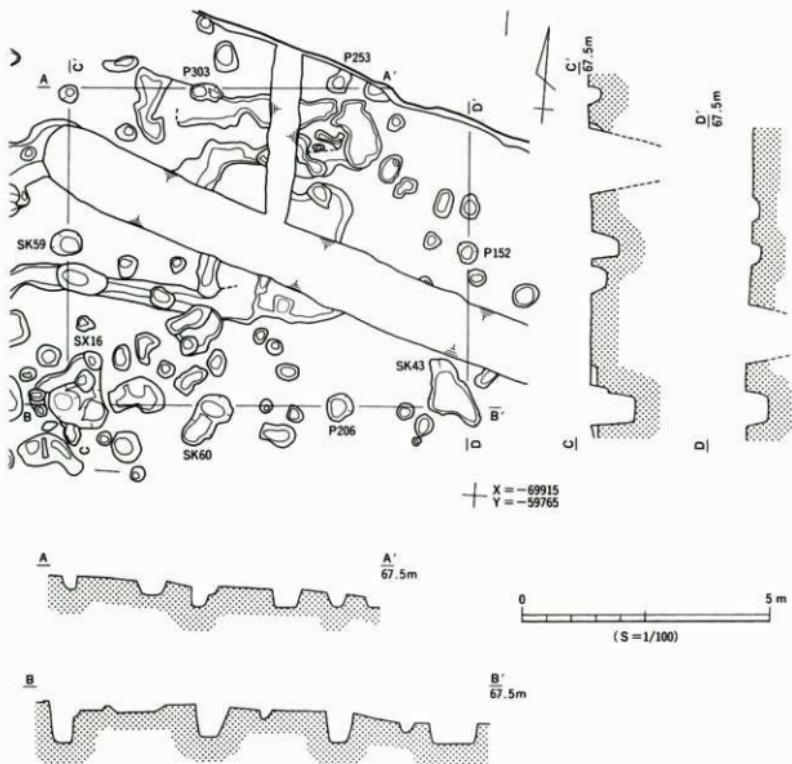


図14 掘立柱建物跡 5

る。次に SK61は遺構の平面形態からみて複数の遺構が重なっている可能性がある。掘方のエレベーションでは推定柱位置から南西方向に傾斜する。出土遺物はその推定柱位置を中心に点在し、土器以外に樹皮をもち長さ3~5cmに裁断された直径2~3.5cmの炭化材が計74.0g出土した。覆土上・下層で土器の接合事例が1点あるので、皿状土坑を土坑が切っているかもしくは柱抜き取り後の再堆積が考えられる。炭化材はSK15(27.3g)とSK76(13.8g)でも出土した。

出土遺物(図18-2~13)には山茶碗A(2・3)、小碗A(4)、古瀬戸平碗(7)、中世前期土師器皿(6)、中世後期土師器皿(9・10)、信楽甕(8)、瓦質土器羽釜(5)・火鉢(11)、錢貨(12・13)などがある。これらは所属時期に幅があり、遺構が埋没するまでの過程に混入したものであるか判断が難しい。

本遺構の所属時期は建物の軸の方位と柱穴内出土遺物から、中世前期である。

掘立柱建物跡5(図14、図版4下)

北東隅を欠くが2×3間の建物跡である。いずれの柱穴も柱痕跡ではなく、覆土は単層で黒褐色の砂質土である。炭化材がSK43から合わせて34.3g、SK60からは17.6g出土した。これらは検出した平面形態から、本遺構の柱穴と時期の異なった土坑が切り合ったものと判断できる。

出土遺物(図17-14~20)には山茶碗A(15)、小皿A(20)、古瀬戸擂鉢I類(18)、中国磁器青磁碗(19)・白磁皿(16)、中世後期土師器皿(17)、鎌(14)などがある。

本遺構の所属時期は建物の軸の方位と柱穴内出土遺物から、中世前期~後期である。

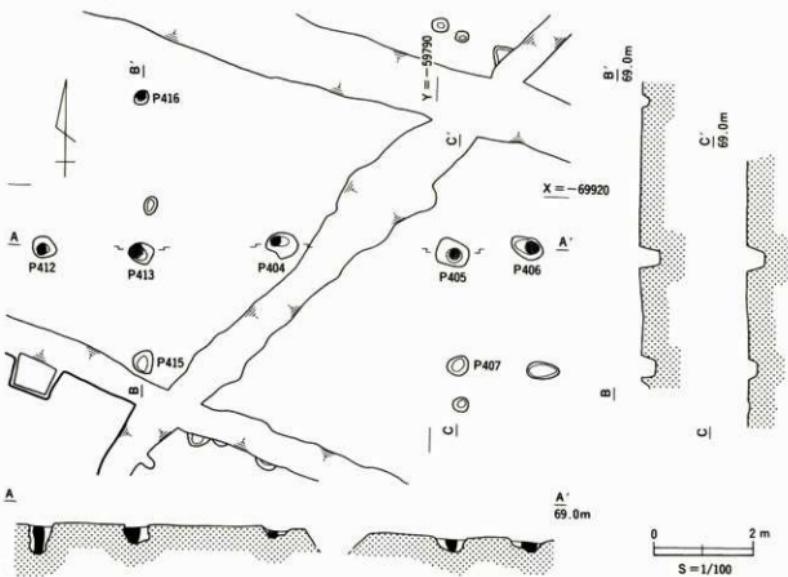


図15 横1

柵1(図15、図版5)

P404・406・412・413・416で柱痕跡を検出した。柱掘方の中で柱痕跡の位置は、P404・412・413では中央から西寄りに、P405・406では逆に中央から東寄りである。埋土は概ね柱痕跡が黒色細砂(粗砂～礫を含む)で柱掘方内埋め戻し土は黒色粗砂(検出面の7層土粒を含む)であるが、P404の柱掘方内埋め戻し土はオリーブ黒色細砂(粗砂を含む)でありやや異なる。P404は他の柱穴に比べて柱掘方の深さも浅いので一連の遺構ではない可能性もある。

南北柱筋の中央には柱穴を伴わずに柱間が約6.4m離れていること、P407とP415以南にも柱穴がなく建物と認定できないため、柵跡とみなした。立地を含めSD10の方位と整合する点から、上屋を伴わない何らかの施設の可能性もある。

出土遺物は須恵器、土師器、山茶碗、中世土師器皿などがあるが、いずれも細片で図示できなかつた。

本遺構の所属時期は軸の方位と柱穴内出土土器から、中世前期である。

柵2(図16上)

北から順にP126・252・283・133・134を柵跡と判断した。P126・252から古墳時代・古代の土師器、P252から中世土師器皿が出土した。本遺構の所属時期は軸の方位と柱穴内出土土器から、中世前期である。

柵3(図16下)

東から順にP54・SK68・P50・P106を柵跡と判断した。このうちP54とP50で柱痕跡を検出した。P106から古墳時代・古代の土師器が出土した。本遺構の所属時期は軸の方位と柱穴内出土土器から、中世前期である。

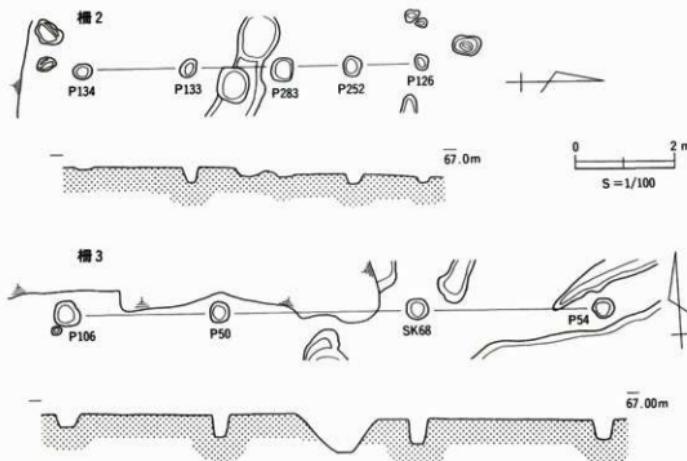


図16 柵2・3

表2 挖立柱建物跡・槽の属性一覧表

遺構名	地区名	構造(間)	桁行(m)	梁間(m)	面積(m ²)	軸の方位	所属時期
掘立柱建物跡1	B5他	2×3	6.7	4.8	32.16	N73.5° E(梁間方向)	古代
掘立柱建物跡2	C9	2×2以上	—	3	—	N73.0° E(梁間方向)	古代
掘立柱建物跡3	B10他	2×2	6.1	5.7	34.77[40.61]	N83.0° E(桁行方向)	中世前期
掘立柱建物跡4	B10他	2×4	12.6	6.1	76.86[88.27]	N87.0° E(梁間方向)	中世前期
掘立柱建物跡5	A9他	2×3	8.2	6.5	53.3	N86.5° E(梁間方向)	中世前期～後期
槽1	C5・6	—	—	—	—	N89.0° E(東西方向)	中世前期
槽2	B11-C11	—	—	—	—	N0.5° E(南北方向)	中世前期
槽3	D12-13	—	—	—	—	N86.0° E(東西方向)	中世前期

□内の面積は付属施設を含んだ数字

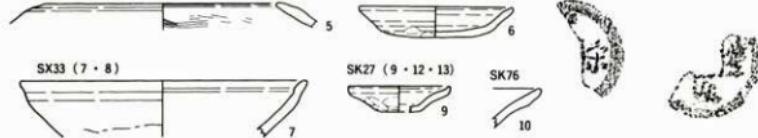
掘立柱建物跡1 P32



掘立柱建物跡4 SK61 (2~4)



SK50 (5・6)



SX33 (7・8)



掘立柱建物跡5 SK60 (14~17)

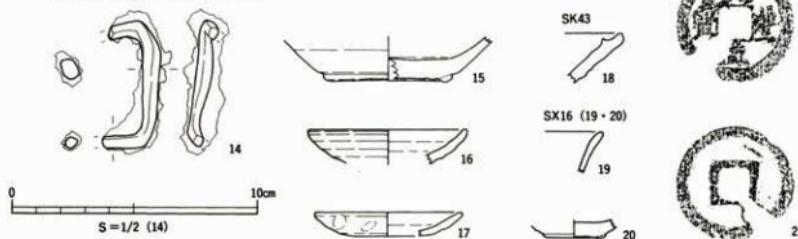


図17 掘立柱建物跡出土遺物

2. 積石遺構・石垣・盛土状遺構（図18～20、図版6～8）

これらの遺構はほぼ同時期で近接した位置関係にあるため、以下に一括して述べる。

積石遺構1（図18、図版6）

遺構の北辺は盛土状遺構に接し、南辺には基本層序でいう7層中の礫が露出し東辺は削平されて、東西4.45m・南北5.4m以上を測り、南辺の様相から全体の形態は正方形を呈すると考えられる。断面を観察すると、盛土状遺構の基底南面が人為的に削り出されており、基底面と本遺構の検出面の標高がほぼ一致する。また本遺構の礫出土状況は盛土状遺構内部と類似している。遺物の接合状況では両遺構出土土器の接合事例が5点確認でき、このうちの1例はZ7区の盛土状遺構と接合した。これらのことから地山面の削出（盛土状遺構1期）→積石遺構1の構築→積石遺構1周辺の削平・盛土（盛土状遺構2期）という遺構の重複関係が想定できる。

礫は拳大から人頭大までの円礫ないしは亜円礫を用い、平・断面図に見るように比較的乱雑に積んでおりそのためか締まりがない。礫の検出高は西南隅の低位面で標高68.55m、高位面で68.8～69.0mの2種類の違いがある。両者はN40°W前後の方位で直線的に明瞭な段を持つ。積石の厚さは低位面で0.13m、高位面で0.58mを測ることから自然營力によるものではなく人為的な所産であろうが、どのような性格であるか不明である。全ての礫を取り除くと中央南寄りで長楕円形の土坑（SD15）が検出されたが、遺物の出土がなくその主軸の方位からみて本遺構との関連はない。

本遺構の性格は不明である。

出土遺物（図20～25～41）には須恵器蓋杯（26・28）・甕（27）、灰釉陶器椀（29・30）、山茶碗A（31）、小碗A（32）、古瀬戸縁釉小皿（33）、短頸壺（34）、常滑片口鉢I類（35・36）・甕（37～40）、瀬戸美濃灰釉丸碗（41）、瓦（25）などがある。

本遺構の所属時期は後述する盛土状遺構1期と同時期かそれよりも後出するので、近世初頭である。

積石遺構2（図19、図版7）

盛土状遺構を構築する際に大きく改変を受けたと考えられ、現況では東西4.5m・南北2.2mを測り平面形態は不明である。発掘当初本遺構は石垣の存在から盛土状遺構より後出のものと判断したが、断面を観察すると積石遺構1と同様に盛土状遺構の基底南面が人為的に削り出されており、基底面と本遺構の検出面の標高がほぼ一致している。本遺構の北辺は盛土状遺構の内部にも広がっていくよう見受けられるが、礫の量に対し土の比率が多いことから本遺構周辺の削平・盛土を物語っている。よって地山面の削出（盛土状遺構1期の構築）→積石遺構2の構築→積石遺構2周辺の削平・盛土（盛土状遺構2期の構築）という遺構の重複関係が想定できる。

礫は積石遺構1と同様に拳大から人頭大までの円礫ないしは亜円礫を用い、比較的乱雑に積んでいる。礫の検出高は石垣1以北で標高68.15m、以南で標高67.8m、以西では標高67.9～68.3mを測る。積石の厚さは石垣1以北で約0.42m、以南で約0.27mを測る。石垣1以南のテラス部分は広範囲にわたって水平に整えられ、石垣1西端からテラスにかけて幅約1.1mの傾斜面がある。

本遺構の性格は不明である。

出土遺物（図20～22～24）には山茶碗A（22）、古瀬戸卸目付大皿（23）、常滑片口鉢I類（24）がある。

本遺構の所属時期は後述する盛土状遺構1期よりも後出するので、近世初頭である。

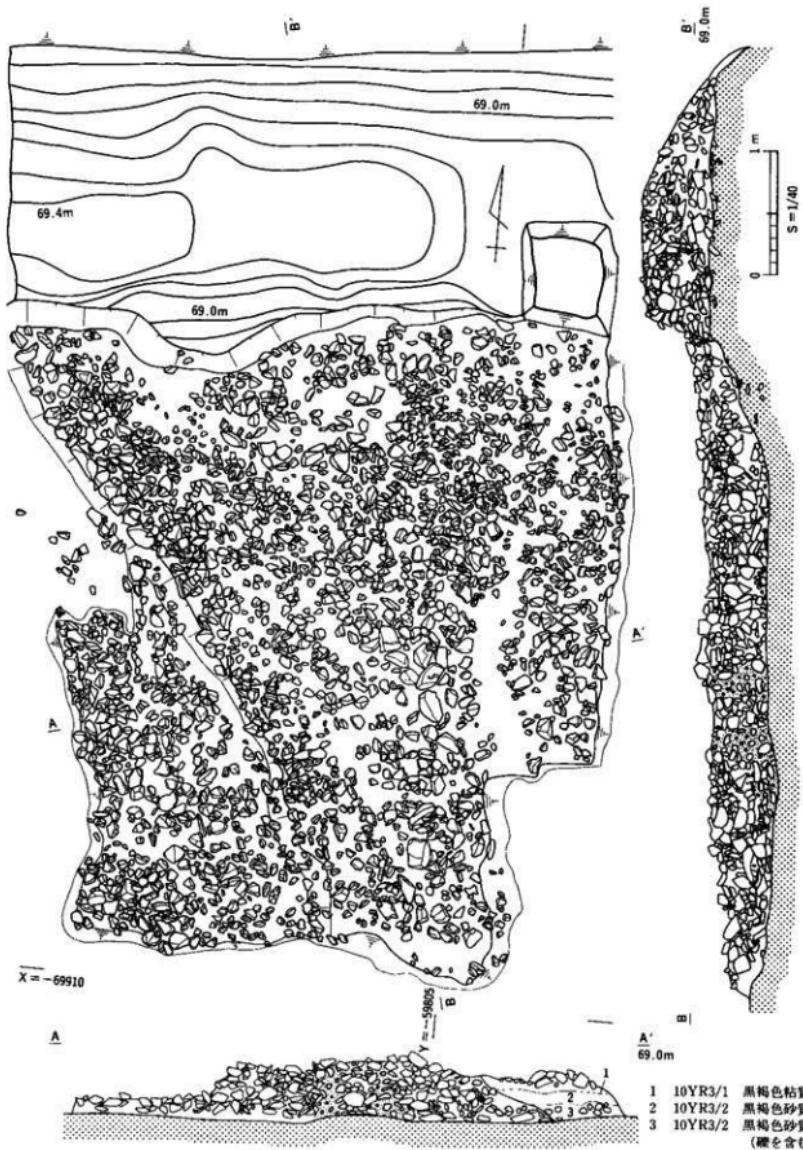


図18 積石遺構 1

石垣1（図19、図版7）

盛土状遺構の南面を保護する形で積石遺構2のテラス部分の上に野石を2～3段（高さ0.3m程度）に乱積みしている。このことから本遺構は盛土状遺構2期の構築際に築かれたものである。その範囲は調査区外に延びて東西3m以上を測る。なお積石遺構1の地点の盛土状遺構にも、崩落を防ぐために石垣を設けていたことも予想できる。

遺物は認められなかった。

本遺構の所属時期は後述する盛土状遺構2期の構築時期に近く、近世後期以降の可能性がある。



図19 積石遺構2・石垣

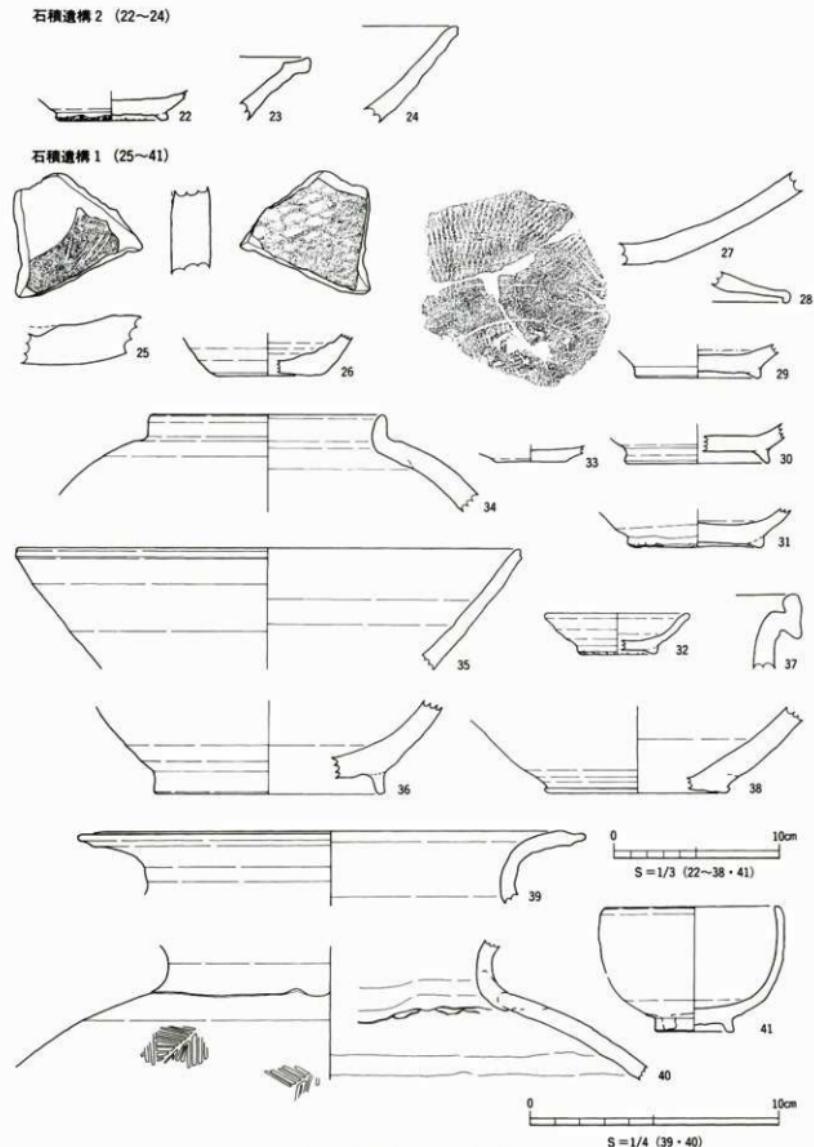


図20 積石遺構 1・2 出土遺物

盛土状遺構（図21～23、図版8）

旧中山道に沿って5・6区を除く東西約50mにわたって検出した。遺構の上面の幅は0.8～2.3m、下面の幅は2.4～3.3mを測る。盛土状の高まりに直行して設定した4箇所のトレンチの断面をみると、いずれも基本層序の3層の直上に位置している。盛土状遺構の内部は疊混じりのしまりのない砂質土か粘質土で、精査を行うたびに礫が次々に落下する状況であった。分層可能な箇所では合計4層から成り、A20・A3区では下部に粗砂～径1cm程度の小礫を多く含む土層があり流路跡の一部と考えている。A20区周辺では本遺構に接する形でSD75（東西の長さ16m以上）が検出された。このSDの深さは北辺で0.35mと深く立ち上がりが急で、南辺では0.1mと浅く緩やかである。SD直下の流路跡4・5には粗砂～径20cmの礫と共に中世以前の遺物を多く含む点は盛土状遺構内の様子と類似しており、SD75を掘削して生じた土を盛った可能性もある。ただし遺物等の接合関係などで遺構間の土の移動を明らかにすることができないため、盛土状遺構と呼称するにとどめる。先述したように積石遺構1・2との重複関係から、盛土状遺構の構築は大きく2期に分けられ、盛土の可能性の高い1～4層は2期に属し、南辺の削り出しは1期に属する。

本遺構上面には4箇所で樹木の痕跡が検出された。各々の間隔は西から順に16.0m、13.8m、29.0mを測るが、削平箇所を考慮するとおよそ14～16mの間隔で並ぶ。これらは所属時期を限定することが難しいため、樹種同定は行わなかった。

出土遺物（図22・23）には須恵器長頸壺（42）、山茶碗A（46・47）、小皿A（48）・小皿A（49）、鉢（59）、古瀬戸平碗（50・51）・折縁深皿（54）・卸目付大皿（56）・卸皿（52）・擂鉢（55）・天目茶碗II類（53）、常滑片口鉢I類（58）・三筋壺（57）・甕（60・61）・土師質火鉢（84）、中国陶磁青磁碗（45）・白磁椀（44）・白磁皿（43）、瀬戸美濃灰釉丸碗（66）・広東茶碗（70・71）・箱形湯呑碗（72）・湯呑（67）・染付湯呑（68）・蓋（73）・火入れ？（74）・中鉢（75）・輪禿皿（76）・火鉢（80）・土鍋？（81）・徳利（82）・水甕（83）・擂鉢（85）・甕（86）、肥前染付丸碗（69）、土瓶（77～79）、瓦（62・63）、加工円盤（64・65）、錢貨（87・88）などがある。このうち88件の古窓永は2層から出土している。

盛土状遺構1期の構築時期は後述する流路跡4・5埋没後であり、2層出土の錢貨の所属時期から、近世初頭である。盛土状遺構2期の構築時期はZ7区の2・3層出土の輪禿皿（76）から、近世後期に下る可能性がある。

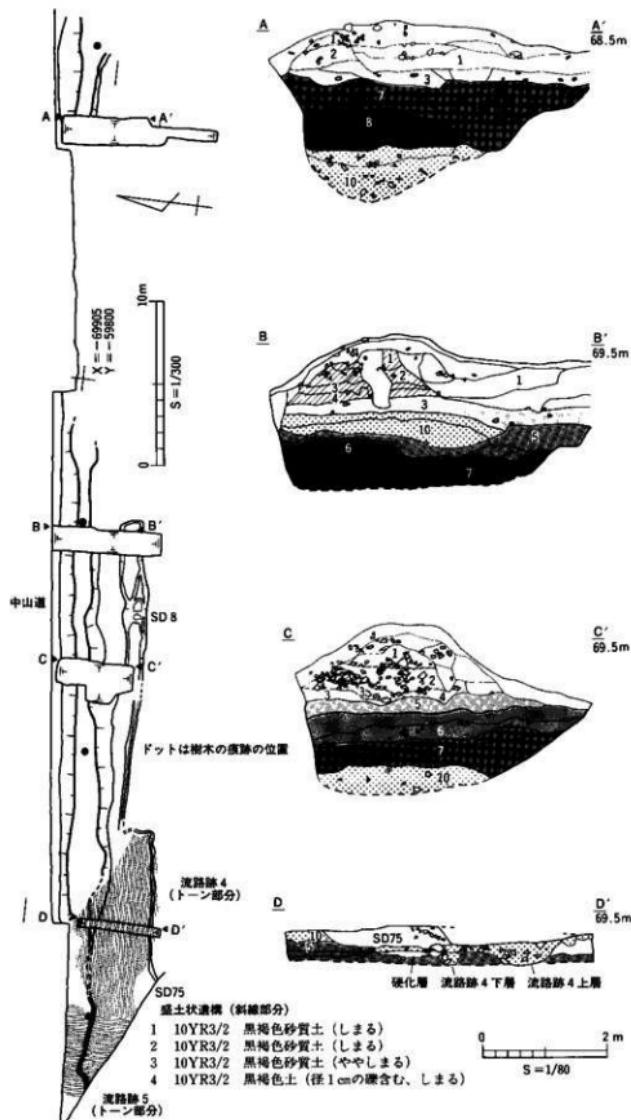


図21 盛土状遺構

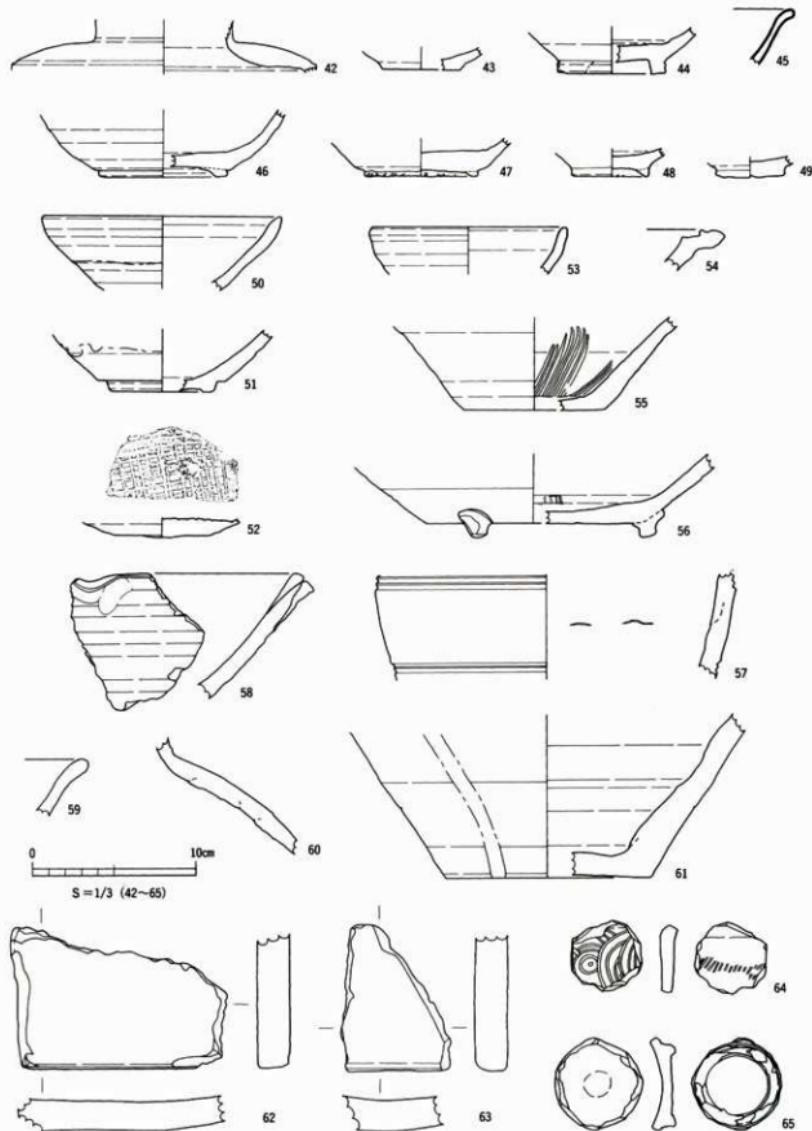


図22 盛土状造構出土遺物①

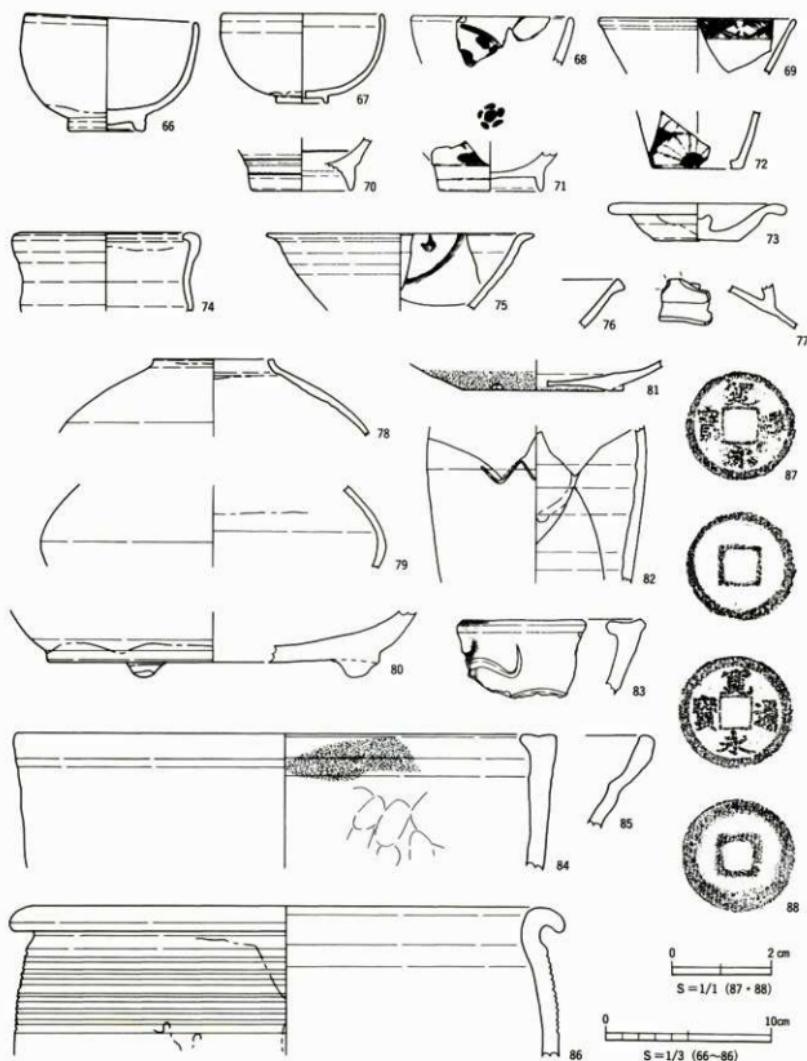


図23 盛土状造構出土遺物②

3. 溝・自然流路跡・道路状遺構（図24～37、表3～6、図版9～12）

溝（図24～27、図版9）

溝として現地で確認した遺構は多数あるが、検出した溝の長さが短いために性格が不明なものが多い。これらは個々の属性と覆土内出土遺物の内訳を表3・4で一括して示すにとどめ、ここでは主な溝について補足説明する。

SD 1

溝の北半を検出した。溝の幅は狭く浅い。図7の地割方向に並行する。

出土遺物には須恵器と土師器がある。

本遺構の所属時期は不明である。

SD 6

西端が現代攪乱によって切られている。溝の立ち上がりが垂直に近い特徴がある。位置関係から東地区のSD44に統くと考えられる。

出土遺物には須恵器、山茶碗A（図27-97）、常滑壺か甕、古瀬戸～大窯天目茶碗がある。

本遺構の所属時期は中世である。

SD 8

溝の東西で幅が大きく異なるので異なる2本の溝の可能性もある。東半の断面図をみると南辺の立ち上がりは急で北辺は緩やかである。他の溝より幅がかなり広く盛土状遺構と並行していることから、SD75と同種とみられる。

出土遺物には須恵器、灰釉陶器、山茶碗、常滑壺か甕、古瀬戸～大窯天目茶碗がある。

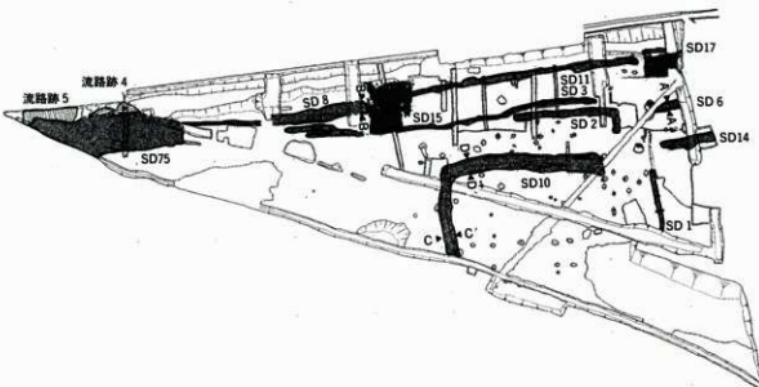


図24 溝・自然流路跡の配置図

本遺構の所属時期は道路状遺構1よりも新しいと考えられるので、近世初頭である。

SD10

平面形態は逆L字形に屈曲する。溝の西北隅は直行せずN10.0°Eの角度で角を切っているのが特徴である。溝の断面形態（図25）をみると北辺・西辺共に外側の立ち上がりは急で、内側に向かって緩やかな傾斜面ないしはテラスを持つ。断面を観察すると最下層は粗砂を含む水性起源の堆積物であり、この層から花粉分析に耐えうる資料が検出されたことから、溝内は花粉が保存される環境にあったことが判明した（第5章第4節参照）。なお6.4m東のSD14は溝の断面形態が類似しているが長軸の方位をやや北に振る。

出土遺物（図27-98～105、125）には山茶碗A（98）、小皿A（99）、古瀬戸天目茶碗（102・103）、片口小瓶（104・105）、中国陶磁青磁碗（100）、白磁皿（101）、釘？（125）などがある。

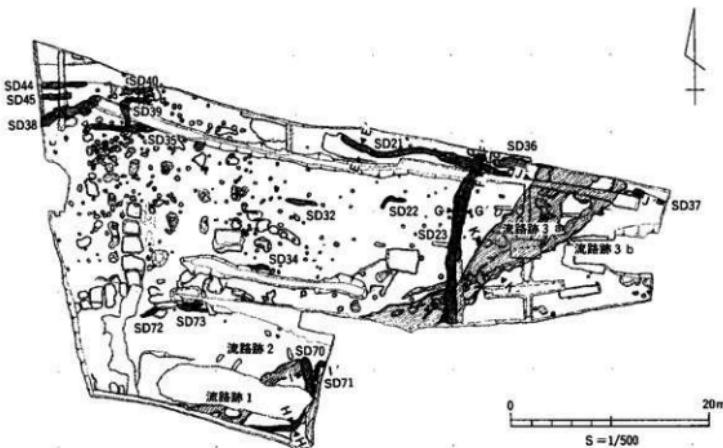
本遺構の所属時期は中世前期である。

SD21

SD23に切られる形で東端を除くほぼ全体を検出した。溝の中央でクランク状に屈曲し東西で断面形態がかなり異なるので、異なる2本の溝の可能性もある。東半は南辺の立ち上がりが垂直に近く、北辺が約45度の傾斜を呈する。

出土遺物（図27-109～112）には須恵器、土師器、山茶碗、鉢（112）、古瀬戸縁釉小皿（109）、擂鉢II類（110）、常滑窯か窯、中世後期土師器皿・羽釜（111）がある。

本遺構の所属時期はSD23掘削前に埋没していることから近世初頭以前であることは明確であるが、掘削時期の上限については不明である。



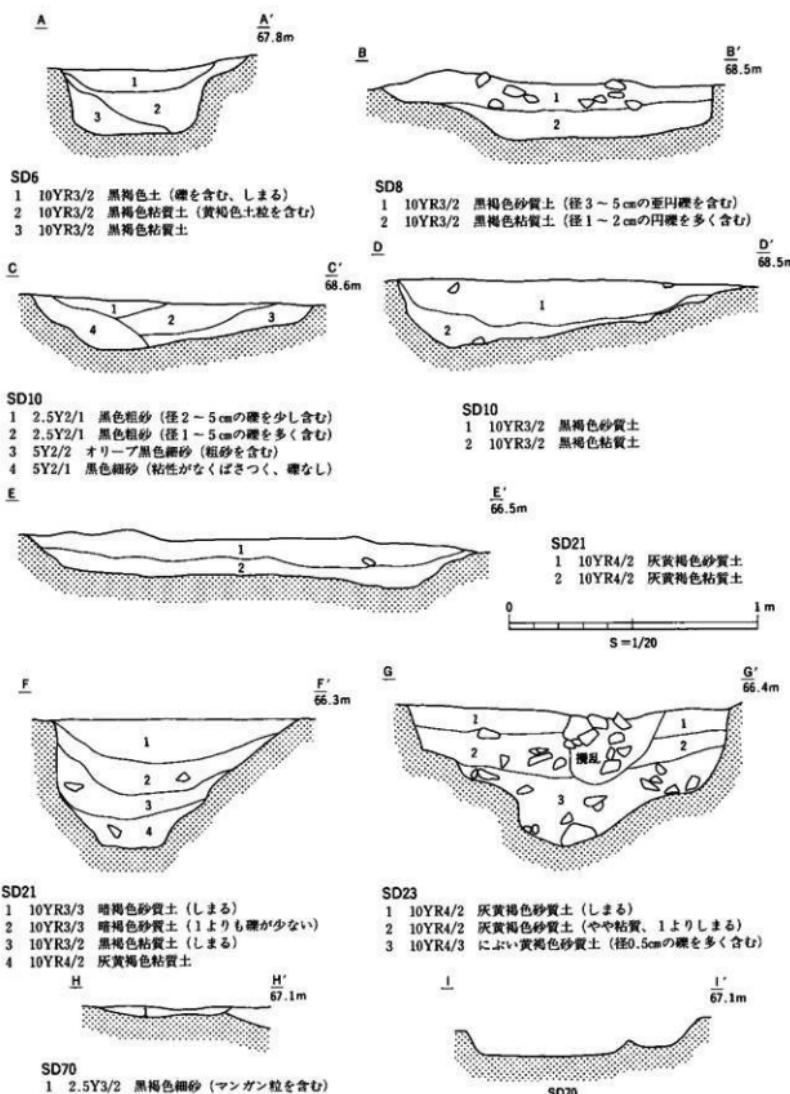


図25 各溝の土層堆積状況図

SD23

II層上面で検出した。B14区（北半）とC14区（南半）で溝の方位が異なり、北半は図7の地割方向に並行している。溝の断面形態と土層堆積状況から幅0.3~0.6m・深さ0.55~0.81mの溝を、幅0.9~1.8m深さ0.25~0.32mの溝に拡幅した可能性もある。検出時に確認した重複関係から、SD21と流路跡3の埋没後に掘削されている。

出土遺物（図26~90、図27~113~116、123、124、127）には磨製石斧（90）、山茶碗A（113）・B（114）、中国陶青磁碗（115）・青磁皿（116）、不明鉄製品（123）、刀子（124）、錢貨（127）がある。本遺構の所属時期は遺構の重複関係と古寛永の出土から、近世初頭である。

SD70

平面形態は逆L字形に屈曲する。東南隅がSD10の西北隅と類似しN27.0°Eの角度で角を切っている。溝の東辺の北側では下端の様子から一部溝の掘り直しが認められ、そのために南辺に比べて幅が広い（図25）。遺構検出面が現地表面から浅いために溝の遺存状態は悪く、わずかな立ち上がりが認められた程度である。検出時に確認した切り合い関係から、SK110と流路跡3の埋没後に掘削されている。

出土遺物には須恵器、灰釉陶器、土師器、山茶碗、中国磁器白磁碗、中世土師器皿がある。

本遺構の所属時期は中世前期である。

表3 各溝の属性一覧表①

遺構名	地区名	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	方位	覆土の特徴	所属時期
SD1	B7	6.3以上	0.38~0.45	0.12~0.25	N10.0° W	10YR3/3	不明
SD2北辺	A6~7	10.5	0.5~0.8	0.16	N88.5° E	10YR2/2砂質土(縫多い)	中世前期
同東辺	同上	2.5	0.54~0.66	0.24	N4.0° W	同上	同上
SD3	A3~5	29.7	0.18~0.6	0.12~0.31	N86.0(東半)87.5(西半)° E	2.5YR3/1砂質土	中世
SD6	A4	2.7以上	0.68~1.0	0.29	N80.5° E	図25	中世
SD8	A1~2	7.8以上	0.23~0.37	0.11~0.17	N89.0° W	図25	近世初頭
SD10北辺	B4~6	15.9	1.42~1.9	0.18~0.28	N87.5° W	図25	中世前期
同西辺	同上	10以上	1.05~1.38	0.21~0.38	N10.5° W	同上	同上
SD11	A4~6	23.2	0.2~5.8	0.1~0.2	N84.5(東半)81.5(西半)° E	10Y4/2粘質土	中世
SD13	A2~3	5.1	0.45~0.6	0.19~0.26	N87.5° E	主に10YR3/2砂質土	中世
SD14	A7	0.72以上	0.82~0.92	0.18	N86.0° E	10YR3/2粘質土、10YR2/3砂質土(縫含む)	中世前期
SD15	A4	1.9	0.53	0.2	N80.0° E	上層10YR4/3砂質土、下層10YR2/2砂質土(共に縫を含む)	不明
SD17	Z7	2.9以上	0.33~0.42	不明	N82.0° E	10YR4/4粘質土(粘性あり)	中世
SD21	B12~14	24.2以上	0.38~1.03	0.1~0.24	N74.0° W(東半)	図25	中世
SD22北辺	C13~D13	1.85	0.26~0.32	0.19	N85.5° W	10YR4/4粘質土	不明
同西辺	同上	1.22	0.22	0.08	N29.5° E	同上	同上
SD23	B14,C13~14,D13	18.12以上	0.75~1.41	0.25~0.54	N24.0(北半),7.5(南半)° E	図25	近世初頭
SD32	C11~12	3.22	0.32~0.55	0.1~0.12	N78.0° W	10YR3/2粘質土(縫を含む)	不明
SD34	C11	2.36以上	0.31	0.17~0.28	N85.0° W	上層10YR3/2砂、下層10YR3/3砂	不明
SD35	A9~10	7.34以上	0.37~0.53	0.09~0.16	N84.5° W	10YR3/2粘質土	中世後期
SD36	B14	3.7以上	0.93~1.12	0.15	N79.5° W	10YR3/2砂	不明

長さや幅は遺構の上端、深さは検出面から計算した。

表4 各溝の属性一覧表②

遺構名	地区名	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	方位	層土の特徴	所属時期
SD37	B16	3.28以上	0.4~0.56	0.29	N64.5° W	不明	不明
SD38	A8・9	6.62以上	0.71~1.0	0.21~0.28	N69.0° E	10YR3/2粘質土(円錐混)	中世後期
SD39北辺	A9・10	2.7	0.3~0.43	0.46	N81.5° W	10YR3/2粘質土	中世後期
同西辺	同上	0.31	0.42	0.36	N2.0° E	同上	同上
SD40	A9・10	3.24	0.3~0.68	0.07~0.15	N89.5° E	10YR3/2砂	中世
SD44	A8・9	4.7以上	0.39~0.76	0.05~0.16	N89.5° W	10YR3/2砂(礁を含む)	中世?
SD45	A8・9	2.99以上	0.43~0.61	0.07~0.34	N88.0° W	10YR2/2砂(礁を含む)	中世?
SD70東辺	D12,E11・12	7.84	0.57~0.99	0.17	N10.5° W	固25	中世前期
同南辺	同上	4.65以上	0.39~0.47	0.11	N87.5° W	同上	同上
SD71北辺	D12,E12	0.64以上	0.52	0.1	N87.5° E	2.5Y3/2細砂(マンガン粒を含む)	不明
同西辺	同上	1.94	0.21~0.37	0.11	N12.0° E	同上	同上
SD72	D10	2.82以上	0.22~0.52	0.05	N(東半不明),61.0(西半)° E	5Y3/2粗砂	不明
SD73	D10	0.3以上	0.24~0.36	0.1	N80.5(東半),(西半不明)° W	2.5Y3/2細砂	不明
SD75	A19~21	15.45以上	2.88~3.94	0.04~0.75	N85.0° E	固21	近世初期

長さや幅は遺構の上端、深さは検出面から計測した。

SD56~69は欠番、SD4~5・7~9・18~19・33、46~49は調査中に遺構と判断しなかったので出土土器は包含層悪いとし、SD12はSD11に、SD74はSD10に各々含め欠番扱いとした。SD27・31を流路跡3a、SD20・24~30・41~43を流路跡3bと命名した。

その他の溝から出土した遺物のうち、図示したものには磨石(89)、山茶碗A(92・120)、小碗A(119)、古瀬戸鉢皿(93)、中国陶磁青磁杯(118)・白磁碗(117)、中世前期土師器皿(91)、中世後期土師器皿(108)、大窯搗鉢(107)、徳利(106)、不明鉄製品(121・122・126)がある。

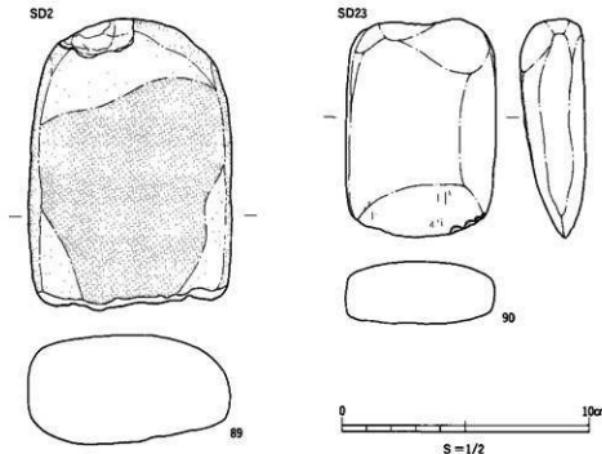


図26 各溝の出土遺物①

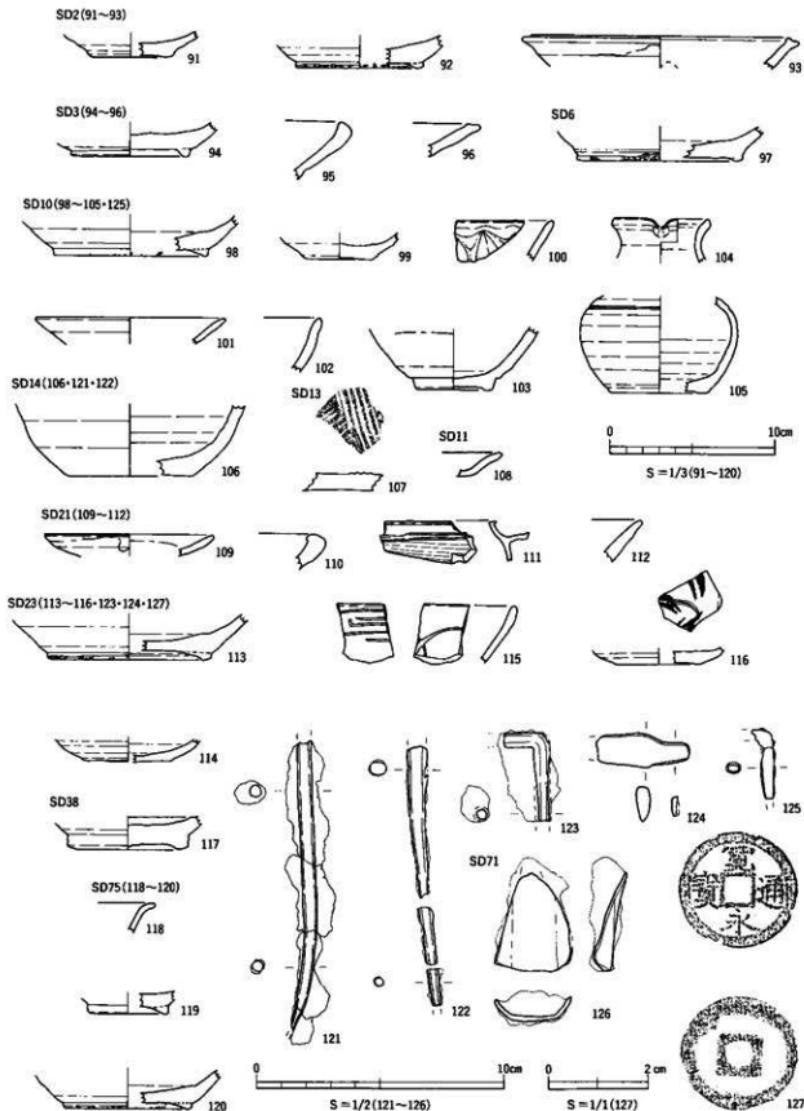


図27 各溝の出土遺物②

自然流路跡（図28～32、表5、図版10）

溝状の遺構（SD）として登録した中で長軸方向が不定で立ち上がりが緩やかなものを、自然流路跡とする。覆土は粗砂～礫である。地形の状況からみていずれも西→東または南西→北東の方向に向かって流下したものと判断できる。このうち流路跡3 bは流路跡3 aを切る形でⅢ層上面で検出したが、流路跡1～3は出土遺物の内容や各々の流下方向からみて同一の自然流路の可能性もある。検出後に掘削した自然流路跡以外にも調査地全体にわたって同様な痕跡が確認された。各流路跡の覆土内からは摩滅した土器片も少量含んでいるが、流路跡3からは遺存状態の良い遺物も多数出土した。これらのうち流路跡3 aから墨書き器（小皿A）が1点出土しており「井」または「卅」と判読できる（図29、図31～145）。出土遺物は次の通りである。

流路跡2（図28～128・129）…須恵器蓋杯（129）、大窯丸皿（128）など。

流路跡3 a（図31）…須恵器短頸壺（131）、土師器甕（153）、灰釉陶器椀（133）、山茶碗A（134～138）、小碗A（139～141）、小皿A（142～146）、常滑甕（147・148）、中国磁器白磁椀（132）、中世前期土師器鍋（149）、羽釜（150）・皿（151・152）、切釘（154）・不明鉄製品（155・156）など。

流路跡3 b（図32）…土師器甕（157）、灰釉陶器椀（160・161）・皿（159）、山茶碗A（163～167）、小碗A（168）、小皿A（169～172）・小皿B（177）、古瀬戸卸皿（173）、常滑片口鉢I類（174）、中国陶磁白磁椀（162）、古代末～中世初頭土師器皿（158）、中世前期土師器皿（175・176）、釘（178・180・182・183）・刀子（181）・不明鉄製品（179）など。

流路跡4…常滑片口鉢II類（図28～130）など。

なお流路跡1から古墳時代・古代の土師器、流路跡5から山茶碗と常滑甕か甕が出土したが、いずれも小片のため図示しなかった。

表5 各流路跡の属性一覧表

遺構番号	地区名	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	流下の方向	断面図	埋没時期
流路跡1・2	E10-11	13.6以上	0.8～1.44	0.25～0.32	西南西→東北東	図8	中世前期以前
流路跡3a(SD27・31、SX6)	B14・15、C14・15	13.7以上	4.8～5.38	0.51～0.75	西南西→東北東	図30	中世後期以前
流路跡3b(SD20・24～30・41・43)	C14、D12～14	28.2以上	0.88～2.95以上	0.1～0.34	南西→北東	図30	中世後期以前
流路跡4	A20・1	10.9以上	4.4～5.9以上	13.1～46.9	西→東	図21基下	中世後期～近世初頭
流路跡5	A19・20	3.8以上	5.1～5.62	26.1～31.4	南→北	図8	中世後期～近世初頭

流路1・流路2を流路跡1に、流路3を流路跡2に名称変更した。

流路2（128・129）

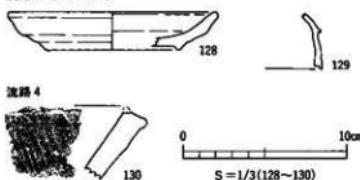
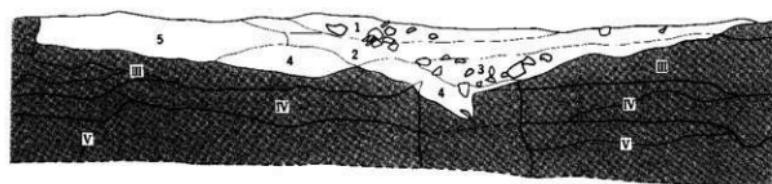
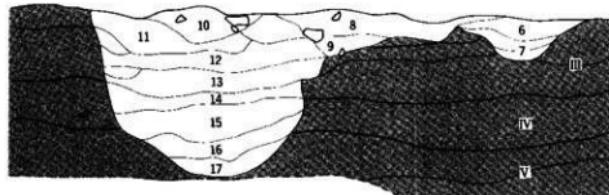


図28 流路跡2・4 出土遺物

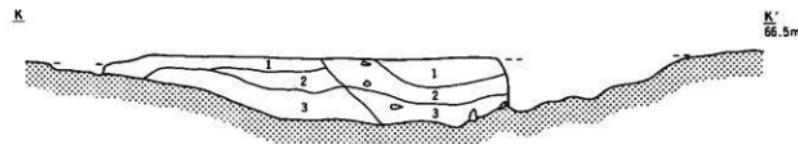


図29 墨書き器

J'
66.3m

流路跡 3 a

- | | | | |
|------------|---------------------|-------------|---------------------------|
| 1 10YR3/3 | 暗褐色砂質土 (帶状に鉄分が沈着) | 11 10YR4/3 | にぶい黄褐色砂質土 (礫を多く含む) |
| 2 10YR4/2 | 灰黃褐色砂質土 | 12 10YR4/4 | 褐色砂質土 |
| 3 10YR6/2 | 灰黃褐色砂質土 (しまる) | 13 10YR3/3 | 暗褐色砂質土 (径1cmの礫を多く含む) |
| 4 10YR3/3 | 暗褐色砂質土 (やや粘質、硬なし) | 14 10YR4/3 | にぶい黄褐色砂質土 (やや粘質、炭混じり、しまる) |
| 5 10YR3/3 | 暗褐色砂質土 (しまる) | 15 10YR4/3 | にぶい黄褐色砂質土 (礫を含む) |
| 6 10YR3/3 | 暗褐色砂質土 (しまる) | 16 10YR3/3 | 暗褐色砂質土 |
| 7 10YR4/3 | にぶい黄褐色砂質土 (やや粘質) | 17 10YR4/2 | 灰黃褐色砂質土 (礫を多く含む) |
| 8 10YR4/2 | 灰黃褐色砂質土 (しまる) | III 10YR4/6 | 褐色粘質土 (径1cmの礫を含む、しまる) |
| 9 10YR3/2 | 黒褐色砂質土 (礫を多く含む、しまる) | IV 10YR4/6 | 褐色粘質土 (炭を含む) |
| 10 10YR4/3 | にぶい黄褐色砂質土 (しまる) | V 10YR4/4 | 褐色粘質土 |



流路跡 3 b

- | | | | |
|-----------|--------------|-----------|---------------|
| 1 10YR3/2 | 黒褐色砂質土 (しまる) | 1 10YR4/2 | 灰黃褐色砂質土 (しまる) |
| 2 10YR4/2 | 灰黃褐色粘質土 | 2 10YR3/2 | 黒褐色砂質土 (やや粘質) |
| 3 10YR4/2 | 灰黃褐色砂土 | 3 10YR3/3 | 暗褐色砂質土 (礫を含む) |

0 2m
S = 1/40

図30 流路跡 3 の土層堆積状況図

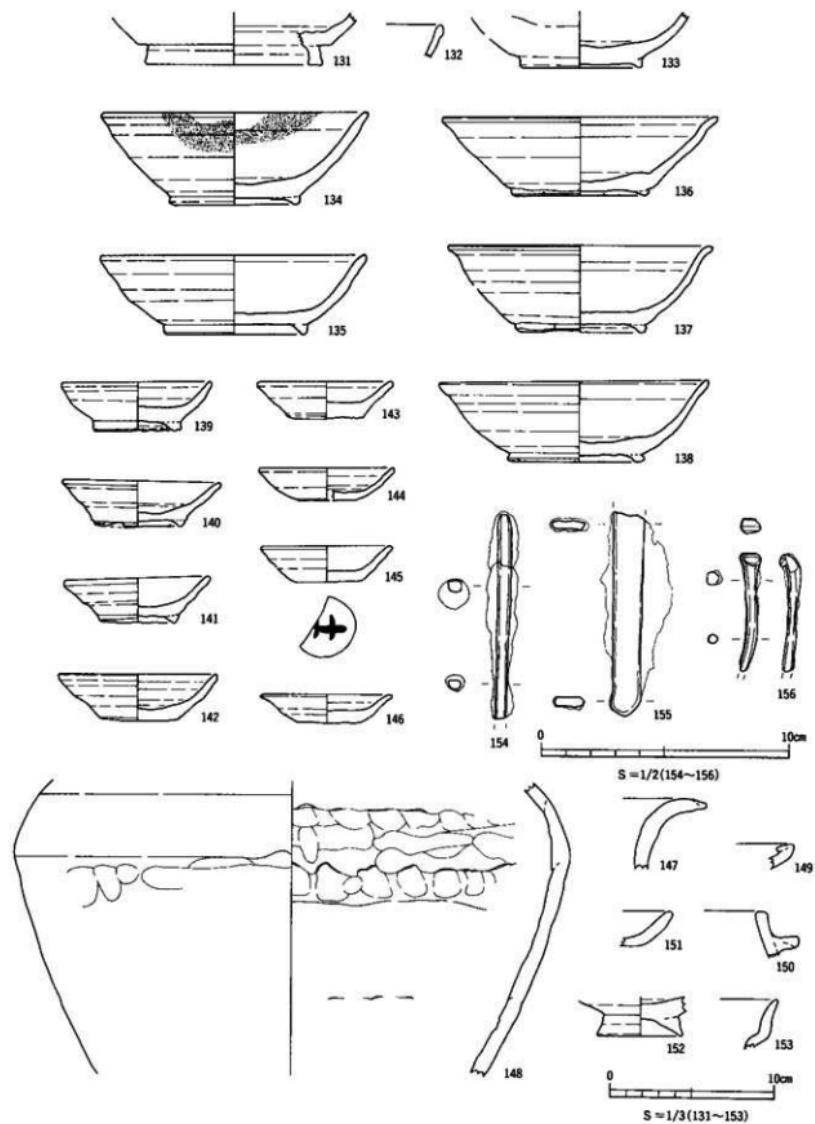


図31 流路跡3 a 出土遺物

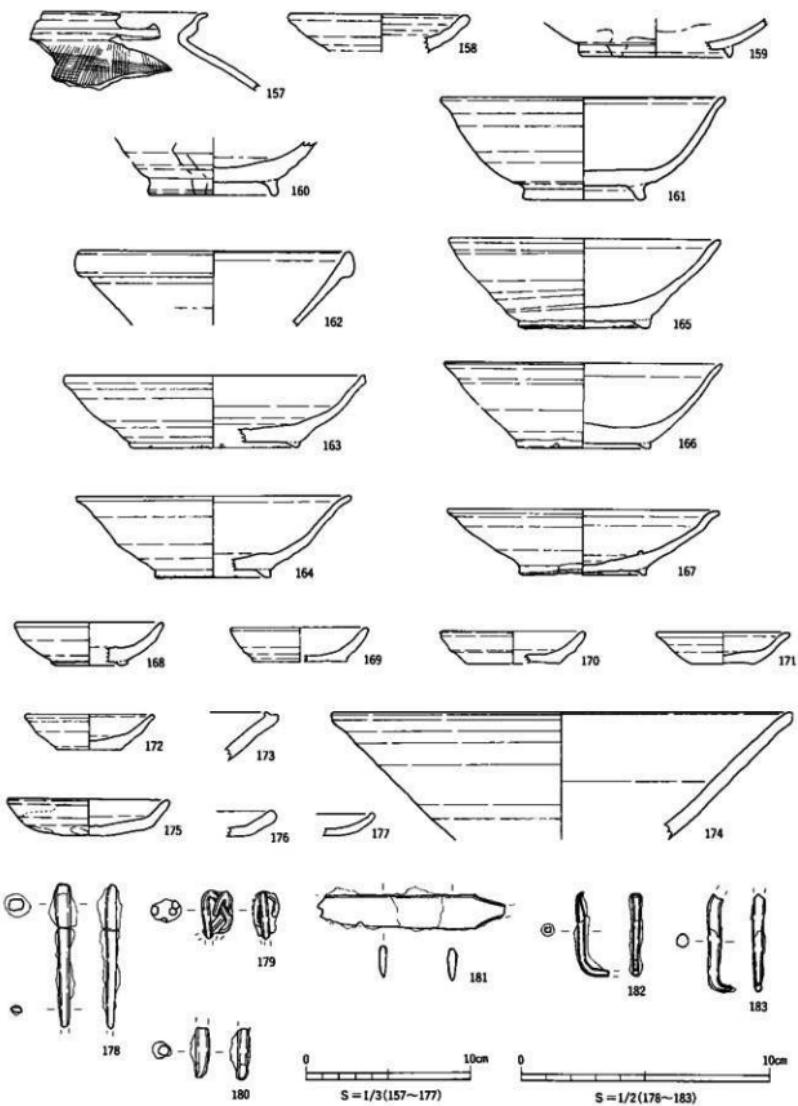


図32 流路跡3 b 出土遺物

道路状遺構（図33～37、表6、図版11・12）

道路状遺構1（図33）

調査区西端に位置するSD75の直下で検出した流路跡4を掘削中に、長さ9.2m、幅7.2～16.0mの範囲で硬化した面を検出した。この硬化層の厚さは4～12cmを測り、粗砂～径3cmまでの円礫で構成され堅く締まる特徴を持つ。特に最下面の礫は基準層位でいう5層にめり込んだ状況であった。5層は雨水等を含むと滑りやすく軟弱になりやすい性質の土壌であり、硬化層下からも締まりがない小礫で充填された自然流路跡（流路跡4下層）が検出されたことから、この流路跡4下層を道路跡の路盤に利用した後、流路跡4上層によって路面が流失し、流路堆積物によって埋没したといえよう（図21最下段）。ほぼ同様にSD3・SD11の間とSD44の北側でも硬化面が帯状に検出されたが、いずれの地点からも路床上の遺構は検出されなかった。SD3とSD11はほぼ方位が同じでその間隔が2.7～3.4mとほぼ一定であるので両者を道路状遺構1の側溝とみることもできるが、時期の異なる二条の側溝である可能性も残る。

出土遺物（いずれもSD3、図27—94～96）には山茶碗A（94）、擂鉢II類（95）・古瀬戸卸皿（96）がある。

本遺構の所属時期としては流路跡4から古瀬戸後期後半の折縁深皿が出土していること、SD11以東に続くSD17を盛土状遺構を完掘した後に検出したこと、積石遺構1を除去した後にSD3を検出したことからみて、少なくとも近世初頭までに埋没したといえる。掘削時期の上限については不明である。

道路状遺構2（図34～37、表6）

拳大の礫が広い範囲で帯状に分布したため、これを精査したところ平面形態が円形・隅丸方形・隅丸長方形の土坑が列状に並ぶことが確認された。精査の際に土坑埋土上面の礫を除去して掘方の平面形態が判明したことから、この礫群は土坑の掘方上端まで完全に埋め尽くしていたことになる。土坑列は調査年度間で主軸が異なり、かつ南北土坑列（SX34・12～14・22）と東西土坑列（SX70～74）の接点が搅乱により削平されているため、両者の先後関係は不明である。ただし主軸がほぼ直交する点と、土坑の検出状況の類似点からみて、一連の遺構であると判断した。

土坑のうちSX71a周辺の断面図をみると、検出面である基本層序4層の直上には水田耕作土があるが土坑上にはなく代わりに固く締まった硬化層が位置する。土坑内には径3～16cmの礫のみで充填されるために礫間は空隙となっている。土坑掘方の底面中央部では周辺よりも顕著な硬化面が確認された（土壤用ペネトロメーターによる計測では、中央部：3.5～4.0daN/cm²、周辺：1.7kgdaN/cm²）。なお南北土坑列では東辺より幅1.2m、長さ3.7mの範囲で硬化面が検出された。

本遺構は地籍図からみて水田の畦畔であった可能性もある（図7）。

出土遺物（図37—184～193）としては石鎚（193）、須恵器蓋杯（184）、山茶碗A（187）、小碗A（188）、中国陶磁青磁盤（186）、白磁皿（185）、古瀬戸擂鉢I類（189）、中世前期土師器皿（190）、加工円盤（191）、瀬戸美濃染付湯飲み（192）がある。

本遺構の所属時期は近世以降と考えられる。

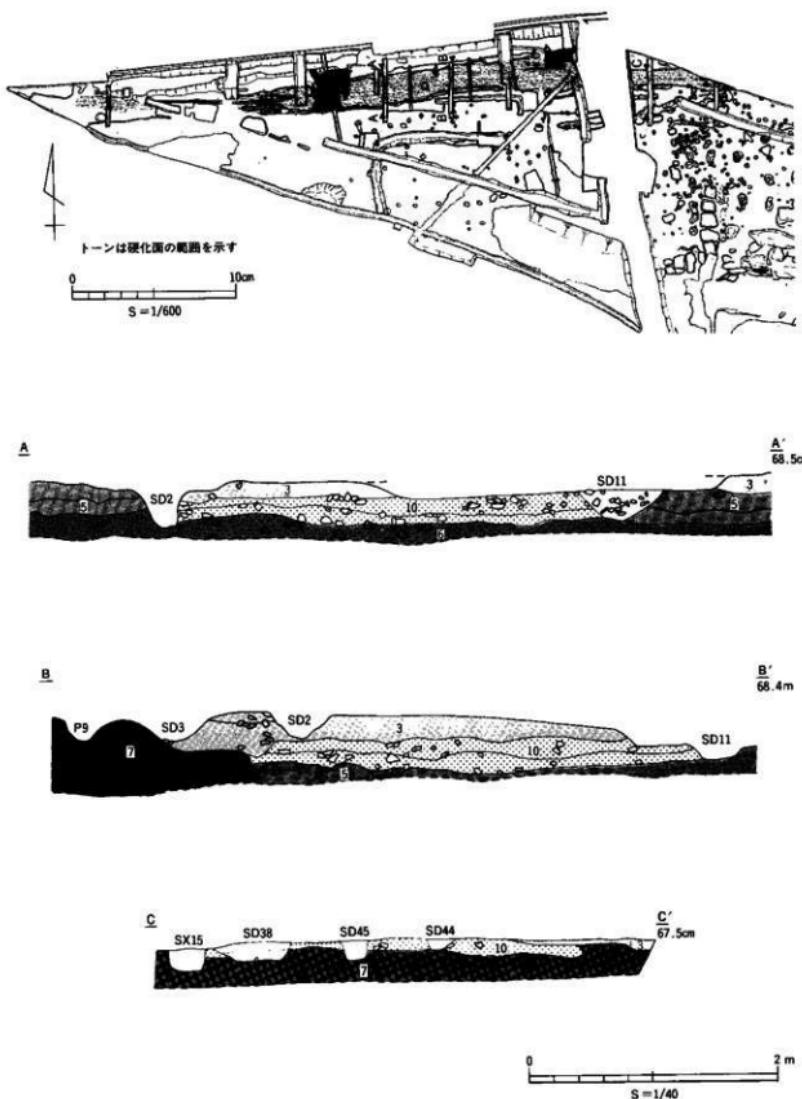


図33 道路状態構 1

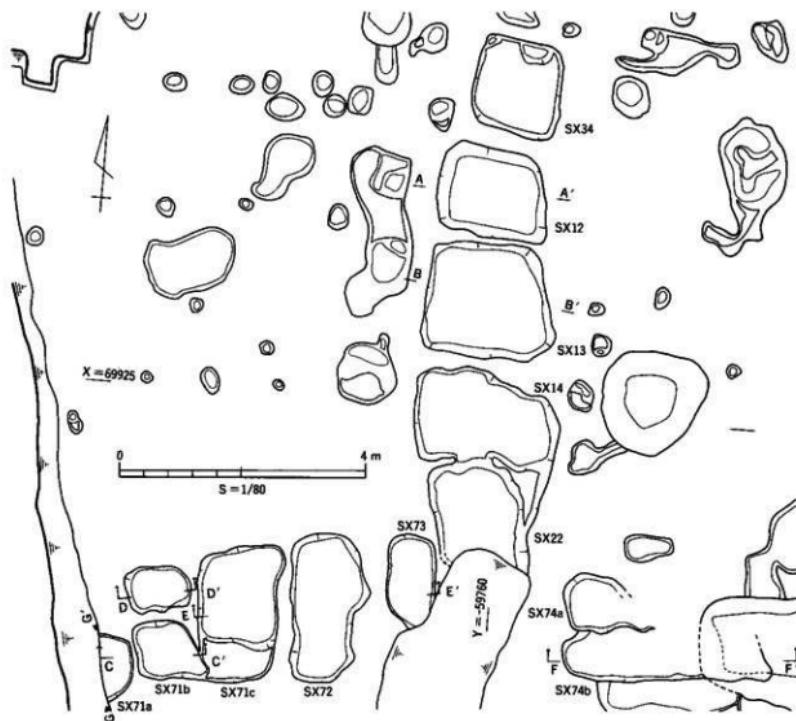
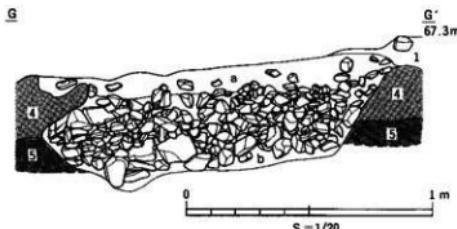


図34 道路状遺構2



- a 2.5Y3/2 黒褐色粗砂（径1cmまでの礫を多く含む、固くしまる）
 b 2.5Y3/1 黒褐色粗砂（礫間を充填）
 1 7.5YR4/1 灰色細砂（径6cmまでの礫を含む、水田作土）
 4 2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト（粗砂～径1cmの礫を含む）
 5 10YR3/3 噴褐色シルト

図35 道路状遺構2の土層堆積状況図①

表6 道路状遺構2の各土坑属性一覧表

遺構番号	平面形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)
SX12	不規則丸方形	1.85	1.76	0.19
SX13	不規則丸方形	1.9	1.84	0.23
SX14	不規形	2.37	1.8	0.2
SX22	不規長方形	1.64以上	1.42	0.16
SX34	圓丸方形	1.53	1.39	0.1
SX70	不規長方形	1.04	0.7	0.14
SX71a	円形？	1.22以上	不明	0.38
SX71b	不規方形	0.95	1.16	0.24
SX71c	不規長方形	2.2	1.31	0.37
SX72	不規長方形	2.41	1.16	0.17
SX73	不規長方形	1.82以上	0.8	0.12
SX74a	不規長方形？	1.84以上	0.91	0.37
SX74b	不規長方形	3.23	0.9以上	0.22

長軸の長さは遺構の上端、深さは検出面から計測した。

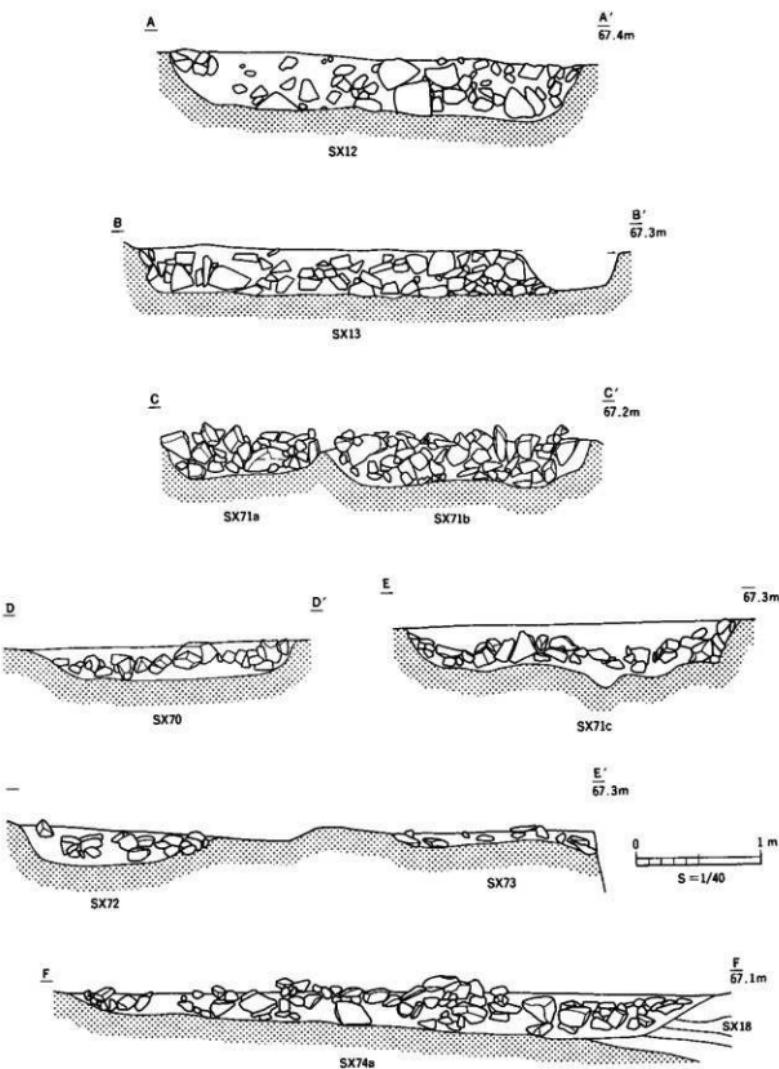


図36 道路状造構2の土層堆積状況図②

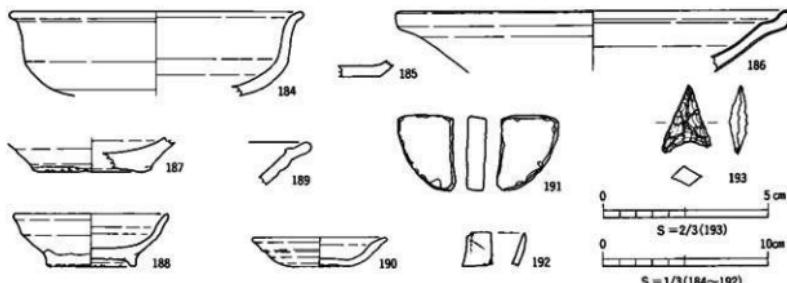


図37 道路状遺構2出土遺物

4. 土坑 (図38~41、表7・8、図版13)

発掘当初、柱穴よりも各遺構の掘方の規模が大きく用途不明のものを SX、それ以外を SK として登録した。これらの中には柱穴の可能性があるものも含まれるが、検出時の判断に従う。ここでは遺物の接合状況から遺構の所属時期を推定できる事例や、土層断面の観察から遺構の埋没過程を推測できる事例を挙げて説明し、他は属性を一覧表（表7・8）にしてまとめる。

SK22 (図38)

平面形態は不整形を呈し長軸0.98m、短軸0.69mを測る。掘方の下端は段状となっており中央やや北側が最も深く、検出面からの深さは0.32mである。覆土は4層に分層でき、2層中には立ち上がりが認められたがどのような性格のものか現地では判断できなかった。出土遺物の垂直分布図をみると、5例の接合関係が認められそのうちの1例は1層と3層に跨っている。出土遺物は土師器の細片が多くその接合状況や明確な遺構の重複が認められないことからみて、一括廃棄された可能性がある。

出土遺物（図38-194~206）としては小碗A（194）、中世後期土師器皿（195~204）、頭巻とみられる釘（205・206）がある。このうち194は混入遺物と考えられる。

本遺構の所属時期は出土遺物から中世後期（15世紀後半）である。

SK26 (図39上)

検出当初は一基と判断したが、完掘状況からみて二基の土坑が重複したものである。東側の平面形態は不整長方形を呈し長軸1.64m（その方位はN18.0°W）、短軸0.74m以上、検出面からの深さは0.11mを測り、掘方の下端は北側がほぼ平坦であるが南側は一段低くなってしまいその深さは0.18mである。一方西側の平面形態は不整長方形を呈し長軸1.84m（その方位はN7.5°W）、短軸0.53m、検出面からの深さは最大で0.23mを測り、掘方の下端はほぼ平坦となっている。出土遺物の中には径0.2cmの白い石灰質状の物質片、炭化材計33gがある。炭化材は1層のみ確認され、径2~3cmの丸材や半（多）截した材を長さ3.1~4cm程度に鈍角ないしは直角に切断されている。炭化材の分布は東側・西側共に中央以北に偏るが、比較的疎に散らばっている。

出土遺物は上記の他に中国陶磁白磁皿（図39-207）がある。

本遺構の所属時期は出土遺物から中世後期である。

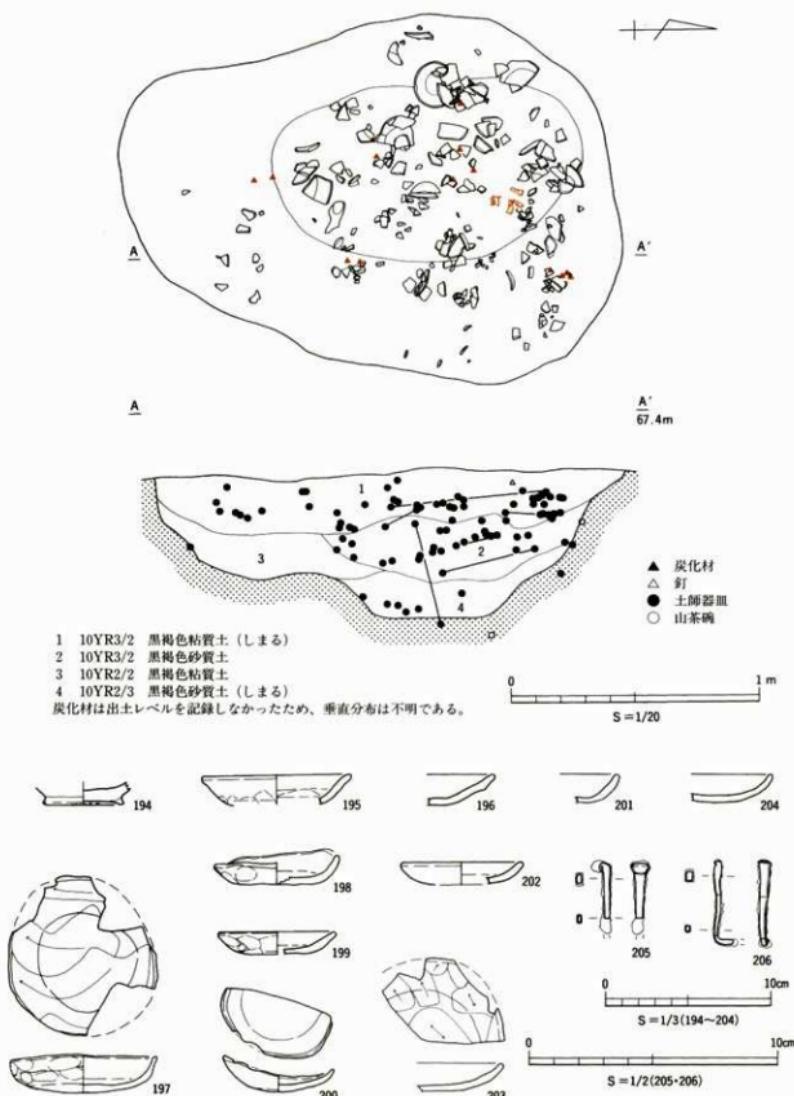


図38 SK22の遺物出土状況図及び出土遺物

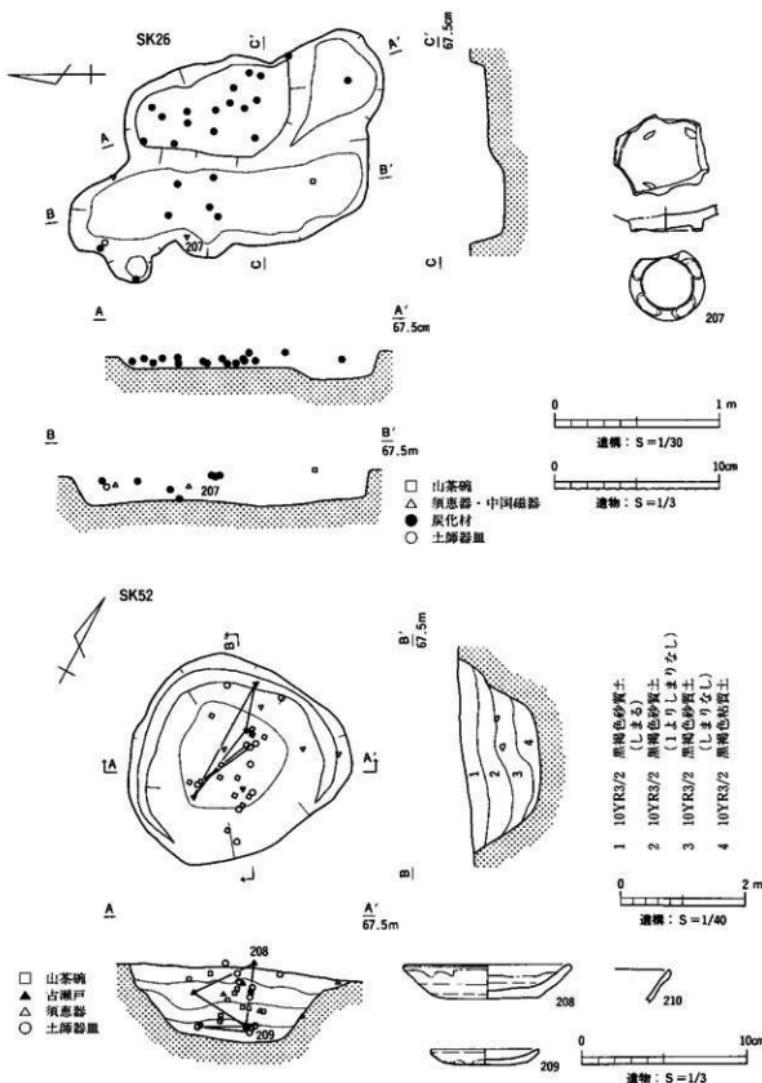


図39 SK26（上図）・52（下図）の遺物出土状況図及び出土遺物

SK52(図39下)

平面形態は不整円形で長軸1.35m、短軸1.3m、検出面からの深さは0.47mを測る。ただし掘方の北側にわずかな段をもつ特徴があり、これを含めると平面形態は不整形となる。掘方の下端はほぼ平坦であり全体として断面形は擂鉢形を呈する。覆土は4層に分層でき、いずれも水平に堆積する。出土遺物の垂直分布図をみると、5例の接合関係が認められ、そのうちの1例は1層と4層に跨っている。出土遺物は土師器皿の細片が多く、その接合関係や遺構の重複が認められないことからみて、一括廃棄さ

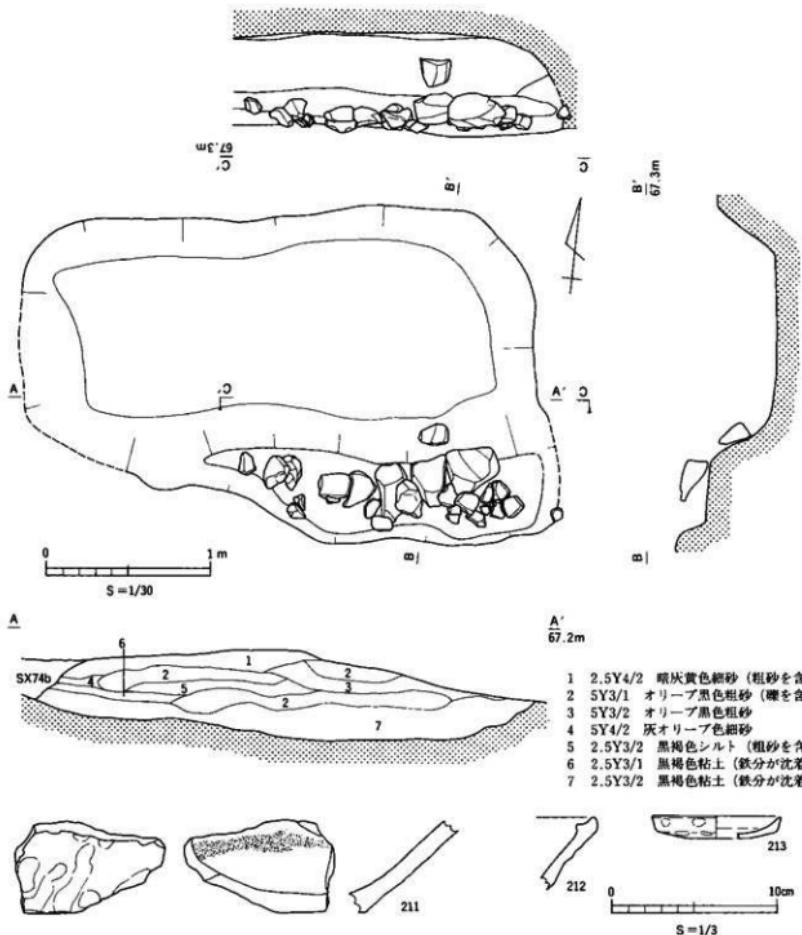


図40 SX18の詳細図及び出土遺物

れた可能性がある。

出土遺物（図39-208～210）としては山茶碗B（210）、古瀬戸縁釉小皿（208）、中世後期土師器皿（209）がある。このうち210は混入遺物と考えられる。

本遺構の所属時期は出土遺物から中世後期（15世紀後半）である。

SK18（図40）

平面形態は不整長方形で長軸約3.13m（方位はN84.5°E）、短軸1.56～2.1m、検出面からの深さは0.59mを測る。ただし掘方の東南部に幅0.37～0.46m、深さ0.21mの張り出し部をもっており、これを含めると平面形態は不整形である。掘方の下端は短軸方向はほぼ平坦であり長軸方向は緩やかに窪む。覆土はシルト及び粘土と粗砂の互層となっており自然営為により埋没したといえる。東南の張り出し部には人頭大の自然礫の平坦面（人為的に作出したものも含む）を長軸上に合わせて4石並べ、裏込めには拳大の自然礫を充填させている。

出土遺物（図40-211～213）としては古瀬戸卸目付大皿（212）、常滑片口鉢II類（211）、中世後期土師器皿（213）がある。

本遺構の所属時期は石列裏込め土出土の211の所属時期から、中世後期（15世紀後半）である。

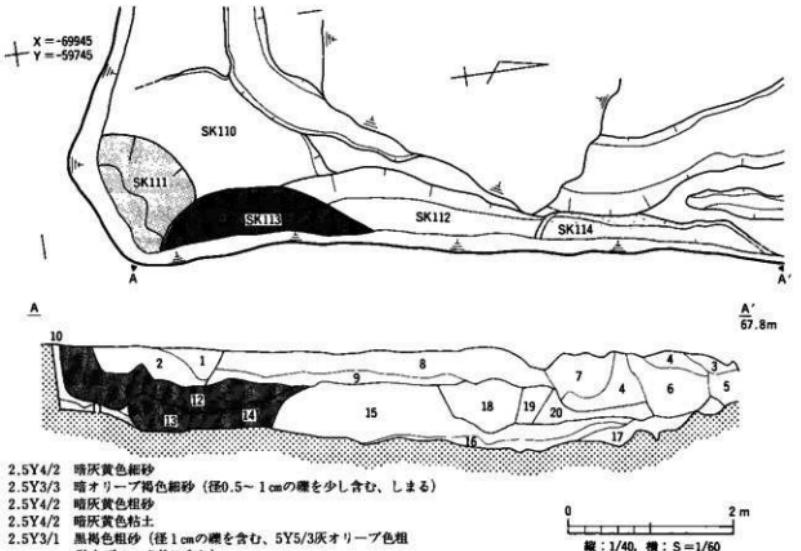


図41 SK110～114の詳細図

SK110~114 (図41)

調査区東端で検出し重複しているため、いずれも全体の平面形態や規模など不明な点が多い。覆土はシルト及び粘土と粗砂の互層となっており自然営為により埋没したといえる。SK110がSD70に明らかに切られているので、これらはSD70掘削以前に埋没したことになる。

出土遺物としては須恵器、土師器、鉢、中世後期土師器皿があるが、いずれも小片のため図示しなかった。

本遺構の所属時期は中世前期以前である。

表7 各土坑の属性一覧表①

遺構名	地区名	平面形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	炭化材(g)	備考(覆土の特徴、重複関係など)
SK2	B7	不整長方形?	2.88以上	2.06	0.13		10YR2/1, 10YR3/1砂質土
SK4	B7	楕円形?	1.1	0.66以上	0.26		10YR3/2粘質土(櫻を含む)
SK10	B7	不整円形	1.02	0.93	0.17		10YR2/2粘質土
SK11	D12	不整形	1.16	0.84	0.38		10YR4/2砂質土
SK13	D15	不整橢円形	0.95	0.67	0.56		10YR2/3粘質土
SK17	C11	橢円形	1.54	1	0.1		10YR3/2粘質土
SK18	C11	不整形	1.88	1.12	0.19		10YR3/2砂(櫻を含む), <P222
SK21	B9	不整橢円形	0.98	0.69	0.23	8.3	10YR3/2
SK22	B9	不整形	0.99	0.75	0.32	3.5	338
SK23	B9	不整形	計測不能	計測不能	0.09		10YR3/2(櫻を含む), <SX16
SK24	B9	橢円形	0.89	0.63	不明		柱底(P158)あり, 10YR3/2(櫻を含む), >SK36
SK25	B9	不整円形	0.78	0.71	0.34		柱底あり, 10YR4/3砂質土上
SK26東	B9	不整長方形	1.64	0.74以上	0.11	33	不明
SK26西	B9	不整長方形	1.84	0.53	0.21		不明
SK28	B9	橢円形	計測不能	0.8	0.46		柱底あり, 10YR2/2粘質土, <SK35
SK29	B9	不整形	0.42	0.38	0.38		不明
SK30	B9	不整形	0.64	0.26	0.16		柱底あり, 10YR4/3粘質土上
SK35	B9	橢円形	0.96	0.58	不明		<SK28
SK36	B9	不整形	0.99	0.3	不明		10YR3/2砂, <SK24
SK37	C9	円形	0.8以上	0.78	0.11		10YR3/2砂(櫻を含む), <P175
SK38	C9	不整形	1.5	0.92	0.06		10YR3/3砂質土
SK39	A9	不整形	0.56	0.55	0.09		10YR3/3砂
SK40	C9	不整円形	0.98	0.92	0.25		10YR3/2粘質土, <P228
SK44	B10	円形	1.02	1.02	0.8		柱底(P189)あり
SK47	C9	不整形	2.4以上	計測不能	0.24		10YR3/1粘質土
SK51	B10	不整形	1.98	0.7	0.15		10YR3/3
SK52	C10	不整円形	1.35	1.3	0.47	0.9	339下
SK53	C10	不整形	計測不能	計測不能	0.1		上層10YR6/8砂質土、下層10YR4/2砂質土, <SX33
SK56	B14	不整円形	0.71	0.62	0.27		10YR3/2砂, >SD21
SK58	C9	不整形	1.45	0.74	0.78	10.9	10YR3/2砂(櫻を含む), <P227
SK63	A9-10	不整形	0.98	0.91	0.19		10YR3/3砂(櫻を含む), <P163
SK64	A9	不整橢円形	1.04	0.57	0.31		不明, >SD35
SK65	A9	不整橢円形	0.61	0.5	0.52	30.5	10YR3/2砂
SK66	A10	不整形	計測不能	計測不能	0.19		10YR3/2砂
SK67	B9	不整形	0.6	0.44	0.08		10YR4/2砂
SK72	C13	不整形	1.11	0.42	0.35		10YR4/2砂(櫻を含む)

長・短軸の長さは直角の上端、深さは検出面から計測した。備考中の遺構の重複関係は、新>古と示した。

表8 各土坑の属性一覧表(2)

造構名	地区名	平面形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	炭化材(g)	備考(覆土の特徴、重複関係など)
SK73	C11	不整円形	0.7	0.64	0.33		10YR4/2點, >SX30
SK78	C14	不整橢円形?	0.7以上	0.6	0.23		10YR4/2秒質上
SK79	B14他	不明	計測不能	計測不能	計測不能		10YR3/2秒(繊を含む)
SK110	E11他	不明	計測不能	計測不能	0.8		図41, <SK111~113, <SD70
SK111	E12	不明	1.35以上	0.96以上	0.9		図41, <SK113, >SK110
SK112	E12	不明	5.16以上	0.78以上	1.13		図41, <SK113~114, >SK110
SK113	E12	不明	3.06以上	0.58以上	1.54		図41, <SK110~111~112
SK114	E12	不明	0.35以上	0.31以上	1		図41, >SK112, <SD70
SK115	D10	不明	1.52	0.83	0.05		2.5YR3/2粗砂(径0.5~2cmの繊を含む), <SX78
SK116	C5	円形	0.65	0.58	0.19		2.5Y2/1細砂(径0.5~3cmの繊を含む), <SD10
SK118	B6-C6	不整形	0.84	0.68	0.05	少量	2.5YR3/2粗砂(燒土粒を含む)
SK119	C6	不明	0.83	0.45	0.04	少量	2.5YR3/2粗砂(燒土粒を含む)
SK120	B3-4,C-3-4	不整形	4.98	2.4以上	0.08		2.5Y2/1細砂(径5cmまでの繊と7層土粒を含む)
SK121	A20	円形	0.95	0.8	0.07		上層10YR4/2シルト, 下層2.5Y3/1細砂, <SD75
SX3	A2-3	不明	3.3	1.92	0.21		10YR2/3粘質上
SX4	B3	不明	1.52	0.41	0.12		10YR2/2粘質上(径1cmの繊を含む)
SX11	C10-11,C10-11	不整形	計測不能	計測不能	0.33		10YR4/2秒
SX15	A9	橢円形?	1.22以上	0.87	0.39		上層10YR2/2粘, 下層10YR2/1粘(繊を含む)
SX18	C10-D10	不整長方形	3.13	1.56~2.1	0.59	17.9	図40, >SX19, <SX75, <SX74
SX19	C10	不整形	計測不能	計測不能	0.09		10YR3/2秒, <SX18
SX23	C11他	不整形	計測不能	計測不能	0.14		不明
SX30	C11-12	不整形	3.56	0.8	0.18		10YR4/2秒(繊を含む), <SK73
SX78	D10	不明	2.3以上	0.66以上	0.12		2.5Y4/2シルト(2.5Y3/2細砂混), <SX74

長・短軸の長さは遺構の上端、深さは検出面から計測した。備考中の遺構の重複関係は、新>古と示した。

SK80~99, 101~109, SX37~49, 56~69は欠番、SK3, 5~8, 12, 19~20, 31~33, 41~42, 45~48, 55, 69~71, 75~77, SX1~2・5, 7~10, 17, 20, 24~29, 35~36は調査中に造構と判断しなかったので出土土器は包含層扱いとし、SK112SD10に、SK541SX32に、SX75~76SX11に、SX21はSX74aに、SX77はSX18に、SK100はSK16, SX6は流跡跡3aに各々含め欠番扱いとした。またSK34~62は獨立柱建物跡3で、SK14~16, 27~45, 50~57, 61~74~76-SX31~33は獨立柱建物跡4で、SK43~59~60-SX16は獨立柱建物跡5で、SK68は堆3で各々説明する。

その他の土坑から出土した遺物のうち、図示したものには須恵器蓋杯(214・215・228)・鉄鉢(226)・短頸壺(216・224・225)・甕(217)・山茶碗B(229)・小碗A(220)・古瀬戸直線大皿(221)・壺か瓶(222)・中国磁器青磁皿(230)・古代末~中世初頭土師器椀(219)・中世後期土師器皿(218)・土師質火鉢(223)・大窓描鉢(227)・釘(232)・鏡(234)・たがね?(235)・不明鉄製品(231・233・236)がある。

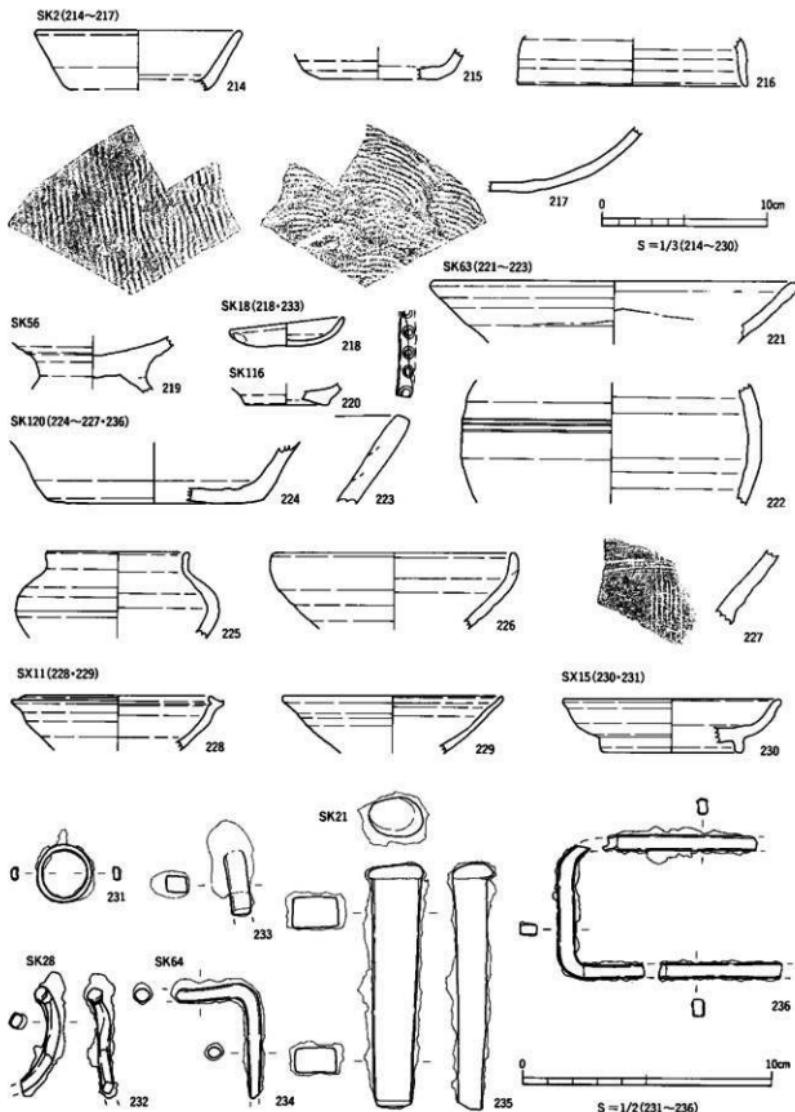


図42 各土坑の出土遺物

第3節 第2調査面の調査

第2調査面では東地区において自然流路跡5条と土坑5基、小穴2基を検出した（図43、図版14）。この中には第1調査面の時期に属する遺構が含まれているが、ここで説明する。なお西地区東半においても検出を試みたが、遺構・遺物共に認められなかったので説明は割愛する。

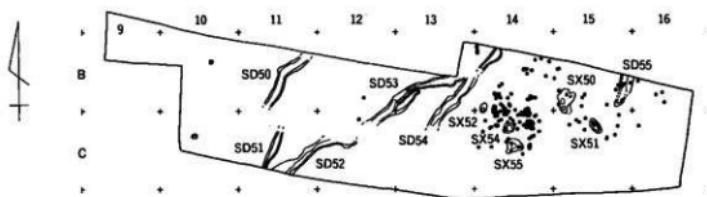


図43 第2調査面検出遺構配置図 ($S=1/1,000$)

自然流路跡

第1調査面の流路跡3a・bとはほぼ同じく北東方向に流下する自然流路跡（SD50～55）を検出した。これらの幅は0.3～1.5m、深さ0.1～0.35mを測り、いずれも粗砂～礫で充填されていた。

出土遺物は縄文土器と土師器（共にSD55から）である。

土坑

ここでは検出状況の特徴的な2例を採り上げて説明し、他は属性を一覧表（表9）にしてまとめる。

SX50（図44上）

掘方の北・北東に2基、南東に1基の計3基の土坑状の窪地と重複しており、それを除くと平面形態は不整形を呈し長軸2m、短軸0.78mを測る。掘方の東側に段を持ち、中央西寄りに掘方の下端面があり深さ0.55mを測る。覆土は1～2cmの礫で充填されており、それを取り除くと円礫または亜円礫23点が検出された。石材の内訳は砂岩19点、凌尾流紋岩2点、粘板岩1点、チャート1点であり、0.17～17.1kg（平均約5kg）の重量から成る。2点を除く21点に被熱痕が認められたが、被熱の箇所と礫の配置に相関関係はなかった。なお覆土内の近接した礫2点で接合関係が確認できた。

出土遺物は認められなかった。本遺構の所属時期は不明である。

SX55（図44下）

平面形態は不整形を呈し長軸1.65m、短軸1.23mを測る。掘方の南には段をもち検出面からの深さは0.33mを測る。覆土上部は礫で充填されており、それを取り除くと円礫または亜円礫55点が検出された。石材の内訳は砂岩53点、粘板岩1点、チャート1点であり、0.28～8.38kg（大半が3kg以下、平均約1.8kg）の重量から成る。8点を除く47点に被熱痕、5点に煤の付着が認められたが、被熱・煤の箇所と礫の配置に相関関係はなかった。なお覆土最下部では厚さ約3cm程度黒褐色粘土が堆積していた。

出土遺物には土師器、山茶碗、古代末～中世初頭土師器皿（図45～237）がある。

本遺構の所属時期は中世前期である。

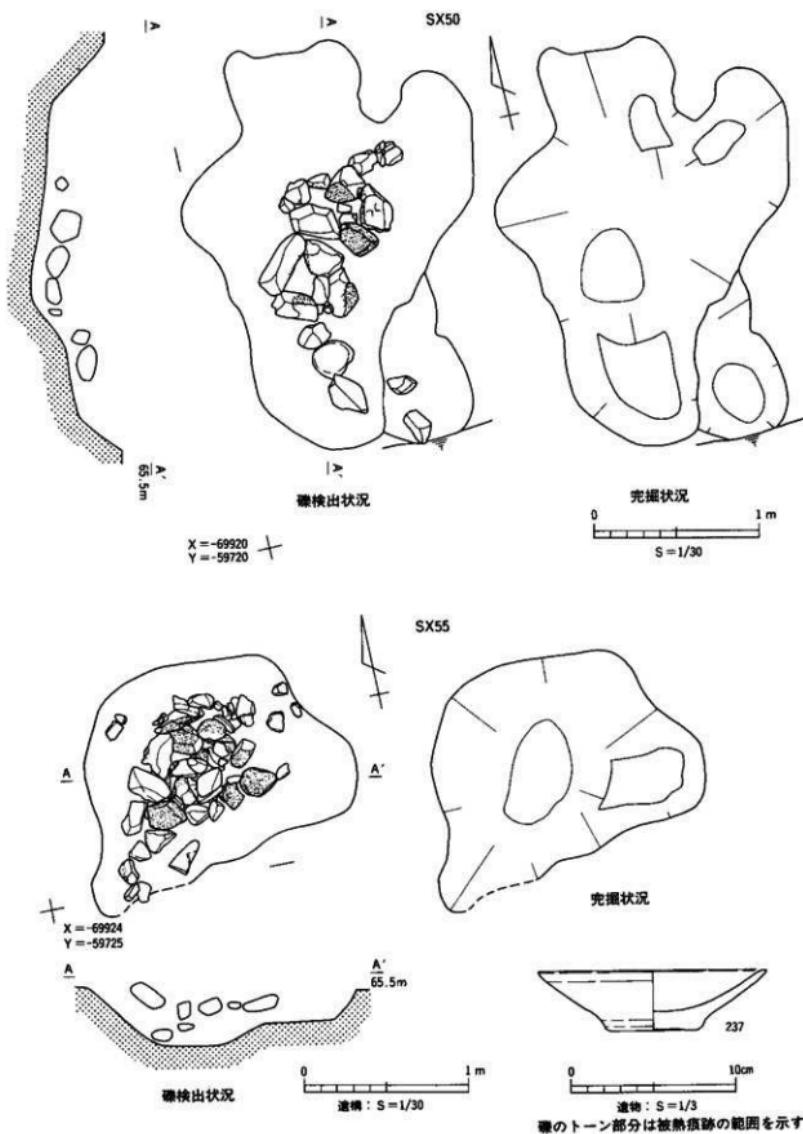


図44 SX50の詳細図、SX55の詳細図及び出土遺物

表9 各土坑の属性一覧表③

遺構名	地区名	平面形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	埋土の特徴
SX50	B15	不整形	2	0.78	0.55	10YR4/2砂(径1~2cm)
SX51	C15	椭円形	1.3	0.5	0.25	10YR5/3粘質土
SX52	B14	不整形	0.9	0.6	0.2	10YR4/2砂
SX54	C14	不整形	1.08	1	0.7	5YR4/4粘質土、炭を含む
SX55	C14	不整形	1.65	1.23	0.33	10YR3/2粘土(上部は砂)

長・短軸の長さは遺構の上端、深さは検出面から計測した。

土器集中区

東地区で遺構に伴わないと判断した包含層(III・IV層)出土土器は、およそB14~16・C14~16区に限られた。中でもB14区からC14区にかけて特に集中し、周辺では比較的疎である。平面・垂直分布状況とも合わせて時期別にみると、縄文土器(●)は出土高が東傾しながら径6m内にほぼまとまり、以下の検討の結果比較的短時期に廃棄された集合体であることが判明したため、全体を「土器集中区」と呼称する。図45をみると、弥生・古墳時代の土器(△)は標高65.2m前後と66.1m前後に分布が分かれ、後者は古代・中世の土器(□)と共に第1調査面直上の包含層を形成しているようである。出土土器の時期別出土状況は第3章で述べた埋没谷の堆積順序と一致するといえる。縄文土器は比較的面的かつ集中的に出土したため、次にその出土状況を詳細に分析する。

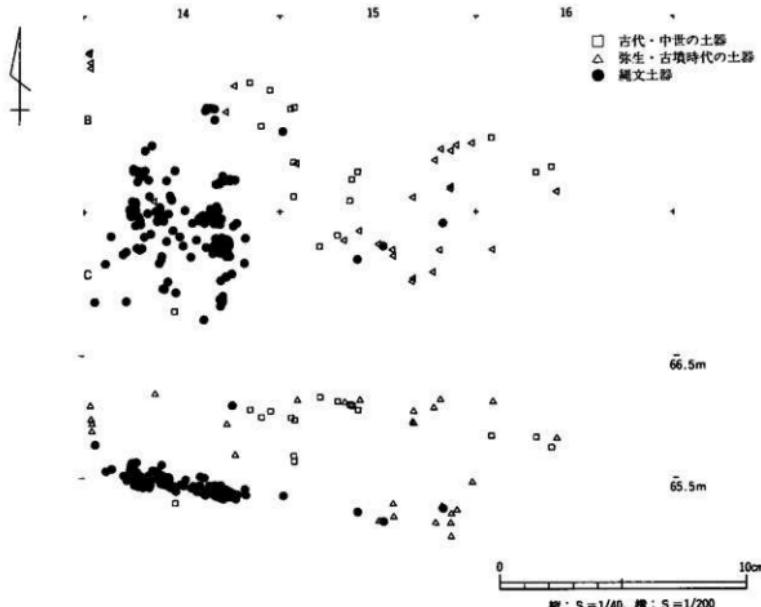


図45 土器集中区の時代別出土状況

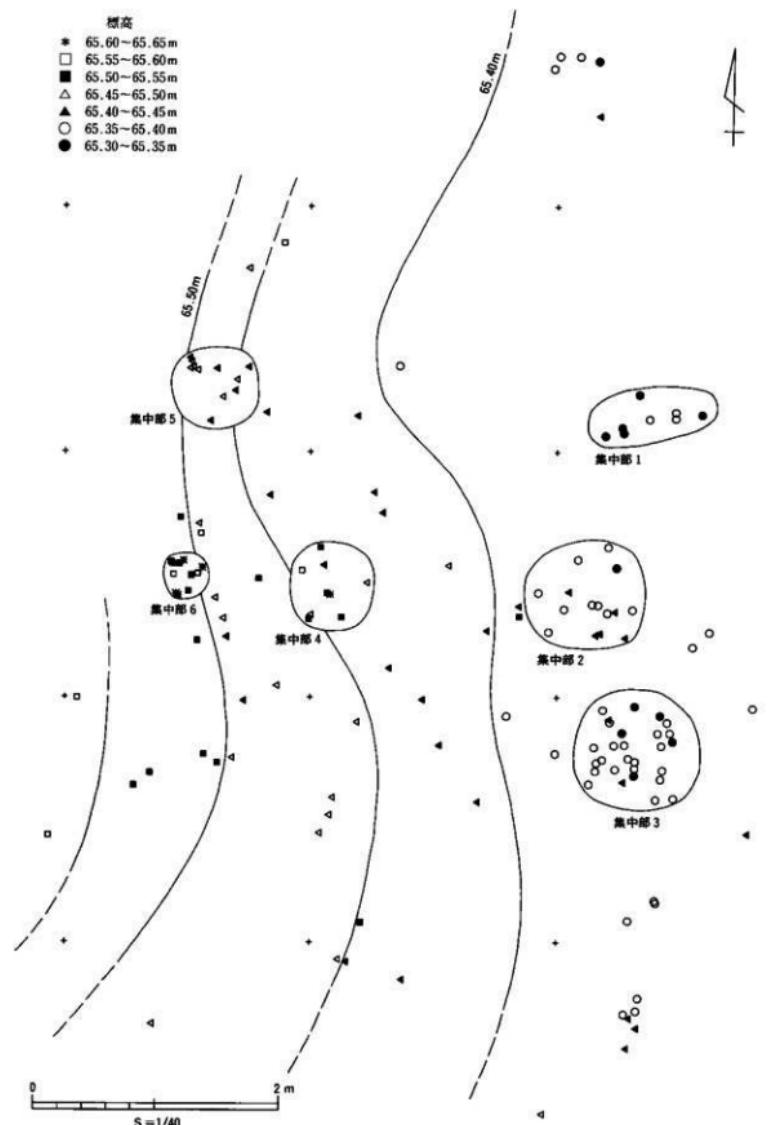


図46 推定等高線と各集中部の位置図

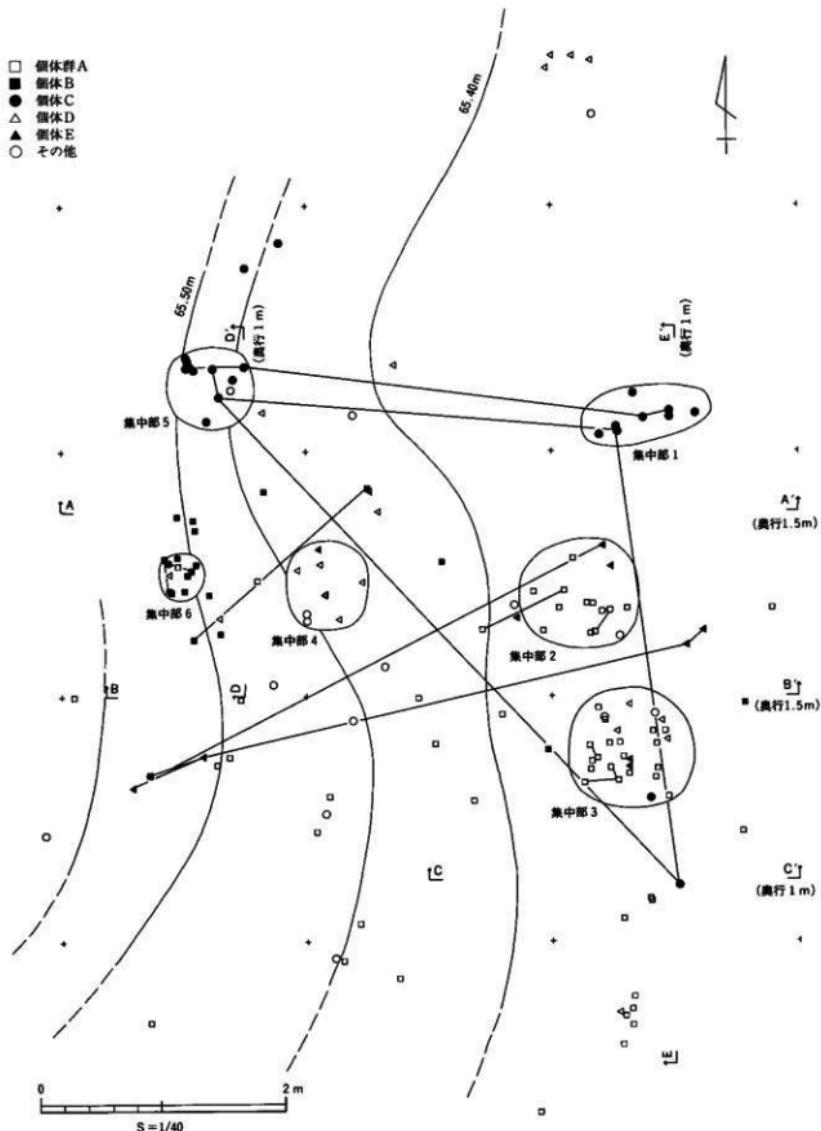


図47 個体別出土状況と接合関係図

まず出土土器の標高を5cm単位で7分割して表示し、それをもとに推定等高線を引いた(図46)。この際明らかに原位置から上位に移動した土器や、窪地内出土と考えられる単独土器はノイズとして除外し、出土位置が等高線から前後しかつ集中する箇所を6箇所(集中部1~6)選択した。推定等高線は、土器が廃棄されて移動するまでの旧地表傾向面を表している。

次に出土土器は破片数で465点(うち226点は地区一括取り上げ)でうち4点を除くと晩期末で占められ、一部の土器は肉眼による個体識別が可能であったため、破片数の多いA~Eの約5個体を選択し土器の接合関係を示した(図47)。これを見ると接合方向は概ね北東から東北東を指向し地形の傾斜と一致するものと、東南東を指向するものがある。個体によっては出土分布に偏りが見られ、集中部の位置とも重なっている場合(個体C)がある。そこで、これら集中部がどのような性格のものであるか知るために、各々の垂直分布図を作成した(図48)。

図48は奥行き1~1.5mの幅で作成し、各集中部を縦断して繋いだエレベーション図を重ねたものである。東西方向の分布図を見るとこの土器集中区は緩やかな斜面地に位置する。しかしこの集中部も推定等高線からかなり前後して分布している。そこで窪地状を呈すると考えられる集中部1~3・5

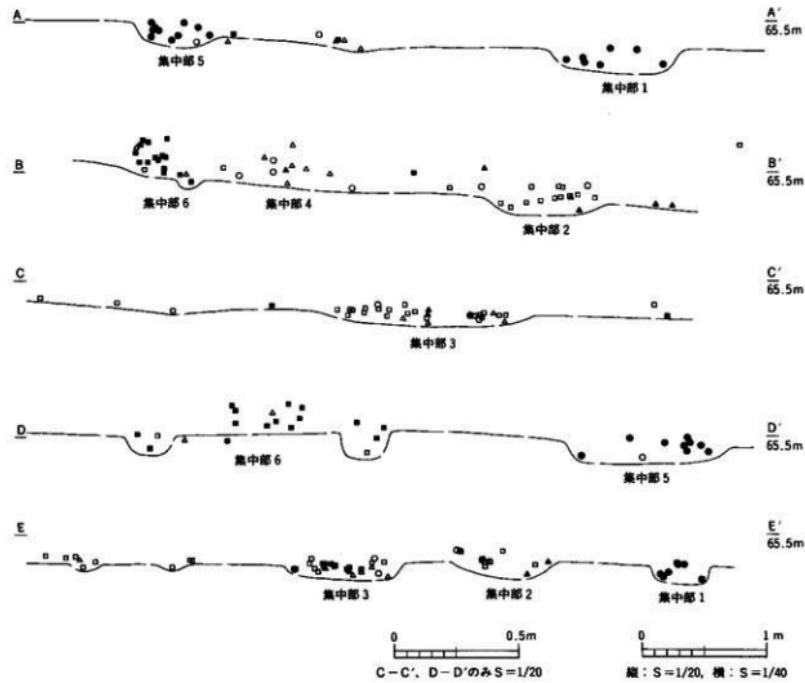


図48 土器垂直分布図

の深さを想定すると、順に4.6cm、0.6cm、2.8~5.9cm、2.4~8.5cmとなり遺構よりも自然窪地の可能性の方が高い。集中部4・6の土器は他に比べ旧地表傾向面からかなり浮いた状況である。集中部6の出土状況は不自然に思われるが、周辺の分布状況を勘案すると遺構の存在は想定できない。

ここで個体別にその出土状況を検討する。土器の部位によってドットの種類を分け（口縁部を●、底部を□、他の部位を○、個体群Aのみ口縁部直下の素文突帯を△）で示した（図49・50）。

個体群A（図49左）は東端の集中部2・3で口縁部近傍が比較的多く出土しており、西端に底部が位置し、他の部位は広範囲に分散する。器形や突帯の幅などから数個体が含まれている可能性があるが細分できない。口縁部と直下の素文突帯は接合した位置にあるためか、接合例は多い。最も離れた破片間の距離は約6.8mを測る。

個体B（図49右）は東寄りに底部、1点を除く口縁部の全てが西端の集中部6で出土している。比較的口縁部が高い位置に集中する傾向がある。本個体は他の集中部では出土しておらず、他の個体の廃棄と何らかの相違が考えられる。最も離れた破片間の距離は約4.9mを測る。

個体C（図50左上）は三箇所に分布が分かれるが、南端の接合土器は流路跡3の掘削によって移動した可能性が高いため、集中部1と集中部5の二箇所にまとまる。土器の部位による出土傾向はみられない。最も離れた破片間の距離は約5.9m、集中部間の距離は最小で2.94mを測る。

個体D（図50下）は西端の集中部4が分布の中心となるようである。集中部3にも分布するがここでは他の個体も多く出土することから、集中部4からの移動とみている。北端の分布は破片数が少なく、どのような性格のものであるか判断できない。最も離れた破片間の距離は約12.8mを測る。

個体E（図50右上）は比較的広範囲に分散する。最も離れた破片間の距離は約4.8mを測る。

次に土器の使用痕跡（ここでは煤の付着状況）を観察する。個体Cは外面に明瞭に、個体B・D・

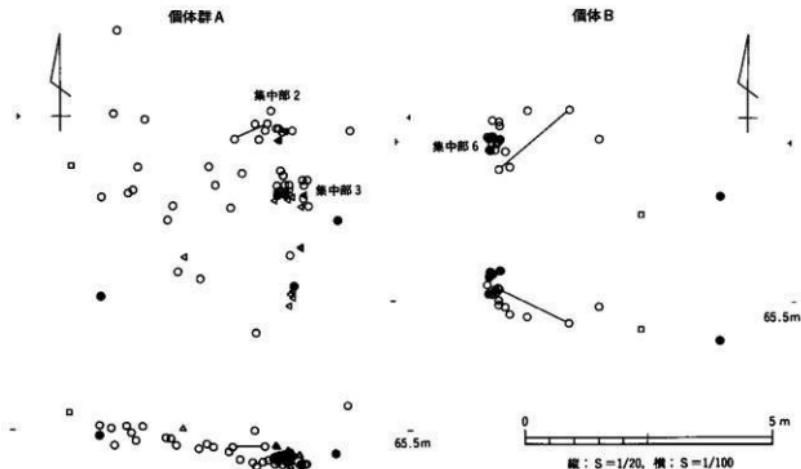
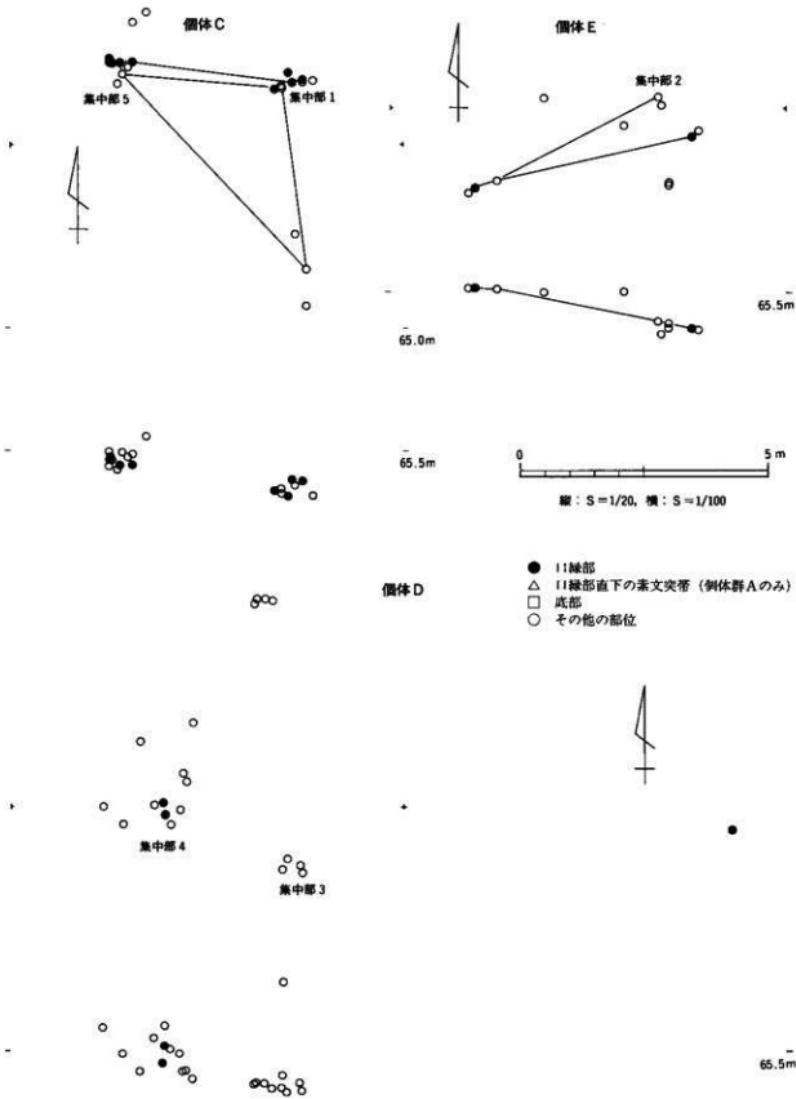


図49 各個体の出土状況図①



第50図 各個体の出土状況図②

Eは外面に薄く、また個体群Aは煤の付着が認められない土器群である。いずれの個体も分布によって煤の付着量に違いは認められなかった。また移動による破片間の寸法の不均等や器表面の摩滅も認められなかったことから、これら土器群は一律に低所に向かって移動したのではなく、むしろ廃棄後の移動量が少なかった可能性もある、と考えたい。

一般に遺物の廃棄形態は一箇所に廃棄する場合（廃棄形態1類）と意図的に数箇所に分散する場合（廃棄形態2類）が考えられよう。遺跡における出土状況としては、廃棄形態1類では一箇所の土器集中部の周辺にその破片がちらばる。廃棄形態2類は距離をおいて土器集中部が複数存在し集中部間に破片が少ない場合（2a類）と土器集中部は存在せずに破片が点在する場合（2b類）に細分できる。この分類を本事例に当てはめると、個体群A・個体B・Dの出土状況は廃棄形態1類、個体Eのそれは廃棄形態2a類、個体Cは廃棄形態2b類に分類できる。ただし個体Dは廃棄形態2a類の可能性もありうる。

土器の内容を見ると、図51-238~241はRL縄文を施しており縄文中期中葉と考えられる。図52~266は弥生土器の可能性があるが、他は晩期末であり器種（野口1993による）は深鉢II類（259~262）、深鉢IV類（242~254）、鉢IV類（257）、その他の鉢（258）、壺（255~256）に分けることができる。深鉢II類の突带上の刻目の形状にはD字刻目（242~246）とO字刻目（243~245・248~253・254）、原体にはヘラ（242~246）・二枚貝（248~253・254）・指（243）・棒（245）があって多様である。ただしヘラ押圧D字刻目突帶の土器（242~246）は中期土器と共に12区以西に出土し、14区以東で出土する大半の土器とは分布が異なるので、時期差を反映しているようである。葉文突帯をもつ土器には、口縁端部直下に円孔刺突を行うものがある（244）。鉢IV類は浮線文系で他の土器とは胎土が異なり搬入土器とみられる。土器の外面にベンガラ、内面と断面に水銀朱が検出されたことから、水銀朱を入れた容器の可能性があろう（第5章第1節参照）。壺は素文突帯を4条以上貼付する。

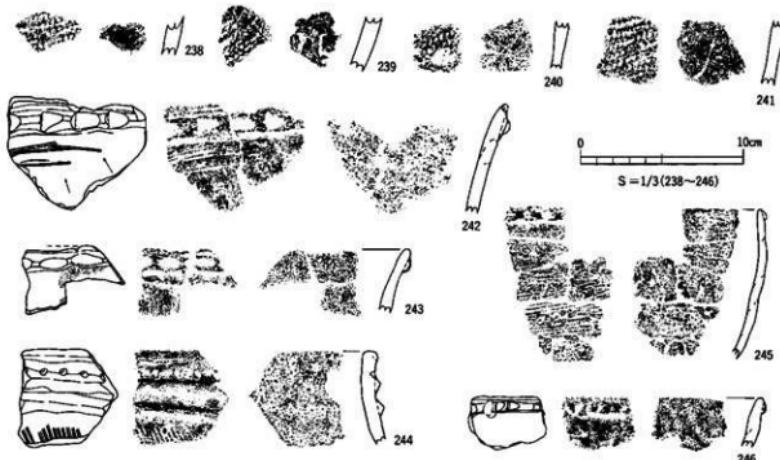


図51 土器集中区出土土器①

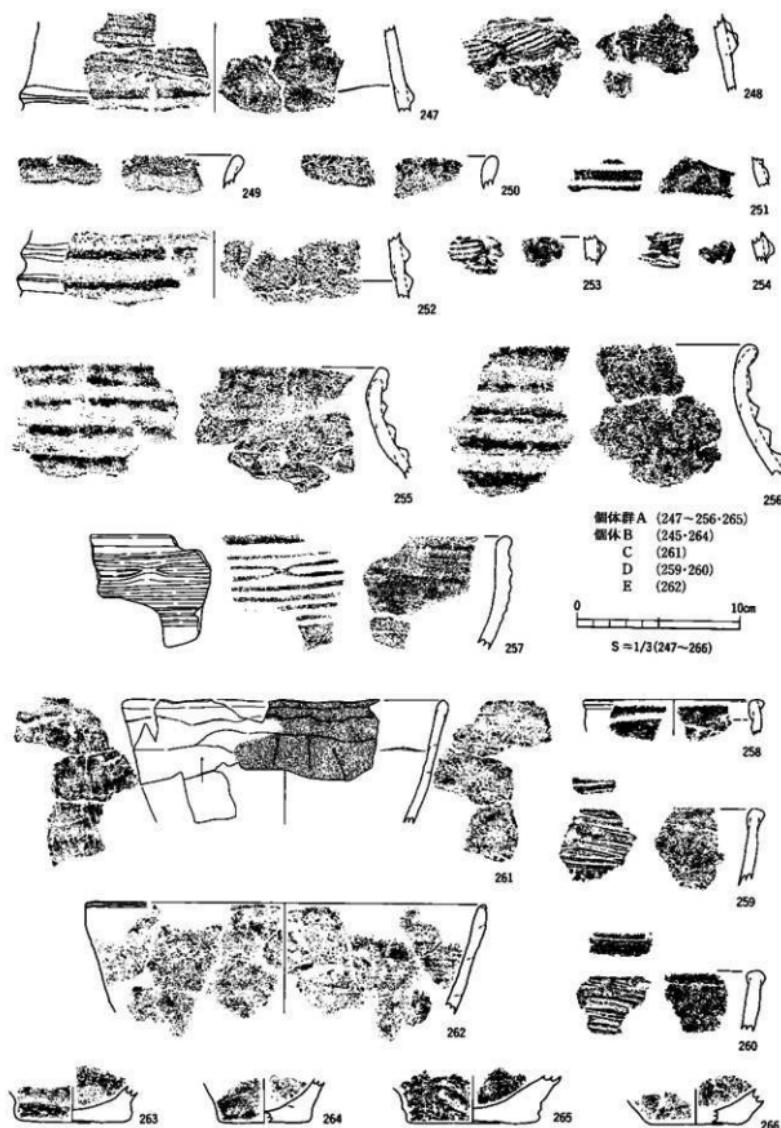


図52 土器集中区出土土器②

第4節 包含層及びその他の遺構出土の遺物

前節までに遺構と遺構内出土遺物について図示し説明したが、本節では包含層及びその他の遺構から出土した遺物を一括して述べる。ここでは遺構内出土遺物とほぼ同じ内容の遺物の掲載を避け、また器形や全体を復原できる遺物を中心に選択して図示した(図53~56)。各遺物の説明については種類別に略述するにとどめ、詳細は観察表を参照されたい(表15~27)。

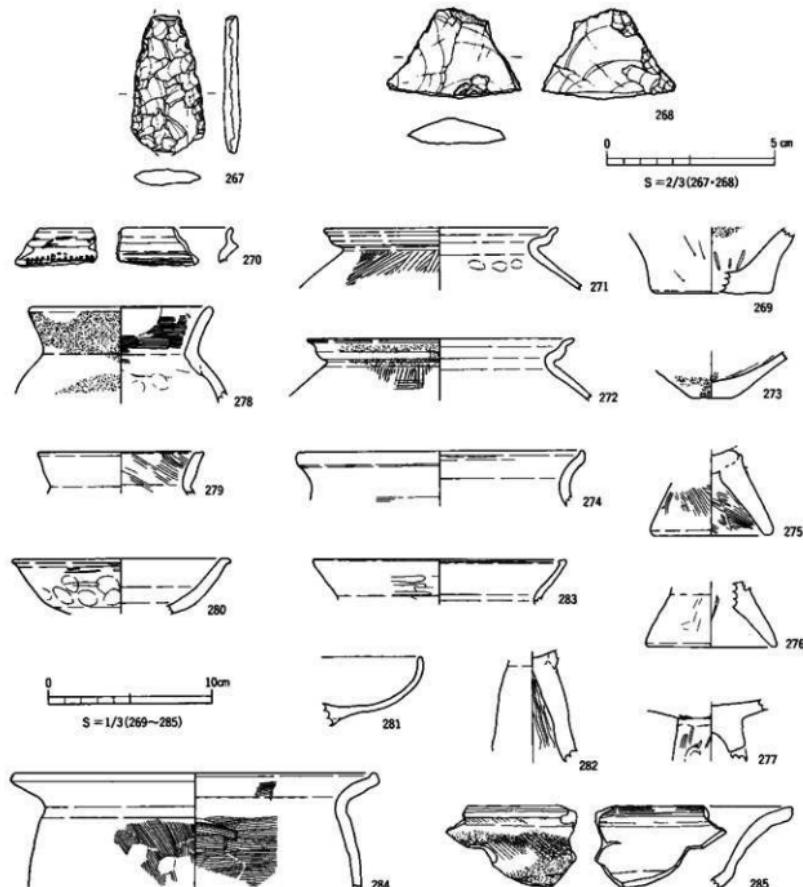


図53 包含層及びその他の遺構出土遺物①

石器（図53-267・268）

267は縄文時代草創期の有舌尖頭器、268はRF。

弥生土器・土師器（図53-269-285）

弥生土器（269）は微量出土した。土師器の甕にはS字状口縁台付甕A類（270）・C類（271・272）、くの字口縁台付甕（278・279）、布留式系甕（283）がある。273・274は鉢の可能性がある。高杯には椀形の杯部（280・281）と屈折脚（282）がある。II期～VI期（内堀・横幕1998）まで占め、幅がある。284はつまみあげ口縁丸底甕、285は外来系の鍋で共に古代に属すると考えられる。

須恵器（図54-286-294）

蓋杯（286・287・289）、盤（288）、短頸壺（290）、甕（291-294）。

灰釉陶器（図54-295-299）

皿（295）、碗（296-298）、鉢（299）。

中国磁器（図54-300-311）

青磁碗（300・301）・同安窯系皿（302）、白磁碗IV類（303・304）・VかVII類（305・306）・小杯（308）、青白磁碗（309・311）・合子（310）。

土師器（図54-312-322）

皿のうち312-314は古代末～中世初頭の輥轆成形、315-319は中世後期の手づくね成形である。鍋のうち320は清郷型、321・322は伊勢型である。

瓦質土器（図54-323・324）

全体に極微量の出土であるが、外来系の鍋（323）、羽釜（324）である。

山茶碗（図55-325・326）

均質手の山茶碗B（325・326）である。全体に極微量の出土である。

古瀬戸（図55-327-338）

端反碗（327）、縁軸小皿（328）、卸目付大皿（329）、卸皿（330）、擂鉢I類（331）、擂鉢（332）、擂鉢II類（333）、四（三）耳壺（334）、内耳鍋（335）、梅瓶（336）、天目茶碗（337・338）。

常滑（図55-339-347）

片口鉢I類（343・346）・II類（344・345）、三筋壺（347）、甕（339-342）。

瓷器系陶器（図55-348）

産地、器種共に不明である。

大窯（図55-349-352）

天目茶碗（349・350）、丸碗（351）、甕（352）。

近世陶磁器（図56-353-360）

瀬戸美濃には灰釉丸碗（353・358）、湯飲み小壺（354）、小壺（356）、折縁鉢（355）、片口（359・360）がある。357は蓋であるが、産地不明である。

加工円盤（図56-361-365）

古瀬戸（362）、大窯丸碗（364）、中国磁器青磁碗（365）を再利用し、周縁を打ち欠いている。361は摩滅が著しく、363は欠損しているようである。

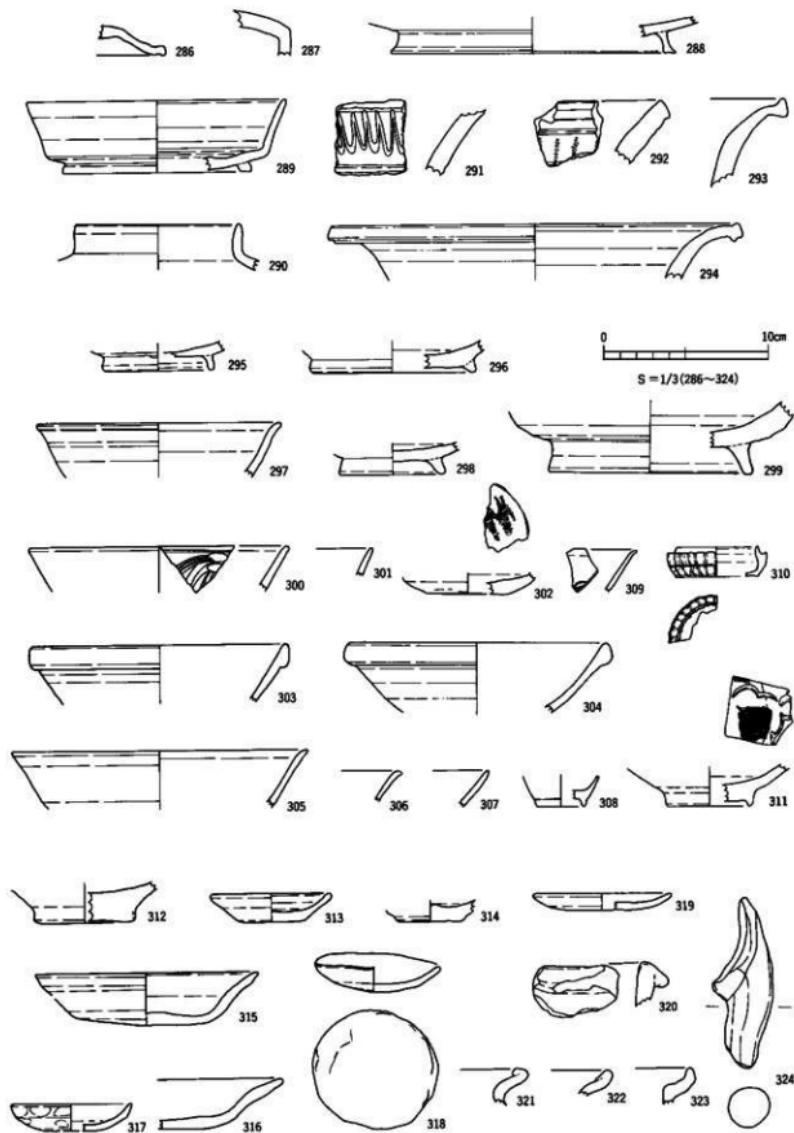


図54 包含層及びその他の遺構出土遺物②

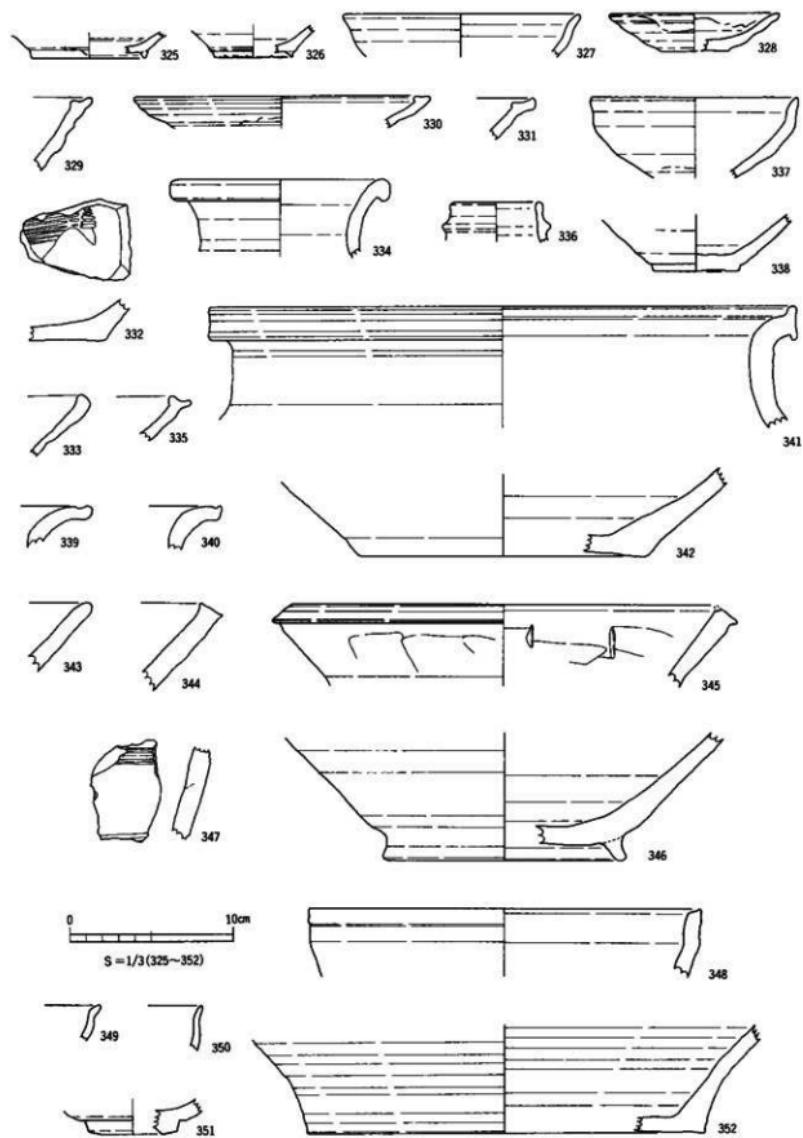


図55 包含層及びその他の遺構出土遺物③

土製品（図56-366～368）

土錘（366）が1点出土した。塔（367・368）は共に近世に属すると考えられる。

金属製品（図56-369～376）

369、371～374は釘、375・376は刀子と考えられる。370は不明である。369は鎧により細部の形状がやや不明で方頭釘または円頭釘の可能性があるが、371・374は切釘とみられる。

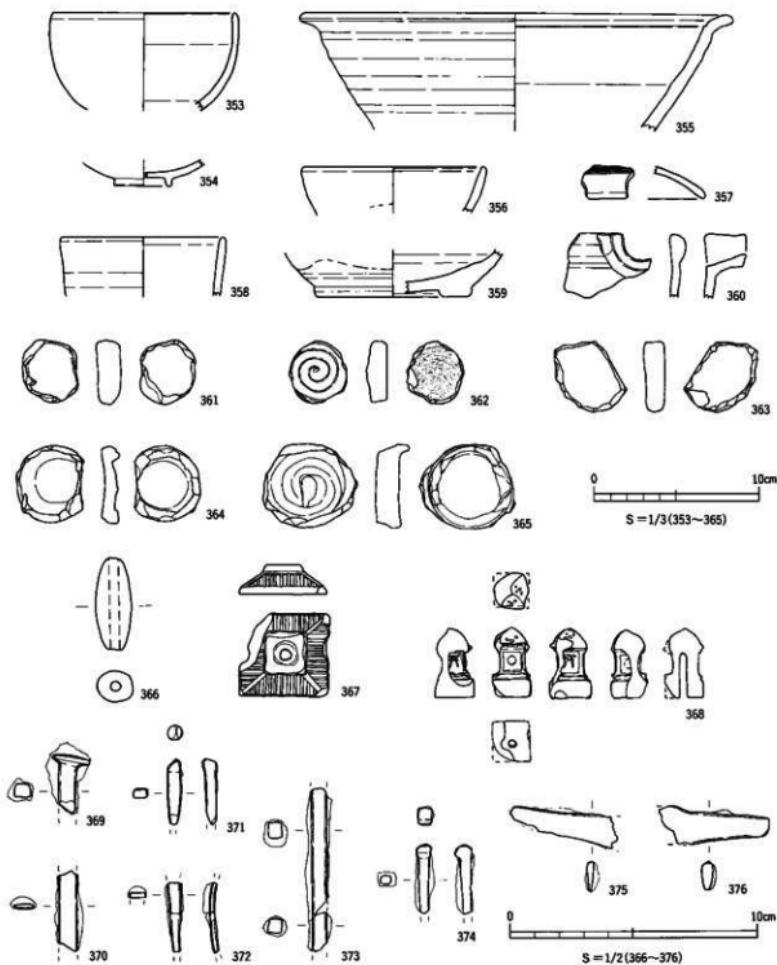


図56 包含層及びその他の遺構出土遺物④

表11 遺構出土遺物一覧表①

遺構名	地区名	等位	古墳時代・古代		中古前期				中世後期				中世後期不同		出数	その他		
			古墳	古墳	古墳	古墳	古墳	古墳	古墳	古墳	古墳	古墳	古墳	古墳	古墳			
■ 1. 遺構																		
P-22	A-5	1																
P-417	B-5	1																
■ 2. 遺構																		
P-766	C-5	1	1															
■ 3. 遺構																		
P-174	C-9	2	3	1					3					1				
P-196	B-10	1		2										5(0.9)				
P-198	B-10	1				1(0.6)								1(0.8)	不明		銅貨 1	
P-239	B-10																	
SK34	B-9	1	1											6(0.3)				
同上	B-9	2	1						1(1.6)					3(1.4)	5(1.4)			
SK37	C-9	1												3				
SK62	B-10	1		1					2					6(4.9)	17(1.6)			
■ 4. 遺構																		
P-283	B-9	1	1															
SK14	B-11	1							19(4)					3(2.7)		6(2.2)		
SK15	B-11	1	1	2					1					1(1.1)		5	鐵筋土塊 1	
SK16	B-10-12	1	2	1	2(0.3)													
SK27	B-9	1		2		1								3(8.9)	18(0.3)	残片 2		
SK45	B-10	1	1	2	2(0.6)				1						1			
SK50	B-10			2(1.6)	1(0.6)				2(3.6)					2(2.2)	15(4.3)	鐵文 1, 3. 銀 土塊 2 (3.6)		
SK57	C-9													4(2.3)				
SK61	B-9	2	15	12(5.9)	1				19(2)					6(3.9)	23(4.1)	不明 2		
SK74	C-11																	
SK78	B-9	1	1	1	2(0.2)									1(11.6)	9(2.7)	鐵文 1		
SK31	C-11																	
SK32	C-10	1		1	2(0.6)													
SK33	C-10	1			1				2(3.4)	1(1.7)					1	鐵文 1		
■ 5. 遺構																		
P-206	B-10													2(0.6)	1			
SK43	B-10	2	1	2(0.4)	1(0.6)				1(9.3)					17(2.6)	32(1.2)			
SK69	B-9	1		1										1(1.7)	24(2.4)	金製盤 1		
SK16	B-9	1	1	1	1	1	1	1(9.5)						1(0.7)	26(1.5)	平頭 1 (0.7)		
■ 6.																		
P-495	C-6	1							1(9.3)						3(0.3)			
P-496	C-6	1		1	10.3										3(0.3)			
P-497	C-6	1			20.5													
P-412	C-5														1			
P-416	C-5	1																
■ 7.																		
P-126	B-11		2															
P-232	B-11		2											2				
■ 8.																		
F-106	C-12		3												3(0.3)			
修石 1	A-4	50	14	2	44(1)	3(2.2)	32(6)	94(5)	1					16(5)	422	7	瓦 1, 不明 5, 鐵質 1	
修石 2	Z-7-A	5		7		20(1)								4(0.5)		5	不明 1	
鐵石 1	A-1 区 A-6 区 A-7 区	15	1	23(1.9)	1	1	5(0.3)		6(0.4)					5	17	1	34 瓦 5	
同上	A-2 区 A-6 区	6	1	17		29(8)	10(2)		1					1	18		3 瓦 1	
同上	A-3 区 A-6 区	16	3	29(0.6)	1	31(1)	3		1	1(0.3)				41			3 鐵質 1	
同上	A-4 区 A-6 区	15	2	19	1(0.9)	1(0.7)			2	1(0.5)				43			26 瓦 1, 鐵質 1	
同上	Z-4 区 A-6 区	1												4				
同上	Z-7 区 A-6 区	25	1	6	1	2(0.6)			7(4.5)					1	11		15 瓦 3	
同上	その他 A-6 区	7	1	2											2			
同上	A-3 区 A-6 区	2	1	2											6	1	鐵質 1	
同上	Z-7 区 A-6 区	2	1	2											2			
■ 9.																		
S01	B-7	1	2	6					2	1	3(1.5)				1	1	1	鐵質 1
S02	A-6-7	1	15	4														
S03	A-3-5	1	10	1	1	6(0.4)								8(1.1)			3	
S04	A-4	1	5	2											1	1		
S05	A-1-2	1	1	4											1	3		

表12 遺構出土遺物一覧表②

遺構名	層位	山陽時代・古代				中世初期				中世後期				中世繩文不明				その他
		瓦	瓦敷	土器	小鏡	金	銀	中国	土器	山本	小鏡	金	土器	土器	瓦	瓦		
SD05	Br-6	3	43	4	4	80(2.3)	2(0.3)	1	8(2.4)		5		1	2(2.7)	2(2.4)	6	24	1
	瓦上	2	5	5	5	4(0.4)	1				1					3		
	瓦上	瓦上	3	3	3	9(0.3)										1	1	
SD01	Ar-8	1	1	1	1	6(1.1)					1			1(2)	3	1		
SD03	A-2~3	1	1	1	1										1	1		
SD04	A-7	1	1	1	1										7			
	瓦上	2	2	1	1										1			
SD07	2~7																	鉄片1
SD01	H-12	2	5	2	2	10(0.6)	2		5(2.3)		20(0.3)	2(1.3)	2	16(5.2)	4	4		
	B14																	高文10, 金鏡 製A2, 銀鏡1, 馬蹄形刀形1
SD03	C13~ D15	7	2	8	5	5(0.3)	1(0.3)	2		1	2(0.5)	2(0.6)			2			
SD08	B14	1								1								
SD02	C11~12	1	1	1	1	1(0.1)												1
SD04	C11	1	2	1	5													1
SD05	A-9~10	1	2	1	1				2		2(1.1)					11		
SD08	A-9~10	1	2	1	1				1									
	瓦上	2	2	1	1				1							2		
SD09	A-9~10	1	3	1	1				1		1(0.6)	2(1.5)				1		
SD06	D12~ E11~12	2	1	3	3	3(0.2)			1(0.5)						3(0.6)	不明2		
SD01	B12~13																	金鏡製品1
SD02	D12~13																	1
SD03	E10~11																	
遺構跡2																		
	D13~ 12~ E11~12	1	1	5	2	2(0.5)								3(1.7)		1		
P100	C10~11													1(1)				
遺構跡3 a																		
SD02	B16~ 15~ C14~15	1	10	5	10	11(0.3)	12	1	9(0.3)	3(0.3)	20(0.5)			1	7	2	9(1.3), 金鏡製品2, 鏡形2	
	瓦上	2	7	4	5	3(0.4)	8			1	4(2.4)				6	5(1.5)		鏡形1
	瓦上	3	5	4	10	9(0.5)	1			2	1	1			3			鏡形3
	瓦上	4	2	2	8	4(0.7)									2(0.4)			鏡形1
SD01	B15	1	2	1	1	1(0.5)												
	瓦上	2	1	1	2													
SN 8	B14~ C14	9	1	43	47	d(5.5) d(14.4)	28.7	1	8(1.7)	9(2.4)	10(0.3)			1(0.8)	4	26(2.6)		鏡文2, 五瓣 1, 銀鏡1, 金 鏡形1
遺構跡3 b																		
SD01	D12~13	1	10	2	4	20(0.6)	3(0.4)	1	2(1.3)	2(0.3)	20(1.1)	1			1			鏡文2, 不明6
	瓦上	2	9	2	5	10(0.6)	2(2.5)			9	6(2.1)		1					鏡文2, 銀鏡1, 鏡形2
SD14	C14~ D14	1	6	5	5	10(4.7)	2(1.2)	2(0.4)		9(0.6)	10(0.3)				2	14(1.7)		鏡文2
	瓦上	2	6	3	5	5(0.6)	3(2.0)	1(1)	10(0.3)	1	9(3.0)	10(2.2)		2(1.7)	5	7		鏡文2, 3~96, 金鏡製品5
	瓦上	3	5	16	8	20(0.1)					6(2.2)				3	4(0.9)	1	
	瓦上	4	3	1	1	20(2.2)	1(1.0)											
	瓦上	4~9	1	1	1													
SD08	B15~ C15	1	3	3	3	16(0.7)	1	1			10(0.7)			1		10	6	鏡文1, 金鏡製品1
	瓦上	2	2	2	2	2(2.2)			1						1	2		
SD09	B15	1	1	13	1									1(1.6)	1			
SD10	B16	1	1	1	1													
SD11	B15	1	2	1	2	2(0.5)	3(0.4)								2			
SD12	C14~ D14	1	1	1	1										1			金鏡製品1
	瓦上	2	1	1	1										1			不明1
SD09~10	A19~20	1	1	6(0.2)	10(0.6)		2				20(0.3)	20(0.8)			3	1		不明2
SD09~10	A19~20	1	1												1			
遺構跡3 c																		
SX32	C9~16															4		
SX33	C9~16															4		
SX34	C9~16															1		
SX35	C 9	#	1	1	1	20(0.6)		1(0.6)		1	1(1.6)				2		不明1	
SX36	B9~16~ C9~16~																	
SX37	D 9																	
SX38	CD~D9~ ~73	4				1			1(0.3)		1(0.6)				1	1		鏡文1, 銀 鏡形1, 不明1
SX37	C9~D9	4				1									1			
SX38~39	C9~D9~ ~73	4				1									1			

表13 遺構出土遺物一覧表③

遺構名	地名	層位	占拠時代・古代	中世前期				中世後期				中世後期不明		近傍	その他		
				山本城	小糸	輪	土罐	山本城	小糸	六郷村	輪	土罐	山本城	大糸	七郎若井		
SX73-C9-09																	
SX74-D10		5	1	2	2(0.5)		2	2(2.7)	3		3(3.5)	6(3.0)	3	1	2	瓦質土器Ⅰ、 鐵石Ⅰ	
SX74-D10		1	2										1	1			
小糸																	
P1	B 4													2			
P5	B 7	1	1										1	1			
P7	B 7	1															
P9	A 6	1												1			
P19	B 6	1															
P45	B 4	1		2												鉄作Ⅰ	
P52	C 13																
P56	B 12		1														
P66	B 13	1	1										2				
P69	C 13	1											1	不明Ⅰ			
P73	B 14	1															
P78	C 15	1															
P91	B 12		2														
F107	B 11		1														
F121	B 11		1														
F122	B 11												2(0.3)				
F127	B 11		1														
F128	B 11		3(1.4)														
F144	B 11											2(0.6)					
F148	A 10												1				
F151	A 10												1(0.5)				
F154	A 10	1														燒粘土壤Ⅱ	
F159	B 9												3(1.2)		11(0.7)	不明Ⅰ	
F164	B 9												3(1.2)				
F166	B 9													1(0.1)			
F167	B 9	1															
F168	B 9	1															
F171	B 9	1															
F172	C 9	2	1(0.3) 1(0.9)		1(0.6)									1			
F183	B 9		1(0.4)														
F185	B 10												4(3.0)		4(0.6)		
F188	B 10							4(1.1)									
F189	B 10												3(2.0)		4(2.4)		
F191	B 10		1														
F192	B 10	1											1(1.4)	1			
F194	B 10		1										6(0.2)		9(1.7)		
F199	B 10													2			
F200	B 10												1(0.6)	1			
F206	B 10		1	1													
F209	B 10												1(2.5)		1(0.6)	鉄作Ⅰ	
F210	B 10	1												1			
F214	C 10												1				
F215	C 10		1											1(0.6)			
F220	B 10			1(0.4)												不明Ⅰ(0.3), 金屬製品Ⅰ	
F223	B 11		1														
F227	C 9		1											1			
F229	C 9		1(0.3)														
F231	A 9													6(1.2)			
F246	B 10		2(1.0)											2(0.6)		不明Ⅰ	
F262	A 10													10(0.6)			
F274	C 11		1														
F279	C 12		1														
F280	C 12	1	1										1(0.4)		1(0.3)	不明Ⅰ	
F286	C 11		1														
F291	B 10		1	1(0.1)												不明Ⅰ(0.3)	
F292	B 9	2	1					1						10(0.5)			
F294	B 9	2	1					1							10(0.5)		
F299	B 9													3(0.6)			
F307	C 11			1(0.3)												燒粘土壤Ⅰ	
F400	D 11	1	3	1									6(1.5)		16(2.4)	不明Ⅱ	

表14 遺構出土遺物一覧表④

遺構名	層位名	古墳時代・古代				中世前期				中世後期				中世後期分不得		近世	その他
		山本編 小豆	山本編 木製	山本編 土器	土器 漆器	山本編 小便	吉原 漆器	吉原 土器	吉原 漆器	吉原 土器	吉原 漆器	吉原 土器	吉原 漆器	吉原 土器	吉原 漆器		
P402	D11													11(8.5)	1	2	
P405	C4					240.3											
土器																	
SK2	B7	1	16	2													
SK10	B7	2	2														
SK11	D12	1		1													
SK18	C11	1		3	1									11(8.6)	4		
SK21	B9																
SK22	B9	1															
M上	同上	2		1										13(2.6)			
M上	同上	3		1										16(2.6)			
SK23	B9	1												39(9.8)			
SK26	B9	1	2			11(8.6)								41(7.7)	9(2.7)		
M上	M上	2												1		14(3.3)	
SK28	B9	1												2			
M上	M上	2												1(0.9)	6(9.3)		
SK31	C9	1		1													
SK32	A9	1	1	1													
SK40	C9	1	1	2													
SK44	B10	1		2											10(0.5)		木附1
M上	M上	2	2	2		1								2(2.8)	14(0.6)		
SK47	C9	1	1	1											1		
SK48	B10	1	2												2(0.7)		
SK52	C10	1	4	1				2	20.9	1(2.9)					24		6明2
M上	M上	2	3	4(1)				2		3(2.4)					1		東部赤塚1 (5.2)
M上	M上	3	2	4(0.6)		1(0.6)									2(0.7)		
M上	M上	4	2	2(0.2)				3(2.1)		52.8					1		
SK53	C10	1													1		
SK56	B14	1													2		
M上	M上	2													2(0.7)		
SK58	C9	1													1		
SK63	A9-10	1						1	20.6						7		木附1
M上	同上	2												4(0.5)	1	1	木附1
SK64	A9	1												6(1.4)			金剛製品1
SK65	A9	1													1		
M上	M上	2												2(3.5)			
SK72	C13	1		12													
SK73	C11	1															
SK111	E12	1		1										1(1.0)	2		織文1, 小町2
SK127	E10	1					50.3								5(1.2)		
SK144	E12			1													
SK155	D10		6	1													6明2
SK156	C 5 上面	1		1											11		
SK158	B6-C8		16												2(0.7)	2	
SK159	B3-A4		2	9	1(0.3)												
SK3	A2-B3	2		50.3													金剛製品1
SK11	C10-D1	8	10	2(2.5)				1(2.6)	1(0.7)						1	5	織文1
SK15	A9	2	1	2(0.6)				2	1		2(0.3)	1(1.0)		1	6(1.2)		金剛製品1
SK18	C10	#	1	16	5			1	10.6			11(8.1)	1	5	25(6.1)		
SX19	C10	3		1													
SX39	C11-12		2														
SX79	D10		1											1(2.0)			
第二章 考古学的 収集整理実績																	
SD56	B15	1		5													
M上	M上	2															
SX51	C15		8														織文1
SX55	C14		1	1(1.0)					33(2.6)								
総合合計																	
		456	96	335	759	68	18	13	52	26	97	10	3	77	1	12	5
		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
() 内の数字は個体数、() 内の数字は1件の個体数																	
		146.3	48.7	6.6	7	0.9	1.4	31.6	3.2	2.2	26.1	0.1	0.3	4.5	0.2	299.6	6
		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
合計																	
		456	96	335	759	68	18	13	52	26	97	10	3	77	1	12	5
		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

() 内の数字は個体数、() 内の数字は1件の個体数

表15 土器観察表①

遺物番号	出土地点	種類	伝置 (cm) 口径(底径)×高さ	成形・調整	胎土 石器質等○ サス込△、△×	焼成 外表面色	色調 内面、() (X/12)	保存状 態(X/12)	分類名・ 時期	図版番 号	
1 銀立輪鉢脚付1 (SK61.1番)	山東個人	11.2	体部内外面削取ナメ	素透、径 2 cm 以下 △、底石	良好	灰白色	灰白色	口幅1.2	新石器後半	17	
2 銀立輪鉢脚付4 (SK61.1番+2番)	山東個人	17.9	内外面削取ナメ	素透、径 1 cm 以下 △、底石	良好	灰白色	灰白色	口幅1.5	後漢4から5型式		
3 銀立輪鉢脚付4 (SK61.1番)	山東個人	7.6	体部内外面削取ナメ、底部 削取・底付リムナメ	素透、径 2 cm 以下 △、底石	良好	灰白色	灰白色	底52.6	高台遺跡に散在有り	後漢4から5型式	
4 銀立輪鉢脚付4 (SK61.1番)	小糸個人	5.45	底部外周削取・底部余調整	素透、径 2 cm 以下 △、底石	良好	灰白色	灰白色	底35.5	高台遺跡に散在有り	高台4型式	
5 銀立輪鉢脚付4 (SK61.2番)	山東土器 店	14.2	口端部内外削取方向ハメ張 付	素透、X	良好	(灰白色)	(X/1.9)		中後後期	22	
6 銀立輪鉢脚付4 (SK61.1番)	上野村 喜	9.2	6.5	1.5	体部外周一面削取ナメ・内側 削取、径 2 cm 以下 △、底石	普通	にじむ褐色、にじむ 灰白色	口幅5.5 底52.5	小野木古2型	22	
7 銀立輪鉢脚付4 (SK61.1番)	古川町 幸平	17.3	内外面削取ナメ	素透、X、削取	良好	(灰白色)	(X/1.7)	内側底に裂痕	古川戸後期後 半	21	
8 銀立輪鉢脚付4 (SK61.1番)	桂木、等				内外面削取ナメ張ナメ	素透、3.5 cm 以下 △、底石	良好	灰黄色	灰黄色		35
9 銀立輪鉢脚付4 (SK61.1番)	土屋屋 喜	6.1	2.6	1.6	体部内外削取ナメ張削取付	素透、径 2 cm 以下 △、底石、内側底 削取	普通	底54.5 底52.5	～そ葉	井川古4型	22
10 銀立輪鉢脚付4 (SK61.1番)	土屋屋 喜				外側削取ナメ・内側底 による削取	素透、径 2 cm 以下 △、底石	普通	にじむ褐色、にじむ 灰白色	井川古1型		
11 銀立輪鉢脚付4 (SK74)	夏室土器 店				外側削取のため内面、内側 削取	素透、径 2 cm 以下 △、底石	普通	底54.8	中後後期	22	
12 銀立輪鉢脚付5 (SK62.2番)	山東個人	6.9	底部外周削取ナメ、底部外 周削取・底付リムナメ	素透、底 0.5 cm 以下 △、底石	良好	灰白色	灰白色	底50.9	底部内面削取・高台遺跡 に散在有り	後漢4から5型式	
13 銀立輪鉢脚付5 (SK62.2番)	小糸個人	9.7	内側面削取ナメ	素透、X	良好	(灰白色)	(X/1.6)		小糸B群	23	
14 銀立輪鉢脚付5 (SK62.1番)	上野村 喜	8.9	体部外周削取底付・内側ナ メ	素透、2 cm 以下 △、底石	普通	にじむ褐色、にじむ 灰白色	口幅5.5 底52.5	井川C1型			
15 銀立輪鉢脚付5 (SK62.1番)	六戸芦戸 店			底部外周削取ナメ	素透、2 cm 以下 △、底石	良好	(灰白色)	口幅1.1	内側全面に裂痕	古川戸後期後 半	21
16 銀立輪鉢脚付5 (SK62.2番)	中野道 店			内側面削取ナメ	素透、X	良好	(灰白色)	口幅1	無文底反	中後後期	23
17 銀立輪鉢脚付5 (SK62.2番)	小糸個人	3.3	底部外周削取底付・内側 削取	素透、2 cm 以下 △、底石	良好	灰白色	灰白色	底44.7	轡縫5型式		
22 銀石造縫2.1型	山東個人	6.4	底部外周削取底付ナメ	素透、2 cm 以下 △、底石	良好	にじむ褐色、灰 白色	底53.5	後漢4から5型式			
23 銀石造縫2.1型	古川町 幸平 店付近大屋			内外面削取ナメ	素透、X、底石	良好	(灰白色)	口幅0.4	古川戸後期後 半		
24 銀石造縫2.1型	吉澤 口井田 1号			内外面削取ナメ	素透、底 2 cm 以下 △、底石	良好	灰白色	山幅0.1	中野2～4型式		
26 銀石造縫1.1型	須藤 新井(前)	6.2	底部内外面削取ナメ、底部外 周削取・底付リムナメ	素透、径 2 cm 以下 △、底石	不詳	青灰色	青灰色	底44.5	馬糞圓の半分は青灰色	T字紀前半	
27 銀石造縫1.1型	須藤 新井(前)			底部外周削取(平行手甲 穴)	素透、2 cm 以下 △、底石	良好	にじむ褐色	内圓平底、径の小さな丸足		22	
28 銀石造縫1.1型	須藤 新井(前)			内圓面削取ナメ	素透、X、削取	良好	にじむ褐色、にじむ 青灰色	口幅0.7	世紀紀後半		
29 銀石造縫1.1型	吉澤商店	7.2	底部外周削取底付・内側削 取	素透、X、削取	良好	灰白色	灰白色	底46.5	百代寺式	27	
30 銀石造縫1.1型	吉澤商店	8.5	底部内外面削取ナメ、底部外 周削取・底付リムナメ	素透、X、削取	良好	にじむ褐色	にじむ褐色	底44	百代寺式	27	
31 銀石造縫1.1型	山東個人	7.35	底部内外面削取ナメ、底部外 周削取・底付リムナメ	素透、径 2 cm 以下 △、底石	良好	灰白色	灰白色	底44.8	吉澤内面削取、高台遺跡 に散在有り	後漢4から5型式	
32 銀石造縫1.1型	小糸個人	8.0	4.6	2.5	底部外周削取ナメ、底部外 周削取・底付リムナメ	素透、底 2 cm 以下 △、底石	良好	にじむ褐色	口幅0.4	高台遺跡に散在有り	銀4型式
33 銀石造縫1.1型	古川町 吉澤小畠	4.2	底部外周削取底付・内側削 取	素透、X、削取	良好	灰白色	灰白色	底34			
34 銀石造縫1.1型	須藤商店	13.9	内圓面削取ナメ	素透、径 1 cm 以下 △、底石	良好	オリーバー色、黄 白色	口幅0.5		吉澤小後段、中野2～3 型式	29	
35 銀石造縫1.1型	吉澤 新井(前)	30.4	内外面削取ナメ	素透、△、底石	良好	灰白色	灰白色	口幅1.7	中野2～4型式		
36 銀石造縫1.1型	吉澤 新井(前)	13.6	内外面削取ナメ	素透、径 3 cm 以下 △、底石	良好	灰白色	灰白色	底46.5			
37 銀石造縫1.1型	吉澤 喬			素透、底 5 cm 以下 △、底石	良好	(オリーバー色)	口幅0.3		今野6～7型式		
38 銀石造縫1.1型	吉澤 喬			素透、底 2 cm 以下 △、底石	良好	にじむ褐色	灰 白色	底46.7			
39 銀石造縫1.1型	吉澤 喬			体部外周削取引文	素透、径 4 cm 以下 △、底石	良好	にじむ褐色	口幅0.5	中野1～2型式	26	
40 銀石造縫1.1型	吉澤 喬			体部外周削取引文	素透、X、削取	良好	灰白色	30と同一箇所	中野1～2型式	26	
41 銀石造縫1.1型	吉澤 新井(前)	10.7	4.6	7.7	内外面削取ナメ	素透、X、削取	良好	口幅1.3 底46.2			24
42 A1区 鎌倉牛伏 底付上端	吉澤商店 新井(前)			内圓面削取ナメ	素透、X、削取	良好	灰白色	底52	後漢	27	
43 A1区 鎌倉牛伏 底付上端	吉澤商店 新井(前)	4.7	内圓面削取ナメ、底部外削 取	素透、X、削取	良好	灰白色	底52		中後後期	23	
44 A1区 鎌倉牛伏 底付上端	吉澤商店 新井(前)	4.4	内圓面削取ナメ	素透、X	良好	(灰白色)	底52		削底・底付磨 削	23	
45 A1区 鎌倉牛伏 底付上端	吉澤商店 新井(前)			内圓面削取ナメ	素透、X	良好	(灰白色)	口幅0.5	中後後期	23	

表16 土器観察表②

番号	出土地点	器種	法量 (cm) 11往 真作 器底	成形・調製	胎上 石粒・多○、 普通△、少×	施成	色調 灰白・灰黃色、 内側灰	残存率 (X/12)	備考	分類名・ 時期	目録 番号	
46	A 3 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	7.6	伝統外曲輪子ナガ、後部外 曲輪底灰有無不詳	普通、X → 11 下、灰石	良好	灰白色・灰黃色	底部3.5	直筒外面に縦・横糸が付 灰	直筒4型・5型 式		
47	A 3 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	6.9	伝統外曲輪底灰ナガ、後部外 曲輪底灰有無不詳	普通、X → 11 下、灰石	良好	灰白色	底部10	高台底部に横糸があり 灰	直筒4型・5型 式		
48	A 1 区、 土器底灰 灰、土器	小輪A	4.95	伝統外曲輪底ナガ、後部外 曲輪底灰有無不詳ナガ	普通、X、 灰石	良好	にじい・青黄色；灰 色、灰白色	底部12	高台底部に横糸があり 灰	直筒4型式	19	
49	Z 7 区、 土器底灰 灰、土器	小輪A	4.15	直筒外曲輪底灰ナガナラ タケツリ	普通、X → 11 下、灰石・灰黄	良好	灰白色	底部6		直筒5型式		
50	Z 7 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	14.4	伝統外曲輪底灰ナガ、下部外 曲輪底灰ナガナラ、内側縫合	普通、X → 11 下、灰石・灰黃色	良好	灰白色・灰黃色	口輪3.9	高台周辺縫合跡を除き灰 灰	古墳戸後期後 半	21	
51	Z 7 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	5.8	伝統外曲輪子部が11往灰へカ ズリ	普通、X → 11 下、灰石	良好	(灰白色)	底部54	高台周辺縫合跡を除き灰 灰有無は見るにパン灰	内側縫合後後 半	21	
52	Z 7 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	5.8	直筒外曲輪底灰有無不詳	普通、X → 11 下、灰石	良好	灰白色	底部55	見込みに灰無			
53	Z 7 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	11.7	内側外曲輪ナガ	普通、X	良好	(灰白色)	口輪1	内側縫合体に灰無	古墳戸後期後 半		
54	Z 7 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	9.6	内側外曲輪ナガ	普通、X → 11 下、灰石	良好	(灰白色)	口輪9.7	内側縫合体、口輪縫合中央 に小窓開	内側縫合後後 半	21	
55	A 4 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	8.6	伝統外曲輪底灰有無不詳	普通、X	良好	にじい・青黄色	底部83	内側縫合体、口輪縫合の 縫合1cm・下系		21	
56	A 1 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	13	伝統外曲輪底灰ナガ、後部 外曲輪底灰ナラから外側縫合に かけ縫合ナラナラ	普通、X → 11 下、灰石	良好	灰黃色・にじい 青黄色	底部2.8	此内側平底	古墳戸後期	21	
57	埴造底灰、 1号	山茶輪A		外側縫合ナガ、内側縫合ナラ	普通、X → 11 下、灰石	良好	灰黃色	底部3系2.9平底上			20	
58	A 2 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	13.0	内側外曲輪ナガ	普通、X → 11 下、灰石・灰黃色	良好	(灰黃色)	口輪8.3		古墳3か4型 式	20	
59	A 3 区、 土器底灰 灰、土器	輪		内側外曲輪ナガ	普通、X → 11 下、灰石	良好	(灰黃色)	口輪8.9		14世紀		
60	Z 7 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	5.8	伝統外曲輪ナガ	普通、X → 11 下、灰石	良好	灰黃色・暗灰黃					
61	埴造底灰、 1号	山茶輪A	12.5	伝統外曲輪底灰ナガ	普通、X → 11 下、灰石	良好	(灰白色)	底部85	此外側に横糸あり			
62	Z 7 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	10.0	内側外曲輪底灰ナガ 内側内縫合(手行) 灰、土器	普通、X → 11 下、灰石	良好	灰黃色		横糸		25	
63	Z 4 区、 土器底灰 灰、土器	加工用輪	4.7	内側外曲輪底ナガ・外輪ナラ ナラ	普通、X → 11 下、灰石	良好	(灰色)	底部33	大穴火打溝等、高台基部 縫合有無、削り洗い高台		25	
64	A 4 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	16.3	内側外曲輪底ナガ	普通、X	良好	(灰白色)	口輪8.2	高台基部縫合有無に依 る		24	
65	Z 7 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	9.6	5.3	内側外曲輪ナガ	普通、X	良好	(灰黃色)	底部85	高台基部縫合有無に依 る		
66	Z 7 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	9.4	内側外曲輪ナガ	普通、X	良好	(灰黃色)	口輪2	内側縫合に透視感、外縫 合による縫合丈さ縮減		24	
67	A 4 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	11.9	内側外曲輪ナガ	普通、X	良好	(灰白色)	口輪1.9	外側全体に青緑色、内側 内側に白なる内側青緑		24	
68	Z 7 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	6.25	内側外曲輪ナガ	普通、X	良好	(灰色)	底部7	足元にニラ葉縫合、底部下 縫合から中腰にニラ葉縫合			
69	Z 7 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	6.15	内側外曲輪ナガ	普通、X	良好	(灰色)	底部10	足元ニラ葉縫合による青緑 色内側青緑		24	
70	Z 1 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	5.4	内側外曲輪ナガ	普通、X	良好	(灰色)	底部2	内側全體に透視感、外縫 合による縫合丈さ縮減		24	
71	Z 7 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	10.5	5.2	内側外曲輪ナガ	普通、X	良好	(灰白色)	口輪1.1	足元ニラ葉縫合による青緑 色内側青緑		24
72	A 1 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	10.4	内側外曲輪ナガ	普通、X	良好	(灰色)	底部2	内側全體に透視感、外縫 合による縫合丈さ縮減		24	
73	Z 7 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	10.5	5.2	内側外曲輪底灰ナガ 1号・A 1 区、 1号	普通、X → 11 下、灰石	良好	(灰白色)	口輪1.1	内側外曲輪から内側全體に かけて透視感		24
74	Z 2 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	10.4	5	内側外曲輪ナガ	普通、X	良好	(灰色)	口輪1.2	外側全體と内側内側に透 視感		24
75	Z 1 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	16.1	内側外曲輪ナガ	普通、X	良好	(灰色)	口輪0.8	内側全體に透視感		24	
76	Z 7 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	5.6	内側外曲輪ナガ	普通、X	良好	(灰白色)	口輪0.5				
77	A 1 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A		内側外曲輪ナガ	普通、X	良好	(灰色)					
78	Z 1 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	7.2	同上	同上	同上	同上	口輪1.3	77と同一個体			
79	Z 1 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A		同上	同上	同上	同上	底部54	直筒工形の器軸、77と同一 直筒5型式			
80	A 1 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	20.1	伝統外曲輪ナガ	普通、X	良好	(灰白色)	底部1.5	外側鉄輪、内側鉄輪、蓋部に 内側全體に凸凹		19世紀	
81	A 1 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A		伝統外曲輪ナガ	普通、X	良好	(灰色)	底部3	内側全體に凸凹、外側鉄輪 内側全體に凸凹		24	
82	A 1・A 2 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A		内側外曲輪ナガ	普通、X	良好	(灰白色)		外側全體に凸凹、外側鉄輪 内側全體に凸凹			
83	Z 4 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A		内側外曲輪ナガ	普通、X	良好	(灰白色)	口輪0.8	内側全體に凸凹、外側鉄輪 内側全體に凸凹		24	
84	Z 7 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A	32.5	伝統外曲輪と下方空ナガ、 内側外曲輪と内側青	普通、X → 11 下、灰石	良好	にじい・青黄色；に じい・青黄色	口輪0.3	内側外曲輪に底部口縫合 内側全體に凸凹	直筒7・近世	24	
85	Z 4 区、 土器底灰 灰、土器	山茶輪A		内側外曲輪ナガ	普通、X	良好	(灰白色)	底部0.8	内側全體に凸凹	直筒1-D-1、16世紀	24	

表17 土器観察表③

遺物 番号	出土地点	器種	伝量 (cm) 口径 底径 厚さ	成形・調製	土 石粘多○ 高底△	焼成 内側面	色調 (X/12)	残存率 (X/12)	傷等	分類名・ 時期		復元 番号	
										内側面	外側面		
96 A 214. 土器底盤 底盤、1号	鹿児島県 高瀬川	30.0	内外面輪削ナメ	直、径 1 cm 以下 △、底	良好 (灰)	II期1.5 底面	内外面輪削。底盤外周上部 から底盤を削り、斜面に 斜面に凹凸がある。	24					
97 SD2.1 壶	上野郡 滝	4.8	輪削外削内削輪削 内削外削	直、×	不良 (灰)	III期1.8 底面	底盤内側半周、両外端部に 焼損痕あり	25	底盤	2期式			
98 SD2.1 壺	山本郷A	7.75	底部外削輪削ナメ、底部外 削内削輪削ナメ	直、底 1.5 cm 以下 △、底	良好 (灰)	III期4 底面	底盤内側半周、両外端部に 焼損痕あり	26	底盤	4か5型式			
99 SD2.1 壺	古賀市 伊田	15.4	底部外削輪削ナメ	直、底 2 cm 以下 △、底	良好 (灰)	III期1.9 底面	底盤内側半周、両外端部に 焼損痕あり	27	底盤	後期南 半			
100 SD3.1 壺	山本郷A	6.9	底部外削輪削ナメ、底部外 削内削輪削ナメ	直、底 1 cm 以下 △、底	良好 (灰)	III期6 底面	底盤内側半周、両外端部に 焼損痕あり	28	底盤	4か5型 式			
101 SD3.1 壺	吉野郡 吉野町	—	内外面輪削ナメ	直、底 1 cm 以下 △、底	良好 (灰)	III期5.5 底面	内外面輪削	29	吉野戸後期 手				
102 SD3.1 壺	吉野郡 吉野町	14.4	底部外削輪削ナメ、底部外 削内削輪削ナメ	直、底 1 cm 以下 △、底	良好 (灰)	III期6.6 底面	吉野戸後期手	30	吉野戸後期 手				
103 SD6.1 壺	山本郷A	30	底部外削輪削ナメ、底部外 削内削輪削ナメ	直、底 1.5 cm 以下 △、底	良好 (灰)	III期51.9 底面	底部外削輪削ナメ底より、 吉野戸後期手	31	吉野戸後期 手	4か5型 式			
104 SD9.1 壺	山本郷A	9.4	底部外削輪削ナメ	直、底 2 cm 以下 △、底	良好 (灰)	III期1.1 底面	高台窯全体に焼損あり	32	吉野戸後期 手	4か5型 式			
105 SD9.1 壺	小田A	3.0	底部外削輪削ナメ、底部外 削内削輪削ナメ	直、×	良好 (灰)	III期7 底面	吉野戸後期手	33	吉野戸後期 手	4か5型 式			
106 SD9.1 壺	中國郡 青垣村	—	内外面輪削ナメ	直、×	良好 (灰)	III期8.5 底面	吉野戸後期手	34	吉野戸後期 手	4か5型 式			
107 SD9.1 壺	山本郷B	11.6	内外面輪削ナメ	直、×	良好 (灰)	III期1.4 底面	吉野戸後期手	35	吉野戸後期 手	4か5型 式			
108 SD9.1 壺	吉野郡 大字森坂	—	内外面輪削ナメ	直、×	良好 (灰)	III期0.5 底面	吉野戸後期手	36	吉野戸後期 手	4か5型 式			
109 SD9.1 壺	吉野郡 大字森坂	4.4	内外面輪削ナメ	直、底 2 cm 以下 △、底	良好 (灰)	III期9.2 底面	吉野戸後期手、引き抜き、 底出し窓台、縦縫に移行	37	吉野戸後期 手				
110 A 5 区. 1 壺	吉野郡 吉野町	5.6	内外面輪削ナメ	直、×	良好 (灰)	III期1.7 底面	吉野戸後期手	38	吉野戸後期 手				
111 SD9.1 壺+A 5 吉野郡 吉野町	吉野郡 吉野町	5.8	上	同上	同上	同上	内外面輪削体に焼損、底面に 2年目窓、10cmと同一形状	39	吉野戸後期 手				
112 SD9.2 壺	櫛村	7.4	底部外削輪削ナメ、底部外 削内削輪削ナメ	直、底 1 cm 以下 △、底	良好 (灰)	III期4.7 底面	吉野戸後期手	40	吉野戸後期 手				
113 SD9.2 壺	吉野郡 吉野町	—	内外面輪削ナメ	直、×	良好 (灰)	III期6.6 底面	吉野戸後期手、縦縫に 移行	41	吉野戸後期 手				
114 SD9.2 壺	吉野郡 吉野町	—	内外面輪削ナメ	直、×	良好 (灰)	III期2 底面	吉野戸後期手	42	吉野戸後期 手				
115 SD9.2 壺	吉野郡 吉野町	—	内外面輪削ナメ	直、×	良好 (灰)	III期0.5 底面	吉野戸後期手に移る在文化 時代	43	吉野戸後期 手				
116 SD9.2 壺	吉野郡 吉野町	—	内外面輪削ナメ、底部外削 内削輪削ナメ	直、×	良好 (灰)	III期2.5 底面	吉野戸後期手に移る在文化 時代	44	吉野戸後期 手				
117 SD9.2 壺	吉野郡 吉野町	—	内外面輪削ナメ、底部外削 内削輪削ナメ	直、×	良好 (灰)	III期7 底面	吉野戸後期手は実物、而も古 窓台	45	吉野戸後期 手				
118 SD9.2 壺	吉野郡 吉野町	—	内外面輪削ナメ	直、×	良好 (灰)	III期0.1 底面	半世初期	46					
119 SD9.5 1 壺	小田A	4.6	底部外削輪削ナメ	直、×	良好 (灰)	III期6 底面	吉野戸後期手が参考、 吉野戸後期手に焼損あり	47	吉野戸後期 手	4型式			
120 SD9.5 1 壺	山本郷A	7.6	底部外削輪削ナメ、底部外 削内削輪削ナメ	直、×	良好 (灰)	III期0.3 底面	吉野戸後期手	48	吉野戸後期 手	4か5型 式			
121 SD9.5 1 壺	吉野郡 吉野町	—	底部外削輪削ナメ、底部外 削内削輪削ナメ	直、底 1 cm 以下 △、底	良好 (灰)	III期0.5 底面	吉野戸後期手	49	吉野戸後期 手				
122 SD9.5 1 壺	井	—	内外面輪削ナメ	直、△、底	良好 (灰)	III期0.6 底面	吉野戸後期手に移る在文化 時代	50	吉野戸後期 手				
123 SD9.2 2 壺	山本郷A	30	底部外削輪削ナメ、底部外 削内削輪削ナメ	直、底 1 cm 以下 △、底	良好 (灰)	III期3 底面	吉野戸後期手、吉野戸後期 手に焼損あり	51	吉野戸後期 手	4か5型 式			
124 SD9.3 1 壺	山本郷B	5.5	底部外削輪削ナメ、底部外 削内削輪削ナメ	直、底 3 cm 以下 △、底	良好 (灰)	III期54 底面	吉野戸後期手	52	吉野戸後期 手	4型式			
125 SD9.3 1 壺	中国郡 青垣村	5	内外面輪削ナメ、底部外削 内削輪削ナメ	直、×	良好 (灰)	III期0.6 底面	吉野戸後期手に移る在文化 時代	53	吉野戸後期 手				
126 SD9.3 1 壺	吉野郡 吉野町	6.3	内外面輪削ナメ、底部外削 内削輪削ナメ	直、×	良好 (灰)	III期2.5 底面	吉野戸後期手に移る在文化 時代	54	吉野戸後期 手				
127 SD9.3 1 壺	吉野郡 吉野町	—	内外面輪削ナメ、底部外削 内削輪削ナメ	直、×	良好 (灰)	III期7 底面	吉野戸後期手は実物、而も古 窓台	55	吉野戸後期 手				
128 SD9.5 2 壺	吉野郡 吉野町	—	内外面輪削ナメ	直、×	良好 (灰)	III期0.1 底面	半世初期	56					
129 路跡2	吉野郡 吉野町	—	底部外削輪削ナメ	直、1.5 cm 以下 △、底	良好 (灰)	III期1.2 底面	吉野戸後期手が参考、 吉野戸後期手に焼損あり	57	吉野戸後期 手	4型式			
130 路跡4.2	吉野郡 吉野町	—	底部外削輪削ナメ	直、底 1 cm 以下 △、底	良好 (灰)	III期0.1 底面	吉野戸後期手	58	吉野戸後期 手	4型式			
131 路跡5.2 (SD9.5 2 壺)	吉野郡 吉野町	—	底部外削輪削ナメ	直、底 3 cm 以下 △、底	良好 (灰)	III期1.5 底面	吉野戸後期手	59	吉野戸後期 手				
132 路跡5.2 (SD9.5 1 壺)	中国郡 青垣村	—	内外面輪削ナメ	直、×	良好 (灰)	III期0.3 底面	吉野戸後期手	60	吉野戸後期 手				
133 路跡5.3 (SD9.7 3 壺)	吉野郡 吉野町	—	底部外削輪削ナメ、底部外 削内削輪削ナメ	直、×、底	良好 (灰)	III期7 底面	吉野戸後期手が参考、 吉野戸後期手に焼損あり	61	吉野戸後期 手	4型式			
134 路跡5.3 (SD9.7 4 壺)	山本郷A	16	7.5	底部外削輪削ナメ、底部外 削内削輪削ナメ	直、底 1 cm 以下 △、底	良好 (灰)	III期3 底面	吉野戸後期手から底盤内に 付けて有り、底盤内に付けて 有り	62	吉野戸後期 手	4か5型 式		
135 路跡5.3 (SD9.7 5 壺)	山本郷A	36.5	8.3	底部外削輪削ナメ、底部外 削内削輪削ナメ	直、底 1 cm 以下 △、底	良好 (灰)	III期7.1 底面	吉野戸後期手、吉野戸後期 手に焼損あり	63	吉野戸後期 手	4か5型 式		
136 路跡5.3 (SD9.7 1 壺)	山本郷A	36.5	7.5	底部外削輪削ナメ、底部外 削内削輪削ナメ	直、底 1 cm 以下 △、底	良好 (灰)	III期1.5 底面	吉野戸後期手が参考、 吉野戸後期手に焼損あり	64	吉野戸後期 手	4か5型 式		
137 路跡5.3 (SD9.7 2 壺)	山本郷A	35.8	7.3	底部外削輪削ナメ、底部外 削内削輪削ナメ	直、底 1 cm 以下 △、底	良好 (灰)	III期7 底面	吉野戸後期手	65	吉野戸後期手	4か5型 式		
138 路跡5.3 (SD9.7 3 壺)	山本郷A	36.5	7.4	底部外削輪削ナメ、底部外 削内削輪削ナメ	直、底 1 cm 以下 △、底	良好 (灰)	III期3 底面	吉野戸後期手に焼損の跡、 吉野戸後期手に焼損あり	66	吉野戸後期 手	4か5型 式		
139 路跡5.3 (SD9.7 4 壺)	小田A	9	4.9	底部外削輪削ナメ、底部外 削内削輪削ナメ	直、底 1 cm 以下 △、底	良好 (灰)	III期12 底面	吉野戸後期手	67	吉野戸後期 手	4型式		
140 路跡5.3 (SD9.7 1 壺)	小田A	9.5	9.5	底部外削輪削ナメ、底部外 削内削輪削ナメ	直、底 1 cm 以下 △、底	良好 (灰)	III期19 底面	吉野戸後期手	68	吉野戸後期手	4型式		

表18 土器観察表④

遺物番号	出土地点	器種	法量(cm)		成形・調整	土石 石粉量%○ 膏質△、少X 灰△	焼成 外側、内側(、) 内断面	色調	焼成率 (X/12)	備考	分類名・ 時期	図版 番号
			口径	底径								
141	虎尾跡 5-A (SK27.2号)	小鉢A	8.7	4.6	2.7	底盤内斜面切欠きナメ、底盤外 斜面切欠きナメ	底、径 2 mm 以下△ △、底石	良好 に良い黄褐色、△ に良い黄褐色	QIMB.3 底盤外斜面切欠きナメ	秦律4型式	18	
142	虎尾跡 3-B (SK27.1号)	小鉢A	9.8	4.95	2.6	底盤内斜面切欠きナメ、底盤外 斜面切欠きナメ	底、径 3 mm 以下△ △、底石	良好 黄白色、米白色	QIMB.2 底盤外斜面切欠きナメ	秦律5型式	19	
143	虎尾跡 3-A (SK27.2号)	小鉢A	8.1	4.5	2.2	底盤内斜面切欠きナメ、底盤外 斜面切欠きナメ	底、径 10mm 以下△ △、底石	良好 黄褐色、米白色	QIMB.2.3 底盤外斜面切欠きナメ	秦律5型式	18	
144	虎尾跡 3 (SK27.2号)	小鉢A	8.05	3.6	2	底盤内斜面切欠きナメ、底盤外 斜面切欠きナメ	底、径 3 mm 以下△ △、底石	良好 黄白色、米白色	QIMB.8 底盤外斜面切欠きナメ	秦律5型式	19	
145	虎尾跡 3 (SK27.2号)	小鉢A	7.8	4	2.2	底盤内斜面切欠きナメ、底盤外 斜面切欠きナメ	底、径 3 mm 以下△ △、底石	良好 黄白色、米白色	QIMB.4 底盤外斜面切欠きナメ	秦律5型式	19	
146	虎尾跡 3 (SK27.2号)	小鉢A	7.6	3.9	2.75	底盤内斜面切欠きナメ、底盤外 斜面切欠きナメ	底、径 3 mm 以下△ △、底石	良好 黄白色、米白色	QIMB.5 底盤外斜面切欠きナメ	秦律5型式	19	
147	虎尾跡 3-I + B15 虎尾 豊					口縁部の外斜面ナメ	底、径 6 mm 以下△ △、底石	不良 に良い黄褐色		中野15型式	28	
148	虎尾跡 1-B (SK27.1号)	虎尾 豊				底盤内斜面合掌ナメに附加側板 ナメナメ	底、径 4 mm 以下△ △、底石	良好 暗褐色、に良い 黄褐色	虎尾1号	秦律A.2 人頭式	22	
149	虎尾跡 1 土師器 細	土師器 細				内外底面ナメ	底、径 10mm 以下△ △、底石、米白色	良好 黄褐色、に良い 黄褐色	11880.9	秦律1号	22	
150	虎尾跡 3-N (SK26.2号)	土師器 豊				底盤のため不明	底、径 2 mm 以上△ △、底石、米白色	良好 に良い褐色、△ に良い褐色	QIMB.5	13世纪	22	
151	虎尾跡 3 (SK26.1号)	土師器 豊				内外底面ナメ	底、径 2 mm 以下△ △、底石	良好 黄褐色、米白色	QIMB.5.5 底盤外斜面ナメ	小野木2 A 型	22	
152	虎尾跡 3 (SK27.2号)	土師器 豊			5.1	輪轂成形	底、径 10mm 以下△ △、底石	良好 に良い黄褐色、△ に良い黃褐色	QIMB.10	内輪有台目	22	
153	虎尾跡 7 (SK26.2号)	七輪器 豊				底盤外斜面ナメ、口縁部の側面	底、径 3 mm 以下△ △、底石	不良 に良い黄褐色、△ に良い黃褐色	11880.3 底盤外斜面に側面加工による 輪轂部、輪轂部外斜面に底盤 部、米白色	13世纪	28	
154	虎尾跡 1 (SK29.1号)	土師器 5.7 口縁付筒				山形底盤ナメ、底盤外斜面 ナメナメ、内側底盤側面	底、径 2 mm 以下△ △、底石、米白色	良好 シマリーカー色、△ に良い褐色	11880.9 シマリーカー色	C型	16	
155	虎尾跡 3-B (SK29.2号)	土師器 豊	10.5			側壁成形	底、X	良好 灰色、米白色	QIMB.1.5	虎尾2型		
156	虎尾跡 3 (SK29.2号)	土師器 豊				底盤外斜面削除(カッズリ)	底、X、側面	良好 底盤褐色：底盤側面	QIMB.1.5 底盤外斜面に底盤を削除する カッズリ	QIMB.1.5	17	
157	虎尾跡 3 (SK29.4号)	土師器 豊			7.0	底盤側面削除	底、X、側面	良好 底盤褐色：底盤側面	QIMB.1.5 底盤外斜面に底盤を削除する カッズリ	石代寺湖式	17	
158	虎尾跡 3 (SK29.4号)	土師器 豊	10.9	6.7	6.3	底盤内斜面切欠きナメ、底盤外 斜面切欠きナメ	底、径 2 mm 以下△ △、底石	良好 に良い褐色、△ に良い褐色	QIMB.2.3 底盤外斜面切欠きナメ	石代寺湖式	19	
159	虎尾跡 3-B (SK29.2号)	土師器 豊	16.5			内底面削除	底、X	良好 底盤褐色：底盤側面	QIMB.2 底盤外斜面削除	鳥取4型式	23	
160	虎尾跡 3 (SK29.1号)	土師器 豊	18.2	9.9	4.4	底盤内斜面切欠きナメ、底盤外 斜面切欠きナメ	底、径 2 mm 以下△ △、底石	良好 黄褐色、米白色	QIMB.3 底盤外斜面削除	鳥取4型式	23	
161	虎尾跡 3-B (SK24.1号)	茶碗模	18.5	8.8	5	底盤内斜面切欠きナメ	底、径 2 mm 以下△ △、底石	良好 米白色、米白色	QIMB.4 底盤内斜面削除	鳥取4.5型式	19	
162	虎尾跡 5 (SK29.2号)	山高輪A	18.3	7.5	5.5	底盤内斜面切欠きナメ、底盤外 斜面切欠きナメ	底、X、側面	良好 米白色、米白色	QIMB.4 底盤外斜面に側面加工あり	鳥取4.5型式	18	
163	虎尾跡 3 (SK29.1号)	山高輪A	18.6	7.6	5.2	底盤外斜面削除(底盤側面 削除)切欠きナメ	底、径 5 mm 以下△ △、底石	良好 米白色、米白色	QIMB.1 底盤外斜面削除	鳥取4.5型式	18	
164	虎尾跡 3-B (SK29.2号)	山高輪A	18.2	7.2	4.2	底盤内斜面切欠きナメ、底盤外 斜面切欠きナメ	底、X、側面	良好 米白色、米白色	QIMB.3 底込に底合基が付着、底 盤側面削除	鳥取4.5型式	18	
165	虎尾跡 3-B (SK29.2号)	小鉢A	9	4	2.6	底盤内斜面切欠きナメ	底、径 6 mm 以下△ △、底石	良好 米白色、米白色	QIMB.4 底盤外斜面切欠きナメ	秦律4型式	18	
166	虎尾跡 3 (SK29.2号)	小鉢A	8.1	5.7	2.1	底盤内斜面切欠きナメ、底盤外 斜面切欠きナメ	底、径 2 mm 以下△ △、底石	良好 米白色、米白色	QIMB.4.2	秦律5型式		
167	虎尾跡 3 (SK29.1号)	小鉢A	8.3	5.5	1.95	底盤内斜面切欠きナメ、底盤外 斜面切欠きナメ	底、X、側面	良好 米白色、米白色	QIMB.4 底盤外斜面に側面加工あり	鳥取4.5型式	18	
168	虎尾跡 3 (SK29.1号)	山高輪A	16.6	7.6	5.2	底盤外斜面削除(底盤側面 削除)切欠きナメ	底、径 5 mm 以下△ △、底石	良好 米白色、米白色	QIMB.1 底盤外斜面削除	鳥取4.5型式	18	
169	虎尾跡 3 (SK29.1号)	山高輪A	16.2	7.2	4.2	底盤内斜面切欠きナメ、底盤外 斜面切欠きナメ	底、X、側面	良好 米白色、米白色	QIMB.3 底込に底合基が付着、底 盤側面削除	鳥取4.5型式	18	
170	虎尾跡 3 (SK29.2号)	小鉢A	9	4	2.6	底盤内斜面切欠きナメ	底、径 6 mm 以下△ △、底石	良好 米白色、米白色	QIMB.4 底盤外斜面切欠きナメ	秦律4型式	18	
171	虎尾跡 3 (SK29.1号)	小鉢A	8	4	1.9	底盤内斜面切欠きナメ、底盤外 斜面切欠きナメ	底、径 2 mm 以下△ △、底石	良好 米白色、米白色	QIMB.1 底盤外斜面切欠きナメ	秦律5型式	19	
172	虎尾跡 3 (SK29.2号)	小鉢A	7.8	4.1	2.1	底盤内斜面切欠きナメ、底盤外 斜面切欠きナメ	底、X、側面	良好 米白色、米白色	QIMB.1.8 底盤外斜面に底盤を埋め込み	秦律5型式	19	
173	虎尾跡 1 土師器	土師器				底盤外斜面削除	底、X、側面	良好 米白色、米白色	QIMB.5 底盤外斜面に底盤を埋め込み	六角井後期		
174	虎尾跡 3-B (SK29.2号)	茶碗模	27.8			内底面削除ナメ	底、4 mm 以下△ △、底石、米白色	良好 米白色、米白色	QIMB.1.2	中野2.7型		
175	虎尾跡 3 (SK29.1号)	土師器 細	7.75	7.7	2.4	底盤外斜面1段ナメ、内側面1 段ナメ	底、径 5 mm 以下△ △、底石	良好 米白色	QIMB.5.7 底盤外斜面1段ナメ	小野木2 B 2 型	22	
176	虎尾跡 3-B (SK29.1号)	土師器 細				底盤外斜面1段ナメ	底、径 2 mm 以下△ △、中高輪	良好 に良い黄褐色、△ に良い黄褐色	QIMB.1 底盤外斜面1段ナメ	小野木2 B 2 型	22	
177	虎尾跡 3-B (SK29.2号)	小鉢B				底盤のため不明	底、径 4 mm 以下△ △	不良 米黄色、米白色	QIMB.1 米白色	秦律5型式	19	
178	虎尾跡 3-B (SK27.2号)	茶碗模	17.6			底盤外斜面削除(ナメ)	底、径 5 mm 以下△ △、底石	良好 △、良い黄褐色、△	11881 底盤外斜面削除	金銭器模様	8世纪	
179	虎尾跡 2 (SK24.1号)	中国茶器 白磁	22.6			内底面削除ナメ	底、X	良好 米白色	QIMB.1.2	中野2.7型	22	
180	虎尾跡 2 (SK24.1号)	茶碗模	22.4			内底面削除ナメ	底、X	良好 米白色	QIMB.1.9	13-14世纪	22	
181	虎尾跡 2 (SK24.1号)	山高輪A	7.35			底盤内斜面切欠きナメ、底盤外 斜面切欠きナメ	底、2 mm 以下△ △、底石	良好 米白色、米白色	QIMB.5.5 底盤内斜面切欠きナメ	鳥取4.5型式	22	
182	虎尾跡 2 (SK24.1号)	山高輪A	9.4	6	3.2	底盤内斜面切欠きナメ、底盤外 斜面切欠きナメ	底、X、底石	良好 米白色、米白色	QIMB.5 底盤外斜面切欠きナメ	鳥取4.5型式	22	
183	虎尾跡 2 (SK24.1号)	山高輪A	9.4	5.7	3.0	底盤内斜面切欠きナメ	底、2 mm 以下△ △、底石	良好 △、良い黄褐色、△	11881 底盤外斜面切欠きナメ	古河後期		
184	虎尾跡 2 (SK24.1号)	土師器 細	8	3.4	1.75	底盤外斜面1段ナメ、内側面1 段ナメ	底、X	良好 △、良い黄褐色、△	QIMB.5.5 底盤外斜面1段ナメ	小野木2 A 2 型	22	
185	虎尾跡 2 (SK24.1号)	土師器 細				底盤外斜面1段ナメ	底、X	良好 △、良い黄褐色、△	QIMB.1 底盤外斜面1段ナメ	小野木2 A 2 型	22	
186	虎尾跡 2 (SK24.1号)	土師器 細				底盤外斜面1段ナメ	底、X	良好 △、良い黄褐色、△	QIMB.1 底盤外斜面1段ナメ	小野木2 A 2 型	22	
187	虎尾跡 2 (SK24.1号)	土師器 細				底盤外斜面1段ナメ	底、X	良好 △、良い黄褐色、△	QIMB.1 底盤外斜面1段ナメ	小野木2 A 2 型	22	
188	虎尾跡 2 (SK24.1号)	土師器 細				底盤外斜面1段ナメ	底、X	良好 △、良い黄褐色、△	QIMB.1 底盤外斜面1段ナメ	小野木2 A 2 型	22	
189	虎尾跡 2 (SK24.1号)	土師器 細				底盤外斜面1段ナメ	底、X	良好 △、良い黄褐色、△	QIMB.1 底盤外斜面1段ナメ	小野木2 A 2 型	22	
190	虎尾跡 2 (SK24.1号)	土師器 細				底盤外斜面1段ナメ	底、X	良好 △、良い黄褐色、△	QIMB.1 底盤外斜面1段ナメ	小野木2 A 2 型	22	
191	虎尾跡 2 (SK24.1号)	加工品				内底面削除ナメ	底、X、底石	良好 △、良い黄褐色、△	QIMB.1 底盤外斜面1段ナメ	13-14世纪	25	
192	虎尾跡 2 (SK24.1号)	底盤外斜面 切欠け模				内底面削除ナメ	底、X	良好 △、良い黄褐色、△	QIMB.0.4	墓室III		
193	SK22.3号	小鉢A	4.5			底盤外斜面切欠け模	底、1 mm 以下△ △、底石、米白色	良好 黄褐色	QIMB.2.8	底盤外斜面に被削痕あり	秦律5型式	

表19 土器観察表⑤

遺物 番号	出土地点	器種	法縦 (cm) 内径 外径 厚さ	成形・調整	鉢土 内側墨多○ 外側ム、△ X	底成 形	色調 外面(内側、○) 内面黒	表中 (X/12)	備考	分類名・ 時期	図版 番号
196 SK22. 2層	土師器 Ⅲ	8.9	内側墨多○ 外側ム、△ X	内側墨多○ 外側ム、△ X	鉢土 内側墨多○ 外側ム、△ X	底成 形	によい變色色：口 底：灰白色	X/12.5	井川B 1層b	22	
196 SK22. 1層	土師器 Ⅲ			内側墨多○ 外側ム、△ X	鉢土 内側墨多○ 外側ム、△ X	底成 形	によい變色色：口 底：灰白色	X/12.6	井川B 3層	22	
197 SK22. 1層	土師器 Ⅲ	8.7	6.55	2.4	底成 形内側ム、外側黒	底成 形	によい變色色：口 底：灰白色	X/12.7	井川C 1層	18	
198 SK22. 2層	土師器 Ⅲ	7.3	5.5	2.2	底成 形内側ム、外側黒	底成 形	によい變色色：口 底：灰白色	X/12.8	大きく広がる平底形 井川C 1層	18	
199 SK22. 2層	土師器 Ⅲ	6.95	3.4	1.35	底成 形内側ム、外側黒	底成 形	によい變色色：口 底：灰白色	X/12.9	井川C 1層	22	
200 SK22. 1層+2層	土師器 Ⅲ	6.7		内側墨無調整	底成 形	によい變色色：口 底：灰白色	X/13.0	CMS 底X/2	井川C 2層	22	
201 SK22. 2層	土師器 Ⅲ			口部外側墨無調整ののみ、内側黒	底成 形	によい變色色：口 底：灰白色	X/13.2	井川C 1層	22		
202 SK22. 2層	土師器 Ⅲ	7.3	3.2	1.4	内側墨無調整	底成 形	によい變色色：口 底：灰白色	X/13.3	底板外側の内凹し 井川C 2層	22	
203 SK22. 1層	土師器 Ⅲ			底板外側墨無調整のみ、底板内側 黒	底成 形	によい變色色：口 底：灰白色	X/13.3	井川C 1層中	22		
204 SK22. 1層	土師器 Ⅲ			底板内側墨無調整	底成 形	によい變色色：口 底：灰白色	X/13.4	井川C 2層	22		
205 SK22. 1層	中空器皿 白磁器	4.3		内側墨無調整、外側内側黒、外側 ム、△	底成 形	によい變色色：一定 底：灰白色	X/13.5	底板の底さ一定 井川C 2層	22		
206 SK22. 1層+2層 占田戸 壁+小屋	19	6.2	2.1	各部内側墨無調整、外側内側黒、外側 ム、△	底成 形	灰白色：灰白色	X/13.6	只見川に片耕、底内凹付 秋元らり	23		
207 SK22. 4層	土師器 Ⅲ	6.4	3.2	0.5	底板外側墨無調整のみ、内側黒	底成 形	によい變色色：口 底：灰白色	X/13.7	井川C 1層	22	
208 SK22. 1層	出刃器 Ⅱ			内側墨無調整	底成 形	灰白色：灰白色	X/13.8	底深か9型式	22		
211 SK18. 石河原込合 青滑 瓦口付日輪				底板外側下部内側方向ナギ	底成 形	灰良好：黑色	X/13.9	底板下部内側平面、青滑に 黒色地の付帯	X/13.9-14.0	20	
212 SK18. 2層	占田戸 瓦口付大頭			内側墨無調整	底成 形	灰良好：灰白色	X/14.0	底板下部内側平面、 占田戸後頭塗付	21		
213 SK18. 2-3層	土師器 Ⅲ	7.7	7	1.35	底板外側下部内側方向ナギ、内側墨 無	底成 形	によい變色色：口 底：灰白色	X/14.1	全面に灰地	22	
214 SK 2. 1層	須賀器 白磁器(BK)	12.5		内側墨無調整	底成 形	灰良好：灰白色	X/14.2	井川C 1層	22		
215 SK 2. 1層	須賀器 白磁器(BK)	7.2		底板外側墨無調整	底成 形	灰良好：灰白色	X/14.3	底深2.7	8世紀		
216 SK 2. 2層	須賀器 白磁器(BK)	13.8		底板内外側墨無調整	底成 形	灰良好：灰白色	X/14.4		8世紀		
217 SK 2. 1層	須賀器 Ⅲ			内側墨無調整(底板平行甲) 内側墨無調整(底板平行甲)	底成 形	灰良好：灰白色	X/14.5	底板内側墨無調整、 内側墨無調整(底板平行甲)	22		
218 SK18. 1層	土師器 Ⅲ	7	3.8	1.7	底板外側墨無調整、内側墨 無	底成 形	によい變色色：口 底：灰白色	X/14.6	井川C 1層	18	
219 SK56. 1層	土師器 白磁器			墨無成形	底成 形	によい變色色：口 底：灰白色	X/14.7	内側墨無成形	22		
220 SK136上端	小内戸	4.8		体盤内外側墨無調整	底成 形	灰良好：灰白色	X/14.8	底深4.5	古戸4型式		
221 SK63. 1層	内戸戸 瓦口付大頭	22		内側墨無成形	底成 形	灰良好：灰白色	X/14.9		古戸瓦付頭塗付	21	
222 SK63. 1層	内戸戸 壁小屋			体盤内外側墨無調整	底成 形	灰良好：灰白色	X/15.0			21	
223 SK63. 1層	土師實大頭			口部墨無成形ナギ	底成 形	灰良好：灰白色	X/15.1	底板内外側ともに僅3cmの 底頭丸り			
224 SK19	須賀器 白磁器			内側墨無ナギ、底板内 側墨無ナギ	底成 形	灰良好：灰白色	X/15.2		8世紀		
225 SK19	須賀器 白磁器	8.6		体盤外側下部内側ヘタケリ	底成 形	灰良好：灰白色	X/15.3		8世紀後半	17	
226 SK19	須賀器 白磁器	14.4		体盤内外側墨無調整	底成 形	灰良好：灰白色	X/15.4		8世紀	17	
227 SK19	大頭	13.4		体盤内外側墨無調整	底成 形	灰良好：灰白色	X/15.5	体盤内外側墨無調整、底 頭の幅2.5cm-3.0cm	21		
228 SK31	須賀器 白磁器(BK)	11.35		底板の手前小頭	底成 形	灰良好：灰白色	X/15.6		7世紀紀		
229 SK31. 1層	山根器 Ⅲ	13.3		内側墨無成形ナギ	底成 形	灰良好：灰白色	X/15.7		藤原式1型式	19	
230 SK15. 1層	山根器 白磁器	12.8	8.2	2.3	内外側墨無成形ナギ	底成 形	灰良好：灰白色	X/15.8		13-14世紀	23
231 SK55. 2層	土師器 Ⅲ	13.4	5.2	2.7	墨無成形	底成 形	灰良好：灰白色	X/15.9	佐藤A 2層	16	
232 SK16. IV層	須賀器 白磁器			内側ナギ	底成 形	灰良好：灰白色	X/16.0	底良好：灰白色	高文地粗末	15	
233 SK16. IV層	須賀器 白磁器			内側ナギ	底成 形	灰良好：灰白色	X/16.1	底良好：灰白色	高文地粗末	15	
240 C11R	須賀器 白磁器			内側不規	底成 形	灰良好：灰白色	X/16.2	上・横良好、238と同一個体の 可能性がある	高文地粗末	15	
241 C11R. IV層	須賀器 白磁器			内側ナギ	底成 形	によい變色色：灰灰 色	X/16.3	上・横良好、238と同一個体の 可能性がある	高文地粗末	15	
242 B145. IV層	須賀器 白磁器			内側墨無、内側不規	底成 形	灰良好：灰白色	X/16.4	口縁部底面下に低い長い 突起、ヘリコリよ5.0cm付近	高文地粗末	15-16	
243 B145. IV層	須賀器 白磁器			内側ナギ	底成 形	小良好：灰良好	X/16.5	口縁部底面下に長い突起、 ヘリコリよ5.0cm付近	高文地粗末	15-16	
244 B145. IV層	須賀器 白磁器			外側墨無、内側ナギ	底成 形	によい變色色：灰灰 色	X/16.6	口縁部底面下に長い突起、 ヘリコリよ5.0cm付近	高文地粗末	15-16	
245 B145. IV層	須賀器 白磁器			外側墨無、内側墨無ナギ	底成 形	によい變色色：灰灰 色	X/16.7	口縁部底面下に長い突起、 ヘリコリよ5.0cm付近	高文地粗末	15-16	

表20 土器観察表⑥

遺物番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径×底径×高さ	成形・調整	土器 石器量多○、 普通△、少△	焼成 内面() 内外面()	色調 に近い黄褐色：灰 褐色	既存率 (X/12)	備考	分類名・ 時期	目録番号
245	C13区, IV層	縁文土器 縁付		内外面ナメ	普通	普通	に近い黄褐色：灰 褐色		口縁部以下に灰い安 息へりとしらす子口日	縄文前期末	15・16
247	B14区, IV層	縁文土器 縁付		内外面二枚底、内面ナメ	普通	普通	に近い黄褐色：に 近い黄褐色		高大美器：鳥、加保群A	縄文前期末	
248	B14区, IV層+C14 区, IV層	縁文土器 縁付		内外面二枚底(内面二枚底+外 輪方腰サケ)、内面ナメ	普通	普通	に近い黄褐色：に 近い黄褐色		高大美器：土器二枚貝による O型口日。加保群A	縄文前期末	15・16
249	C14区, IV層	縁文土器 縁付		内外面ナメ	普通	普通	灰褐色：灰い安 息		口縁部を丸く取める、輪 状突起A	縄文前期末	
250	C14区, IV層	縁文土器 縁付		内外面ナメ	普通	普通	青灰色：に近い灰 褐色	0.7	口縁部を丸く取める、輪 状突起A	縄文前期末	
251	C14区, IV層	縁文土器 縁付		内外面ナメ	普通	普通	青灰色：に近い灰 褐色		高大美器：鳥、加保群A	縄文前期末	
252	C14区, IV層	縁文土器 縁付		内外面ナメ	普通	普通	青灰色：に近い灰 褐色		高大美器：鳥、加保群A	縄文前期末	
253	C14区, IV層	縁文土器 縁付		外輪不明、内面ナメ	普通	普通	に近い黄褐色：に 近い黄褐色		底、灰い安息以上二枚貝に よる子口日。加保群A	縄文前期末	15
254	C14区, IV層	縁文土器 縁付		外輪不明、内面ナメ	普通	普通	青灰色：に近い灰 褐色		底、灰い安息以上二枚貝に よる子口日。加保群A	縄文前期末	
255	C14区, IV層	縁文土器 縁付		内外面ナメ	普通	普通	に近い黄褐色：に 近い黄褐色	0.9	口縁部以上土器貝を削除 して丸く取れる、高大美器B 、加保群A	縄文前期末	15
256	C14区, IV層+C15 区, IV層	縁文土器 縁付		内外面ナメ	普通	普通	に近い黄褐色：に 近い黄褐色		口縁部以上土器貝を削除 して丸く取れる、高大美器B 、加保群A	縄文前期末	
257	C14区, IV層	縁文土器 縁付		外輪ミカゲ、内面ミカゲ	普通	普通	青灰色：に近い灰 褐色	0.8	外輪ミカゲ+カタ、輪状突起-内面 に水波状、竹縄文	縄文前期末	15
258	C14区, IV層	縁文土器 縁付		内外面ナメ	普通	普通	明褐色：明褐色	1.1	底、灰い安息以上二枚貝に よる子口日。加保群A	縄文前期末	15
259	B14区, IV層	縁文土器 縁付		口縁部厚、外輪面状工具による 外輪削除	普通	普通	灰青色：淡黄色		口縁部厚以上土器貝を削除 して丸く取れる、高大美器B 、加保群A	縄文前期末	15
260	C14区, IV層	縁文土器 縁付		口縁部厚、外輪面状工具による 外輪削除	普通	普通	灰青色：淡黄色	1.5	口縁部厚以上土器貝を削除 して丸く取れる、高大美器B 、加保群A	縄文前期末	15
261	B14区, IV層	縁文土器 縁付	19.4	外輪前方内ケズリ、内面ナメ	普通	普通	青灰色：に近い灰 褐色	1.6	口縁部厚以上土器貝を削除 して丸く取れる、方舟に連 なる、加保群C	縄文前期末	15
262	C14区, IV層	縁文土器 縁付	24.5	内外面ナメ	普通	普通	灰褐色：灰褐色	1.6	口縁部厚以上土器貝を削除 して丸く取れる、外輪に 横筋、輪状突起A	縄文前期末	15
263	B14区, IV層	縁文土器 縁付	7.2	外輪不明、内面ナメ	普通	普通	灰褐色：淡黄色	1.7	口縁部厚以上土器貝を削除 して丸く取れる、高大美器B 、加保群A	縄文前期末	15
264	B14区, IV層+C14 区, IV層	縁文土器 縁付	5.5	内外面ナメ	普通	普通	灰褐色：明褐色	2.0	平底、243と同一個体の可能性 がある	縄文前期末	15
265	C14区, IV層	縁文土器 縁付	8	内外面ナメ	普通	普通	に近い黄褐色：に 近い黄褐色	2.5	平底、輪状突起A	高大美器B	15
266	C14区, IV層	縁文土器 縁付	5.4	内外面不明	普通	普通	灰褐色：灰褐色	3.0	平底、内面しつつ底く ぼ		15
267	B15区, II層	縁文土器 縁付	7	内面ナメナメテナ、内面ナメ ナメテナ	普通	普通	青灰色：灰褐色	3.4	底面内面に輪状突 起		
270	P278, 2層	土器壁 土器口端 内面		周縁外輪方向ハケメ・内面 内面ナメナメテナ	普通	普通	灰青色：灰褐色	4.7	底面に押引突起エハ ケメー型の幅2.5cm、8.5mm	A層	16
271	B15区, II層	土器壁 土器口端 内面	13.5	内面内面ナメナメテナ・底部外 輪ハケメ・内面輪状突起	普通	普通	灰褐色：淡黄色	5.5	ハケメー1単位の幅3.7cm-7 mm	C層	16
272	C13区, II層	土器壁 土器口端 内面	16.2	底部外輪ハケメ	普通	普通	に近い黄褐色：灰 褐色	6.2	口縁部外側に輪状突 起	C層	16
273	B15区, II層	土器壁 土器口端 内面	2.4	外輪不明・内面輪方向ハケメ	普通	普通	に近い黄褐色：に 近い黄褐色	7.2	底部外側に輪状突 起		
274	B15区, II層	土器壁 土器口端 内面	17.2	内外面ハケメ	普通	普通	に近い黄褐色：に 近い黄褐色	11.3	内面内面に押引突起を残す る、輪状突起		
275	B10区, II層	土器壁 土器口端 内面	6.9	輪状外輪ハケメ	普通	普通	に近い黄褐色：灰 褐色	9.9	ハケメー1単位の幅2.3cm-18 mm		
276	C14区, II層	土器壁 土器口端 内面	7.7	輪状外輪ハケメナメ・内面ナメ ナメテナ	普通	普通	に近い黄褐色：灰 褐色	10.5			
277	C14区, II層	土器壁 土器口端 内面		内面外輪ハケメ・輪状外輪面 内面ナメテナ	普通	普通	に近い黄褐色：に 近い黄褐色				
278	B15区, II層	土器壁 土器口端 内面	11	輪状外輪面ナメ・内面ナメ ナメテナ・輪状外輪面内面	普通	普通	に近い黄褐色：灰 褐色	11.8	外側に輪状突 起		
279	C13区, II層	土器壁 土器口端 内面	10	口縁部内面ナメ・内面輪方 向ハケメ	普通	普通	に近い黄褐色：に 近い黄褐色	12.2			
280	C13区, II層	土器壁 土器口端 内面	13.2	輪状外輪方向ハケメ・内面 不規	普通	普通	灰褐色：明褐色	12.9	輪状		
281	C13区, II層	土器壁 土器口端 内面		口縁部内面外輪方向ハケメ	普通	普通	灰褐色：明褐色	13.2	輪状		

表21 土器観察表⑦

遺物 番号	出土地点	石器	法量(cm)		成型・調整	鉢土 石粒量多○、 青銅△、火炎 △	施成 外削	色調 外削面() 内削面	既存率 (X/12)	備考	分類名・ 時期	図版 番号	
			口径	底径									
262	B15G、日暮	土器鉢 高脚			外削平削	良、径7mm以下 △、灰石	普通	にじむる青銅色、に じむる青銅色		剥削面			
263	A11G、I号	土器鉢 備	15.3		山根部外削ハケメ、内削平 ア	良、径2mm以下 △、灰石、灰石	普通	にじむる青銅色、暗 灰銅色	X	口縁1.1	有管式系	16	
264	B 1・B 2区、高脚	土器鉢 備	21.6		山根部内削斜ナギ、外削方削 ア	良、径3mm以下 △、灰石、赤褐色 火炎	普通	にじむる青銅色、に じむる青銅色	X	口縁1.6	ハケメ1單位の幅1.65cm 7高	内削・井戸型 16	
265	B10G、 土器鉢 高脚				外削斜面削斜ハケメノ火炎	良、径4mm以下 △、灰石、火炎	普通	暗褐色、灰白色	X	11802.6	口縁1.1 基出土部と同一全体	古代?	
266	B16区、日暮	土器鉢 高脚			火片部外削斜面ヘラケアリ	良、径5mm以下 △、灰石、火炎	普通	灰白色、黑白色	X	口縁0.6	金属製錠	8世纪	
267	A 6区、日暮	土器鉢 備			内削斜面ナギ	良、径2mm以下 △、灰石	良好	灰白色、灰白色			8世纪		
268	A11区、II号	漆器皿 備	17.2		内外削斜面ナギ	良、径1.5mm △、灰石	良好	灰白色、灰白色	X	底削1.4	8世纪		
269	A 4区、I号	漆器皿(火炎)	15.8	11.5	4.35	漆器内外削斜面ナギ、底削斜 面、火炎	良、X	良好	灰白色、灰白色	X	11802.4	8世纪	
270	A 4区、I号	漆器皿 備	19		内削斜面ナギ	良、径2mm以下 △、灰石	普通	灰白色、灰白色	X	底削2.2	8世纪		
271	A 4区、I号	漆器皿 備			内外削ナギ	良、径1mm以下 △、灰石	良好	オリーブ黒色、灰 色	X		11802.5	5世纪末	
272	B 9区、日暮	漆器皿 備			内削斜面ナギ	良、径1.5mm △、灰石	良好	灰白色、灰白色	X	口縁0.5		17	
273	A 4区、I号	漆器皿 備	22.5		内削斜面ナギ	良、径1mm以下 △、灰石	良好	灰白色、灰白色	X	11802.9			
274	A 7区、I号	漆器皿 備	24.7		内外削斜面ナギ	良、径3mm以下 △、灰石	良好	灰白色、灰白色	X	口縁1.5		17	
275	A 3区、I号	陶陶器皿 四	6.5		底削外削斜面ナギ、底削斜面 ア	良、径2mm以下 △、灰石	良好	灰白色、灰白色	X	底削2.5	OS陶式	17	
276	C16G、日暮	陶陶器皿 四	9.3		底削外削斜面ナギ、底削斜面 ア、底削孔外側斜面ヘラケアリ	良、径2mm以下 △、灰石	良好	灰白色、灰白色	X	底削1.6	百代寺式		
277	C16G、日暮	陶陶器皿 四	14.9		内削斜面ナギ	良、X	良好	灰白色、灰白色	X	11802.8	石室寺式		
278	C14G、日暮	陶陶器皿 四	6.3		底削外削斜面ナギ底削孔調整	良、径1mm以下 △、灰石	良好	灰白色、灰白色	X	底削0.9	百代寺式	17	
279	A 4区、 陶陶器皿 筋		12.1		漆器内外削斜面ヘラケアリ	良、径1.5mm △、灰石、赤褐色	良好	灰白色、灰白色	X	底削1.1	石室寺陶式	17	
280	A 3区、I号	白土器皿 備	15.3		内削斜面ナギ	良、X	良好	灰白色、灰白色	X	11802.1	白土器皿	1-2-3	
281	A16区、表土	小田成器 青銅鏡			内削斜面ナギ	良、X	良好	灰白色	X	11802.3	同前		
282	B16区、日暮	中国陶器 高脚盤	4.7		内削斜面ナギ、底削斜面 ア、底削孔外側斜面ヘラケアリ	良、X	良好	灰白色	X	底削2.6 ア	同前	23	
283	東洋、英國	中國陶器 白磁盤	15.6		内削斜面ナギ	良、X	良好	灰白色	X	11802.6	青白・萬葉四 期		
284	C14G、日暮	中國陶器 白磁盤	15.6		内削斜面ナギ	良、X	良好	灰白色	X	11802.4	青白・萬葉四 期	23	
285	A 9区、日暮	中國陶器 白磁盤	18		内削斜面ナギ	良、X	良好	灰白色	X	11802.1	青白・萬葉四 期	23	
286	B 7区、日暮	中國陶器 白磁盤			内削斜面ナギ	良、X	良好	灰白色	X	11802.6	青白・萬葉四 期	23	
287	C15G、日暮	中國陶器 白磁盤			内削斜面ナギ	良、X	良好	灰白色	X	11802.5	小少忍期	23	
288	A12G、I号	中國陶器 白磁盤	2.8		内削斜面ナギ	良、X	良好	灰白色	X	11802.5	中少忍期	23	
289	C10G、日暮	中國陶器 白磁盤			内削斜面ナギ	良、X	良好	灰白色	X	11802.3	内削ヒ素文	23	
290	B15G、日暮	中國陶器 白磁盤	4.8	5	18	内削斜面ナギ	良、X	良好	灰白色	X	口縁3.8 ア	12-13世紀	23
311	C14G、日暮	中國陶器 白磁盤	5		内削斜面ナギ、底削外削斜 面ヘラケアリ	良、X	良好	灰白色	X	底削3.5 ア	金剛作形へテと焉に より	23	
312	B10G、日暮	土器鉢 備	6		難成形、底削外削斜面切刃 ア	良、X	良好	褐色	X	底削	松坂A 2期		
313	B16G、日暮	土器鉢 備	7	3.1	1.7	底削外削斜面ナギ、底削ア ン、底削孔外側斜面ヘラケアリ	良、径7mm以下 △、灰石、赤褐色	褐色	にじむる褐色、に じむる褐色	X	底削2.5	松坂A 2期	22
314	C15F、日暮	土器鉢 備	4.1		難成形	良、X、灰石	普通	にじむる褐色、に じむる褐色	X	底削5	松坂A 2期	22	
315	B16G、日暮	土器鉢 備	13.6		口縁部内外削斜面ナギ、底削外 削斜面ア	良、径1mm以下 △、灰石、赤褐色	普通	にじむる褐色、に じむる褐色	X	底削外削斜面底削灰	舟川A 1期	18	
316	D11区、P400+13 E1区、漆器盤2	土器鉢 備			難成形ヒ素文	良、径1mm以下 △、手削丸孔	普通	にじむる褐色、に じむる褐色	X	11802.5 底削	内削企嶺に黑色物付	舟川B 1期	
317	不明	土器鉢 備	7.3	3	1.65	当社外削斜面底削灰土、内削 斜面ア	良、径2mm以下 △、手削丸孔	褐色	にじむる褐色、に じむる褐色	X	舟川C 1期	22	
318	B 9区、日暮	土器鉢 備	7.5		1.4	底削外削斜面灰土のみ、内削 斜面ア	良、径4mm以下 △、手削丸孔	普通	にじむる褐色、に じむる褐色	X	舟川C 1期	18	
319	P164、I号	土器鉢 備	8.2	3.6	3	1.45	内削斜面調整、内削ア	普通、良、火炎 △、手削丸孔	褐色	にじむる褐色、に じむる褐色	X	舟川C 2期	16
320	A 4区、I号	土器鉢 備			内削ア、内削ア	普通、良、火炎 △、手削丸孔	普通	褐色	X	底削0.7	舟川C 6	16	
321	B 5区、日暮	土器鉢 備			内削ア、内削ア	普通、良、火炎 △、手削丸孔	普通	褐色	X	舟川C 5	北輪輪A 3期	22	
322	A 4区、日暮	土器鉢 備			内削ア	普通、良、火炎 △、手削丸孔	普通	褐色	X	舟川C 5	北輪輪A 3- A 4+5期	22	
323	A 2区、I号	瓦上器皿 瓶	25.5		内削斜面ア	良、径2mm以下 △、灰石	普通	褐色	X	舟川D 9		22	
324	T17区、I号	漆器皿			ナゲ	良、1.5mm以下 △、手削丸孔	普通	褐色	X			22	
325	A 3区、I号+漆器皿		6.85		底削内外削斜面ナギ、底削外 削斜面切刃ア	良、X	良好	灰白色、灰白色	X	舟川E 2	漆器皿	16	
326	A 3区、I号	漆器皿	4.8		底削内外削斜面ナギ、底削外 削斜面切刃ア	良、X	良好	灰白色、灰白色	X	舟川E 2	見込みと漆器皿に類似	16	

表22 土器観察表⑧

遺物番号	出土地点	基盤	法量(cm)		成型・調整	胎土 右斜豎多○、普通△、少× 青緑△、少×	成形 内断面	色調	既存率 (X/12)	備考	分類名・期 代	図版 番号
			長径	横径								
327 A 4区、口層	古河戸 横須賀	14.2			内外面凹凸ナラ	直、×、斜石	良好(灰白色)	口縁0.5 内外面全体に灰地	X/12	古河戸横須賀 平	古河戸横須賀 平	21
328 A 11区、口層	古河戸 横須賀小屋	10.1	4.2	2.25	底面外周部斜面アラ、底部外 周部内側底面調整	直、×	良好(灰白色)	口縁0.2 底0.1	X/12	古河戸横須賀 平	古河戸横須賀 平	21
329 A 10区	古河戸 横須賀大屋				内外面凹凸ナラ	直、×、斜石	良好(灰白色)	口縁0.5 全面に灰地		古河戸横須賀 平	古河戸横須賀 平	21
330 A 11区、口層	古河戸 横須賀		17.5		内外面凹凸ナラ	直、×	良好(灰白色)	口縁0.9		古河戸横須賀	古河戸横須賀	21
331 A 1区、口層	古河戸 横須賀上				内外面凹凸ナラ	直、×、斜石 底1cm以下△	良好(灰白色)	口縁0.2 内外面全体に灰地	X/12	古河戸横須賀 平	古河戸横須賀 平	21
332 A 5区+B 7区、口 層	古河戸 横須賀				底面外周部アラ、底部外 周部内側底面調整	直、×、斜石 底1cm以下△	良好(灰白色)	底0.2 内外面全体に灰地、底 1cm以上△は灰地	X/12	古河戸横須賀 平	古河戸横須賀 平	21
333 A 4区、口層	古河戸 横須賀日暮				内外面凹凸ナラ	直、×	良好(灰白色)	口縁0.5 内外面全体に灰地	X/12	古河戸横須賀 平	古河戸横須賀 平	21
334 Z 7区、口層	古河戸 横須賀日暮		12.4		内外面凹凸ナラ	直、×	良好(灰白色)	口縁0.2 内外面全体に灰地	X/12	古河戸横須賀 平	古河戸横須賀 平	21
335 Z 7区、口層	古河戸 横須賀				内外面凹凸ナラ	直、×、斜石 底1cm以下△	良好(灰白色)	口縁0.7		古河戸横須賀	古河戸横須賀	21
336 A 7区、口層	古河戸 横須賀	5.2			内外面凹凸ナラ	直、×	良好(灰白色)	口縁0.4 内外面全体に灰地	X/12	古河戸横須賀	古河戸横須賀	21
337 B 11区、口層	古河戸 横須賀日暮		12.5		内外面凹凸ナラ	直、×、斜石 底1cm以下△	良好(灰白色)	口縁0.1 底0.5	X/12	古河戸横須賀 平	古河戸横須賀 平	21
338 A 3区、口層	古河戸 横須賀日暮		5		内外面凹凸ナラ	直、×、斜石 底1cm以下△	良好(灰白色)	底0.5 底内側に灰地	X/12	古河戸横須賀 平	古河戸横須賀 平	21
339 B 10区、II	雪舟 草庵				内外面凹凸ナラ	直、×、斜石	良好(灰白色)	口縁0.7		中野3~4世 式	中野3~4世 式	20
340 A 4区、口層	雪舟 草庵				内外面凹凸ナラ	直、×、斜石 底1cm以下△	良好(灰白色)	口縁0.8		中野3~4世 式	中野3~4世 式	20
341 C 15区、III等	雪舟 草庵		35.2		内外面凹凸ナラ	直、×	良好(灰白色)	口縁1		中野3~4世 式	中野3~4世 式	20
342 A 4区、I層+A 2 区層	雪舟 草庵		17.5		内外面凹凸ナラ	直、×、斜石 底1cm以下△	良好(灰白色)	口縁0.2 底0.5	X/12	古河戸横須賀 平	古河戸横須賀 平	21
343 Z 7区、I層	雪舟 草庵				内外面凹凸ナラ	直、×、斜石 底1cm以下△	良好(灰白色)	口縁0.6		中野4型式	中野4型式	20
344 A 4区	雪舟 草庵				外周部凹凸ナラ、内面凹凸ナ ラ	直、×、斜石 底1cm以下△	良好(灰白色)	口縁0.7		中野7型式	中野7型式	20
345 A 7区、I層	雪舟 草庵				外周部凹凸ナラ、内面凹凸ナ ラ	直、×、斜石 底1cm以下△	良好(灰白色)	口縁1.3		中野4型式	中野4型式	20
346 A 7区、II層	雪舟 草庵		14.2		外周部凹凸ナラ、内面凹凸ナ ラ	直、×、斜石 底1cm以下△	良好(灰白色)	口縁0.5 底0.5		中野3~5型 式	中野3~5型 式	20
347 A 6区、II層	雪舟 草庵				内外面凹凸ナラ	直、×、斜石 底1cm以下△	良好(灰白色)	口縁0.5		中野3~5型 式	中野3~5型 式	20
348 A 4区、I層	雪舟 草庵		33.7		内外面凹凸ナラ	直、×、斜石 底1cm以下△	良好(灰白色)	口縁1.3				20
349 A 4区、I層	大根丸				内外面凹凸ナラ	直、×、斜石	良好(灰白色)	口縁0.6				20
350 A 4区、I層	大根丸				内外面凹凸ナラ	直、×、斜石	良好(灰白色)	口縁0.5				20
351 A 4区、I層	大根丸		5.5		内外面凹凸ナラ	直、×、斜石 底1cm以下△	良好(灰白色)	口縁0.1		17世紀	17世紀	21
352 A 4区、I層	大根丸		24		外周部凹凸ナラ、内面凹凸ナ ラ、底0.5	直、×、斜石 底1cm以下△	良好(灰白色)	口縁0.6		内外面全体に灰地	内外面全体に灰地	21
353 A 4区	大根丸		11.1		内外面凹凸ナラ	直、×、斜石 底1cm以下△	良好(灰黄色)	口縁2				21
354 A 4区、I層	大根丸		2.4		内外面凹凸ナラ	直、×	良好(灰白色)	口縁0.5		古河戸横須賀 平	古河戸横須賀 平	21
355 A 1区、I層	大根丸		26		内外面凹凸ナラ	直、×	良好(灰白色)	口縁1.4		17世紀	17世紀	21
356 A 5区、II層	小坪	11			内外面凹凸ナラ	直、×、斜石 底1cm以下△	良好(灰白色)	口縁1.4		内外面全体に灰地	内外面全体に灰地	21
357 A 4区、I層	小坪		14.6		内外面凹凸ナラ	直、×	良好(灰白色)	口縁0.8		19世紀	19世紀	21
358 A 4区、I層	小坪		9.8		内外面凹凸ナラ	直、×、斜石 底1cm以下△	良好(灰白色)	口縁1.7				21
359 A 3区、I層	小坪		8		内外面凹凸ナラ	直、×、斜石 底1cm以下△	良好(灰白色)	口縁0.5		近代	近代	21
360 A 1区、I層	通算				内外面凹凸ナラ	直、×、斜石 底1cm以下△	良好(灰黄色)	口縁1		17世紀後半	17世紀後半	21
361 A 4区、I層	加工用陶				外周部凹凸ナラ	直、×	良好(灰白色)	口縁0.5		底	底	25
362 Z 7区	加工用陶				外周部凹凸ナラ、底部外 周部内側底面調整	直、×、斜石 底1cm以下△	良好(灰白色)	口縁0.5		17世紀後半	17世紀後半	25
363 A 6区、II層	加工用陶				内外面凹凸ナラ	直、×、斜石 底1cm以下△	良好(灰白色)	口縁0.5		底	底	25
364 A 20区、西北	加工用陶		4.3		外周部凹凸ナラ、内面凹 凸ナラ、斜石△	直、×、斜石 底1cm以下△	良好(灰白色)	口縁0.5		大根丸、高台苔面辺付 陶	大根丸、高台苔面辺付 陶	25
365 A 4区、II層	加工用陶		5		内外面凹凸ナラ、底部外周部 凹凸ナラ△	直、×	良好(灰白色)	口縁2		中国磁器青磁釉	中国磁器青磁釉	25

表23 土製品観察表

遺物番号	出土地点	種別	法量(cm)		重量(g)	胎土 右斜豎多○、普通△、少× 青緑△、少×	上 右斜豎多○、普通△、少× 青緑△、少×	色調	既存率 (X/12)	備考	時期	図版 番号
			長さ	幅								
367 Z 7区、I層	塔		1.4×1.6	2.8	5.9	普通 (灰白色)	普通 (灰白色)	普通	X/12		近世	24
368 A 4区、II層	塔		3.6×3.4	1.2	13.1	普通 (灰白色)	普通 (灰白色)	普通	X/12		近世	24

表24 土墻観察表

遺物 番号	出土地点	種別	法量(cm)		重量(g)	長軸 孔隙	短軸 孔隙	輪郭率	輪郭率	上	胎土	色調	備考	図版 番号
			長さ	小径										
366 C 14区、III層	土塁		3.0	0.6	1.5	0.4	6.7	(40.5)	40	直、底1cm以下△	普通	にじむ様色	柱頭部を呈する	25

表25 石器観察表

番号	出土地点	種類	石材	形状(cm)			重量(g)	折損部	成形・調整		参考番号
				長さ	幅	厚さ					
89	SD22. 1層	磨石	花崗岩等	11.67	6.34	4.99	764.5	下方刃	両面の刃端を利用して削除した後に磨削をもつ。		26
90	SD23. 3層	磨削石体	粗花崗岩	8.81	6.05	2.61	261.6	側面上半	両式刃磨削のみ。斜面上半削除後、折損部を成形して再利用している。		26
183	SX11~13	石器	チャート	1.92	1.47	0.53	1	なし	手や手の工具式無意識、角度のある磨削を全面に施した後に先端部を作り出す。		26
367	B14E. IV層	有孔穿孔器	下呂石	4.2	2.2	0.49	5.4	先端部・基部	圓錐の頂部を削除して穴を打つ。斜辺部・基部を成形して刃端部を削る。表面に大きな削除痕をもつ。底部に角度のある磨削がみられる。		26
268	C14E. IV層	RF	チャート	2.71	4.07	1.06	10.4	なし	手や手の工具で表面を削除し、下方端を削り落とした後に正面を削除・裏面上方に側面を削除する。下方端に削除痕をもつ。		26

表26 銀貨観察表

番号	出土地点	種類	形状(cm)			重量(g)	材質	同名・初鉄年	備考	参考番号
			横径(A/B)	内径(C/D)	截厚					
12	SK27. 1層	聖宋元寶	不明	不明	1.2	0.8	銅	北宋、1101年	行書、頸部	26
13	SK27	口唇邊口	不明	不明	1.2	0.8	銅	不明	行書、頸部、元豐通寶か 紹聖通寶(漢・初鉄1341年)	26
21	P239. 1層	元豐通寶	2.5	0.65×0.65	1.2	1.4	銅	北宋、1078年	行書	26
87	A3区、埴土状遺構. 1層	新寛永	2.3	0.65×0.65	0.05	1.5	銅	日本・1673年		26
88	A3区、埴土状遺構. 2層	古寛永	2.35	0.5×1.6	0.06	1.8	銅	日本・1636年		26
126	SD23. 2層	古寛永	2.5	0.55×0.6	1.3	3.8	銅	日本・1636年		26
A10. II層	不明	不明	不明	不明	1.1	0.4	小判	不明	遺存状況極めて悪い。	
A4区、埴土状遺構. 1層	不明	不明	不明	不明	1.8	3.5	銅	不明	銘文の有無不明	26

表27 金属製品観察表

番号	出土地点	種類	形状(cm)			重量(g)	材質	備考	参考番号	
			長さ	幅	厚さ					
14	獨立立柱物(SK00. 1層)	軒	(5.2)	—	0.9	0.7	17.1	新開方軒、鋸びらみられた	27	
121	SD14. 1層	軒?	(11.8)	0.2~0.5	0.2~0.5	21.4	直線的断面形状		27	
122	SD14. 1層	軒?	(3.8)	0.35~0.3	0.3~0.3	7.4	直線的断面形状		27	
123	SD23. 2層	不明	(2.6)	—	0.65	19.7	断面直角		27	
124	SD23. 2層	刀子	(2.75)	瓦筋1.4、柄部0.75	0.55	4	直線的断面形状		27	
125	SD16. 1層	軒?	(2.6)	0.3~0.3	0.3	1.1	直線的断面形状		27	
126	SD17	不明	(3.98)	—	0.2	21.5	側面直角上方に切り出される		27	
153	直線的断面(SD27. 1層)	手斧?	(8.4)	0.4~0.5	0.4	13.2	直線的断面形状		27	
154	直線的断面(SD27. 1層)	手斧?	(6.1)	1.1~1.25	0.35	29.7	直線的断面形状		27	
155	直線的断面(SN6. 1層)	軒	(4.8)	0.3~0.5	0.45~0.55	2.6	直線的断面の断面直角形、底面は複円形で幅0.5×75cm、厚さ0.5cm、切欠き		27	
178	直線的断面(SD16. 2層)	軒	(8.8)	0.38~0.45	0.2~0.4	—	かぶらみられた		27	
179	直線的断面(SD16. 2層)	不明	(1.68)	—	0.2	—	直線的断面直角形、切欠きくぼらみられた		27	
180	直線的断面(SD16. 2層)	軒?	(2.13)	—	0.3	3.3	直線的断面直角形		27	
181	直線的断面(SD16. 2層)	刀子?	(7.6)	瓦筋1.4、柄部0.6	0.3	10.8	直線的断面直角形		27	
182	直線的断面(SD20. 1層)	軒	(3.3)	—	0.25	9.2	直線的断面直角形、端面とくぼられる		27	
183	直線的断面(SD20. 2層)	軒?	(3.98)	0.3~0.25	0.45	3.4	直線的断面直角形		27	
205	SK22. 1層	軒	(2.15)	0.2~0.45	0.25~0.4	1.3	直線的断面直角形、側面は斜形で幅0.5×50cm、厚さ0.3cmに薄く延ばし折り		27	
206	SK22. 1層	軒	(3.4)	0.2~0.45	0.2~0.35	1.3	直線的断面直角形、側面は斜形		27	
208	SK22. 1層	不明	(3.1)	—	0.2	—	直線的断面直角形、側面とくぼらる		27	
231	SK14. 1層	不知	(2.2)	—	0.4	5.3	直線的断面直角形、平面形状複数形で複数回切削する		27	
232	SK28. 1層	軒?	(4.3)	0.5	0.35	6.6	直線的断面直角形、土をはじひらむる、鍛のため断面の形状不明		27	
233	SK14. 1層	不知	(2.05)	—	0.65	10.4	直線的断面直角形、鍛のため断面不規則		27	
234	SK54. 1層	軒	(4.7)	0.4~0.45	0.4~0.5	11.6	直線的断面直角形		27	
235	SK14. 1層	軒	(8.1)	1.05~1.15	1.0~1.2	120.8	直線的断面直角形、側面は複円形で幅1.8×2.1cm、厚さ0.6cm、左側部が摩耗		27	
236	SK12	不知	(18.1)	—	0.6	0.4	23.6	直線的断面直角形		27
269	A10E. B層	軒?	(2.4)	—	0.55	—	5.5	直線的断面直角形、腰の内の断面の断面不規則、左側部が円錐形とくぼられる		27
379	A20E. II層	不知	(3.15)	—	0.15	—	3	直線的断面直角形		27
371	B17C. 三層	軒?	(2.6)	0.3~0.3	0.4	1.4	直線的断面直角形、腰の内の断面の断面不規則		27	
372	P239. 1層	軒?	(2.6)	0.25~0.3	0.2	0.7	直線的断面直角形		27	
373	A7E. I層	軒?	(6.65)	—	0.6	0.6	11.4	直線的断面直角形		27
374	A10E. B層	軒?	(2.6)	—	0.35	—	2.9	直線的断面直角形、腰の内の断面不規則、左側部がくぼらる		27
375	C50E. B層	不知	(4.4)	刀身1.5	0.1~0.25	3.6	直線的断面直角形		27	
376	C50E. B層	不知	(4.4)	刀身1.5、柄部0.5	—	—	—	—	—	27

注釈のうち「」書きのものは現存せず、重量は保有荷物の数値である

第5章 自然科学的手法による報告・検討

第1節 鉢に付着した赤色物

宮野義則（パレオ・ラボ）

1. はじめに

南整理遺跡は、不破郡関ヶ原町に所在する遺跡である。調査では、縄文時代晚期の鉢が検出され、その表面あるいは断面において赤色物が観察された。

ここでは、この赤色物について蛍光X線分析を行い、赤色物の成分について検討した。

2. 試料および方法

試料は、鉢の表面、断面および内側の3箇所から採取した赤色物である。測定試料は、赤色部にセロハン粘着テープを押し付けて採取した。ただし、測定試料は、純粋に赤色物のみではなく、土器表面に付着する土なども含まれている。分析は、セイコー電子工業製のエネルギー分散型蛍光X線分析計 SEA-2001L である。装置の仕様は、X線発生部の管球はロジウム (Rh) ターゲット、ベリリウム (Be) 窓、X線検出器は Si (Li) 半導体検出器である。測定条件は、測定時間300秒、照射径10mm、電流50~63μA、電圧50kV、試料室内は真空である。

3. 結果

図57には、各場所から採取した赤色物の蛍光X線スペクトル図（①：外側、②：断面、③：内側）を示す。また、表28には、試料の詳細、蛍光X線分析による赤色顔料に関する元素やその他検出された元素（ピークの高い順に列記）などを示す。

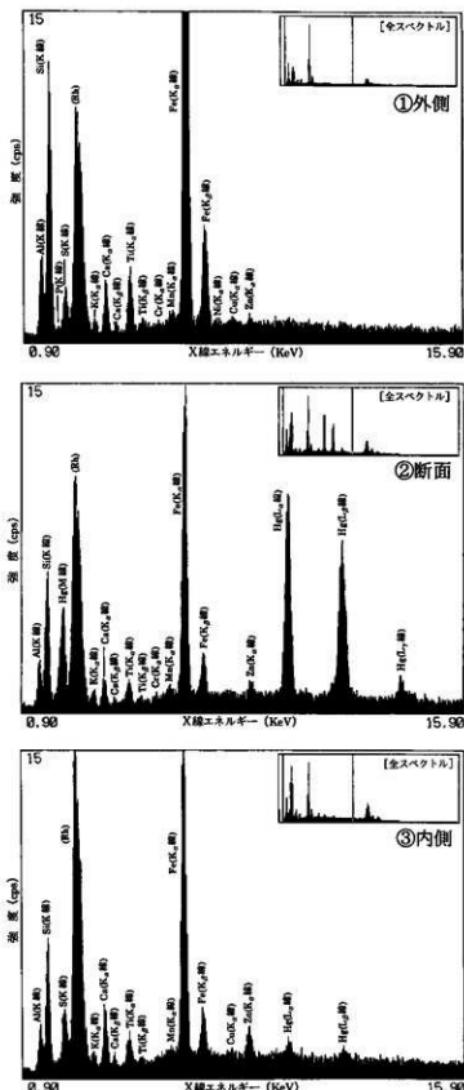
赤色物に関する元素としては、外側付着赤色物では鉄 (Fe) のみであるが、断面と内側付着赤色物では、水銀 (Hg) と鉄である。その他の元素としては、アルミニウム (Al)、ケイ素 (Si)、リン (P)、イオウ (S)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、クロム (Cr)、マンガン (Mn)、銅 (Cu)、亜鉛 (Zn) である。

なお、ロジウム (Rh) のピークはX線発生部の管球（ロジウムターゲット）に由来するものであり、赤色物に含まれる元素とは関係がない。

表28 鉢各部位の付着赤色物から検出された元素と顔料の種類

[元素記号] Al: アルミニウム、Si: ケイ素、P: リン、S: イオウ、K: カリウム、Ca: カルシウム、Ti: チタン、Cr: クロム、Mn: マンガン、Fe: 鉄、Cu: 銅、Zn: 亜鉛、Hg: 水銀

器種	遺物番号	時代	検出部位	赤色顔料に関する元素		顔料の同定	その他検出された元素（ピーク高順）	図57
				Hg	Fe			
鉢	C14区、IV層、178	縄文晚期	外側		◎	ベンガラ	Si, Al, Ti, Ca, S, Mn, K, Zn, Cu, Cr, P	①
			断面	◎	○	水銀朱	Si, S, Al, Ca, Ti, Mn, Zn, K, Cr	②
			内側	△	○	水銀朱	Si, Ca, S, Al, Zn, Ti, Mn, Cu, K	③



[元素記号] Al: アルミニウム、Si: ケイ素、P: リン、S: イオウ、K: カリウム、Ca: カルシウム、Ti: チタン、Cr: クロム、Mn: マンガン、Fe: 鉄、Cu: 銅、Zn: 亜鉛、Hg: 水銀

図57 鮎の各部位に付着する赤色物の蛍光X線スペクトル図

4. 考察

各場所の赤色物は、鉢の断面と内側から水銀が検出されたことから、水銀朱である。一方、外側からは水銀は検出されないものの、鉄が高率で検出されたことから、この赤色物はベンガラと考えられる。

一般的に、赤色顔料には、ベンガラ (Fe_2O_3)、水銀朱 (HgS)、鉛丹 (PbO_4) が知られている（市毛1984）。水銀朱は主成分元素が硫化第二水銀からなる辰砂 (cinnabar, 水銀朱) を摩り潰して作られるものを言う。ベンガラは、鉄分に富んだ土壤や褐鉄鉱、硫化鉄などを焼いて作られる（北野、1994）。最近の研究では、縄文時代や弥生時代の赤色漆に用いられた赤色顔料中に珪藻化石が見られることから、水成環境下で生成した酸化鉄であることも分かってきた（岡田1997）。

水銀朱からなる断面と内側の赤色物中には、イオウが同時に検出され、硫化水銀起源であることを示唆している。なお、ベンガラからなる外側赤色物中にもイオウが検出されていることから、硫化鉄起源のベンガラであることが推定される。

揖斐郡旧徳山村に所在する塚遺跡では、縄文中期末鉛付壺型土器や縄文後期前葉浅鉢の外側において水銀朱からなる赤色物が検出され、当時赤色顔料として水銀朱が利用されていたことが分かった（菱田1998）。なお、縄文中期末鉛付壺型土器の水銀朱からなる赤色顔料の使用例は、現時点において最古級の使用として注目される。

この鉢に付着する水銀朱からなる赤色顔料は、外側では検出されないが、断面と内側において検出されることから、鉢自体を赤彩するための赤色顔料ではないことが推定される。鉢自体の赤彩は、ベンガラによるものと考えられる。

引用文献

- 市毛 熊（1984）『増補 朱の考古学』、第2版、考古学選書12、雄山閣出版、p324
- 岡田文男（1997）「パイプ状ベンガラ粒子の復元」、日本文化財科学会、
第14回大会研究発表要旨集、pp38~39
- 北野信彦（1994）「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点II—文献史料から見た赤色系漆に使用する
ベンガラの製法についてー」『古文化財の科学』、39、pp93~102
- 菱田 量（1998）「塚遺跡出土土器付着の赤色顔料について」『塚遺跡』、
岐阜県文化財保護センター調査報告書、第27集、pp147~152

第2節 鉄滓の分析

藤根 久・平野礼子(パレオ・ラボ)

1. はじめに

南整理遺跡では、遺構に伴わないものの鉄滓が多数出土している。調査では、古墳時代～中世の遺物が出土していることから、これら鉄滓は相当する時代にこの地域一帯において製鉄が行われた際に排出された鉄滓と考えられている。

ここでは、これら鉄滓の構造や化学組成あるいは鉱物組成を検討した。

2. 試料と方法

試料は、調査において出土した鉄滓片4試料である(表29)。

表29 検討した鉄滓試料の特徴

試料	遺物No	種類	色調	磁性	断面写真	電子顕微鏡観察	蛍光X線分析	X線回折
1	A10区、III層	鉄滓	灰～黄橙色	強い	○	○	○	
2	A7区、I層	鉄滓	橙色	弱い	○			○
3	A3区、II層	鉄滓	明黄褐色～橙色	弱い	○			
4	積石遺構1、I層	鉄滓	橙色	弱い	○			

各試料は、断面の観察を行うために、岩石カッターを用いて切断し、3000番の研磨剤を用いて断面の研磨を行った。

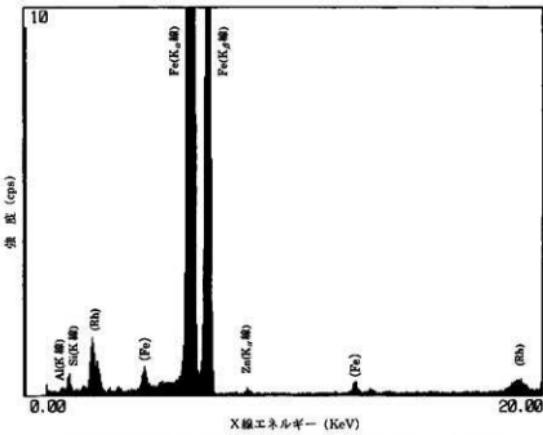
鉄滓No1は、断面観察により金属部が見られたため、この金属部について蛍光X線分析を行った。蛍光X線分析は、セイコー電子工業製のエネルギー分散型の蛍光X線分析装置SEA-2001Lを用いた。測定条件は、Rh-X線管、50KV、300秒、2μA、真空霧囲気で測定した。さらに、この金属部については、一部をエポキシ樹脂で包埋し、3%硝酸を含むエチルアルコール溶液でエッチングし、電子顕微鏡を用いて金属組織を観察した。

鉄滓No2については、鉱物組成を調べるためにX線回折分析を行った。試料は、一部を取り出しセラミック乳鉢で粉末にした後、底付形試料板に移し、ガラス板で軽く押しつけ平坦面を作り測定試料とした。測定は、ブリガク製デスクトップX線回折装置Mini-Flexで行った。測定条件は、電圧30kV、電流15mA、Cu-X線管を用い、走査範囲5°～100°について計数時間1.0sec、ステップ幅0.02°の連続測定を行った。

3. 結果

[鉄滓No1]

この鉄滓は、比重が高く、磁性の強い鉄滓である。断面においては、12×4mmの金属部が検出され(図版28)、奥行きは少なくとも2cm以上あった。この金属部の蛍光X線分析では、鉄(Fe)からなる複数のピークが検出され、他にケイ素(Si)やアルミニウム(Al)あるいは亜鉛(Zn)のピークも低率ながら検出された(図58)。なお、Rh(ロジウム)は、X線管球に由来する元素であり試料とは関係がない。



エッティングを行った後の電子顕微鏡観察では、鉄滓品の金属部に一般的に見られる針状に発達した初晶セメンタイトからなるレーーデブライト組織が確認された(図版29-1)。

[鉄滓No.2]

この鉄滓は、比較的比重が低く、磁性が弱い鉄滓である。断面において金属部は認められない。X線回折分析では、人工物の証拠であるWustite(FeO)が検出された(図59)。

[鉄滓No.3及び鉄滓No.4]

この鉄滓は、比較的比重が低く、磁性が弱い鉄滓である。断面において金属部は認められない。

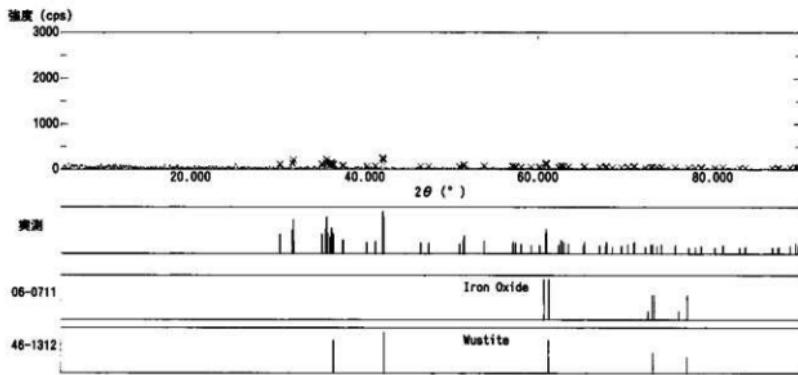


図59 鉄滓No.2のX線回折スペクトル図

4. 考察

出土した鉄滓4試料について、磁性の有無、断面観察、蛍光X線分析、X線回折分析を行った。その結果、鉄滓No.1の内部には断面において金属部分が見られた。この金属部の化学組成は、概ね鉄から構成され、エッティング後の電子顕微鏡観察により鍛鉄製品に一般的に見られる針状に発達した初晶セメンタイトからなるレーデライト組織が確認された(図版29-1)。この組織が観察されたことから、この遺物は鍛込み後急冷された可能性が高い(松井他1999)。

また、金属部を持たない磁性の低いNo.2の鉄滓では、X線回折分析により人工物の証拠とされるWustite(FeO)が検出された。

こうしたことから、これら鉄滓は鍛鉄過程において排出された鉄滓であることが分かった。なお、これら鉄滓の時代は、加速器による放射性炭素年代測定を行ったが、 $3,060 \pm 60$ yrBPと予想以上に古い年代であった(本章第3節)。この年代は、燃料として古い時代の木炭(亜炭)を使用したことなどにより古い年代が測定されたと考えられる。これら鉄滓は、遺構を伴わないため特定はできないが、出土遺物が古墳時代～中世であることから相当する時代に周辺地域において製鉄が行われていた可能性を示すものと考えられる。

引用文献

- 松井敏也・村上 隆・高田 潤(1999)日本から出土した鍛鉄製遺物の金属組織と腐食の研究. 粉体および粉末冶金、46-5、478-483

第3節 放射性炭素年代測定

山形 秀樹 (パレオ・ラボ)

1. 放射性炭素年代測定について

南整理遺跡から出土した鉄滓中の炭化物試料1点の放射性炭素年代測定を㈱地球科学研究所に依頼した。

試料は、酸素気流中で燃焼させて二酸化炭素としたものをアンモニア水に通し、塩化カルシウムの水溶液を加えて炭酸カルシウムを生成する。炭酸カルシウムを石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定し、年代値を算出した。その結果は下記に示す。

なお、年代値の算出には¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用し、同位体補正をして年代値を算出した。また、付記した年代誤差は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。試料の¹⁴C 計数率と現在の標準炭素 (Modern standard carbon) の¹⁴C 計数率の比¹⁴C_(Sample)/¹⁴C_(Modern) ≥ 1 の時は、Modernと表示し、¹⁴C_(Sample)/¹⁴C_(Modern)の%値を付記する。

暦年代の補正は、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された¹⁴C年代値(yrBP)に対し、過去の宇宙線強度の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動および半減期の違い(¹⁴Cの半減期5,730±30年)を補正して、より正確な年代を求めるものであり、具体的には年代既知の樹木年輪の¹⁴C年代の詳細な測定値を用いて補正曲線を作成し、これを用いて暦年代を算出する。補正暦年代の算出にRadiocarbon Calibration Program 1999* REV4.1 {Reference for datasets used: Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (INTCAL98 Stuiver et al., 1998a). Radiocarbon 40: 1041-1083}を使用した。なお、交点年代値は¹⁴C年代値に相当する補正曲線上の年代値であり、1 σ 年代幅は¹⁴C年代誤差に相当する補正曲線上の年代範囲を示す。年代を検討する場合は、68%の確率で1 σ 年代幅に示すいずれかの年代になる。暦年代の補正是約2万年前からAD 1,950年までが有効であり、該当しないものについては補正暦年代を***またはModernと表示する。また、AD 1,955*はModernを意味する。

2. 放射性炭素年代測定結果

測定No.	試料	¹⁴ C年代値	補正暦年代値
Beta-123935	鉄滓中の炭化物 97NG.SD17.1層	3,060±60 yrBP (BC 1,110年)	交点年代値 BC 1,370/1,355/1,350年
			BC 1,340/1,315年
			1 σ 年代幅 BC 1,405 to 1,260
			BC 1,230 to 1,220

引用文献

Radiocarbon Calibration Program 1999* REV 4.1, Copyright 1999 Quaternary Isotope Lab University of Washington. *To be used in conjunction with: Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993), Radiocarbon, 35, pp 215-230.

第4節 花粉化石群集

新山雅広（パレオ・ラボ）

1. はじめに

南整理遺跡は、不破郡関ヶ原町に所在する。ここでは、中世前期（12世紀後半～13世紀初頭）の本遺跡周辺の古植生および栽培状況を推定する目的で花粉化石群集の検討を行った。

2. 試料と方法

花粉化石群集の検討は、溝の堆積物より採取された3試料（SD3、SD4、SD10）について行った。試料は、いずれも黒褐色粘土質シルトであり、所属時期はSD3が中世、SD10が中世前期（12世紀末～13世紀初頭）と考えられている。

花粉化石の抽出は、試料約3gを10%水酸化カリウム処理（湯煎約15分）による粒子分離、傾斜法による粗粒砂除去、フッ化水素酸処理（約30分）による珪酸塩鉱物などの溶解、アセトリシス処理（氷酢酸による脱水、濃硫酸1に対して無水酢酸9の混液で湯煎約5分）の順に物理・化学的処理を施すことにより行った。なお、フッ化水素酸処理後、全ての試料において重液分離（臭化亜鉛を比重2.15に調整）による有機物の濃集を行った。プレパラート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、十分に攪拌はんした後マイクロビペットで取り、グリセリンで封入した。検鏡は、プレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類について、同定・計数した。その計数結果をもとに、樹木花粉総数が100個以上の試料については、樹木花粉は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉及びシダ植物胞子は花粉・胞子総数を基数として、各分類群の出現率を百分率で算出した。なお、複数の分類群をハイフンで結んだものは分類群間の区別が困難なものである。

3. 花粉化石群集の記載

検討した3試料は、いずれも花粉化石の保存状態が悪く、プレパラート状況は炭化物片が目立った。以下に各試料から産出した花粉化石群集について記載する（表30）。なお、SD3とSD4は、樹木花粉総数が100個未満であったため、花粉化石分布図として示せなかった。

SD3：同定された分類群数は、樹木花粉9、草本花粉12、形態分類で示したシダ植物胞子2である。樹木花粉の産出個数は少なく、ハンノキ属、コナラ亜属、クリ属などが産出した。草本花粉は、イネ科、アブラナ科、タンポポ亜科が比較的多産し、ソバ属、アカザ科—ヒユ科なども産出した。また、単条型胞子も比較的多産した。

SD4：同定された分類群数は、樹木花粉8、草本花粉12、形態分類で示したシダ植物胞子2である。樹木花粉の産出個数は少なく、コナラ亜属、キハダ属、イボタノキ属などが産出した。草本花粉は、イネ科、アブラナ科、タンポポ亜科などが比較的多産し、ソバ属、アカザ科—ヒユ科、ヨモギ属なども産出した。また、三条型胞子も比較的多産した。

SD10：同定された分類群数は、樹木花粉14、草本花粉13、形態分類で示したシダ植物胞子2である。樹木花粉の占める割合（図60）は、約28%と低率である。その中で、クリ属が約66%と圧倒的な高率を占めた。次いで、コナラ亜属、シイノキ属が約9%で出現し、マツ属（不明）、ハンノキ属、アカガ

シ亞属、キハダ属が2~3%で出現した。草本花粉では、タンボボ亞科が約17%で最も高率を占め、イネ科(約13%)、アブラナ科(約11%)も比較的高率に出現した。他に、アカザ科—ヒユ科、他のキク亞科が約3%で比較的目立ち、ツユクサ属、ソバ属、キンポウゲ科、アリノトウグサ属、セリ科、ヨモギ属なども低率で出現する。また、シダ植物胞子は、約20%とやや目立った出現をした。

表30 花粉化石一覧表

和名	学名	SD3	SD4	SD10
樹木				
モミ属	<i>Abies</i>	-	-	1
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	3	1	3
スギ属	<i>Cryptomeria</i>	-	1	1
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	T. - C.	-	-	1
クマシデ属—アサガ属	<i>Carpinus</i> - <i>Ostrya</i>	2	-	1
カバノキ属	<i>Betula</i>	1	-	1
ハンノキ属	<i>Ailnus</i>	4	1	3
ブナ属	<i>Fagus</i>	-	1	1
コナラ属コナラ亞属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	6	2	12
コナラ属アカガシ亞属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	-	-	3
クリ属	<i>Castanea</i>	4	1	84
シイノキ属	<i>Castanopsis</i>	2	-	12
キハダ属	<i>Phellodendron</i>	4	5	4
ウコギ科	<i>Araliaceae</i>	2	-	1
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	-	1	-
草本				
イネ科	<i>Gramineae</i>	89	85	58
カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	2	1	-
ツユクサ属	<i>Commelina</i>	-	-	1
ネギ属近似種	cf. <i>Allium</i>	-	-	1
サナエタデ属—ウナギツカミ節	<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria-Echinocaulon</i>	2	-	-
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	6	2	1
アカザ科—ヒユ科	<i>Chenopodiaceae</i> - <i>Amaranthaceae</i>	7	10	14
ナデシコ科	<i>Caryophyllaceae</i>	5	7	1
キンポウゲ科	<i>Ranunculaceae</i>	5	1	7
アブラナ科	<i>Cruciferae</i>	39	45	48
アリノトウグサ属	<i>Haloragis</i>	-	-	1
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	3	2	4
ヤエムグラ属—アカネ属	<i>Galium</i> - <i>Rubia</i>	-	1	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	3	19	6
他のキク亞科	other <i>Tubuliflorae</i>	6	6	13
タンボボ亞科	<i>Liguliflorae</i>	35	26	79
シダ植物				
単条型胞子	<i>Monolete spore</i>	30	9	63
三条型胞子	<i>Trilete spore</i>	8	33	28
樹木花粉	Arbooreal pollen	28	13	128
草本花粉	Nonarbooreal pollen	202	205	234
シダ植物胞子	Spores	38	42	91
花粉・胞子总数	Total Pollen & Spores	268	260	453
不明花粉	Unknown pollen	27	27	66



(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は総花粉・胞子数を基数として百分率で算出した)

図60 花粉化石分布図

4. 考察

中世前期(12世紀後半～13世紀初頭)の遺跡周辺には、針葉樹のマツ属、落葉広葉樹のハンノキ属、コナラ属、クリ属、常緑広葉樹のアカガシ属、シノキ属などから成る森林が成立していた。クリ属は高率で出現したが、広域に散布しにくい虫媒花であることから、遺跡周辺で広い林分を形成していたというよりも、むしろ遺跡付近で多く生育していたのかもしれない。溝付近には、幾分湿った所にイネ科、ツユクサ属、セリ科などが生育しており、幾分乾き気味の所にアカザ科ヒュウ科、ヨモギ属、タンポポ属などが生育していた。栽培状況については、人と関わりの深いソバ属や突出した出現傾向を示したアブラナ科などの栽培の可能性が考えられる。

第6章 まとめ

1. 出土土器の時期区分

出土土器の内容と土器組成（出土量の多い中世に限る）を時期別に述べる。時期区分は、細片でも分類可能にするため都合5区分¹⁾とし（縄文時代・古墳時代・古代・中世前期・中世後期・近世）、中世の区分は山茶碗の藤澤編年でいう8型式以降を後期、7型式以前を前期とした。

縄文時代の土器は前節でも述べた。突帯文II期2段階から条痕文I期を主体とし、一部II期1段階に遡る様相をもつ（突帯文土器研究会編1993）。なお草創期の有舌尖頭器が1点出土し注目される。

古墳時代・古代の土器のうち、土師器は細片が多く時期比定ができるものが大半であった。判別できた土器の内訳は内堀・横幕編年でII期～VI期、及び古代と幅広い時期を占む。畿内系や北陸系の土器も散見されることは地理的位置がもつ特徴であろう。須恵器はごく少量の5世紀末と7世紀末の土器を除くと大半が8世紀後半に属する。灰陶陶器はO53窓式が少量で、百代寺窓式が多く認められた。

中世前期の土器組成の内訳は山茶碗、小碗、小皿、鉢、常滑壺・甕、中国磁器、土師器鍋・羽釜・皿である。

山茶碗のうち荒肌手をA、均質手をBとすると、山茶碗Aは4または5型式から成り山茶碗Bは認められなかった。小碗と小皿については高台の有無によって型式区分されているので、接合前底部破片数と残存率を求めた（図61、表31）。残存率の組成比率では小碗が44.5%、小皿55.5%を占め、5型式が優勢であるという結果を得た。鉢のうち常滑片口鉢I類では中野編年で2～4型式の中に収まる。常滑甕は1b型式～3型式と6a型式が目立つ。中国磁器の内訳は表32に示した通りである。口縁部残存率の組成比率で白磁が全体の81.6%、青磁が17.0%を占めるが、青白磁も1.4%と微量ながら出土している（図62）。分類内容をみると白磁碗では横田・森田分類でIV類、青磁碗では龍泉窯系I～5bが多い。土師器鍋と羽釜²⁾は比較的少なく、伊勢型鍋は北村分類のA2～A4a類の中に収まり、清輝型鍋は永井分類で鍋C6としたもの、羽釜は北村分類の羽釜A1またはA2類に当たる。土師器皿のうち輪轉成形のものは、佐藤分類でA2類、内堀分類で有台皿B・無台皿Aが少量認められた。手づくね成形のものは小野木分類でA2b類とB2a類が存在し、体部外面を2段ナデ調整するものは確認できなかった。

土器組成の比率（図65、表35）は山茶碗（62.4%）、小碗・小皿（15.6%）、鉢（1.8%）、常滑壺・甕（3.1%）、中国磁器（5.6%）、土師器鍋・羽釜（0.8%）、土師器皿（10.7%）である。中国磁器が比較的多いのが特徴である³⁾。

中世後期の土器組成の内訳は山茶碗、小皿、古瀬戸、常滑鉢・壺・甕、中国磁器、土師器羽釜・皿、瓦器・瓦質土器、大甕である。

山茶碗と小皿は均質手のみであり、明らかに中世前期に位置するものがないため均質手のものは全て該期のものとみなした。小片のため時期的推移は不明である。古瀬戸は藤澤編年で古瀬戸中期後半～後期後半のものが出土し、うち後期後半が主体である（図64、表34）。器種別にみると口縁部残存率の組成比率で供膳具49.3%、盤類11.0%、調理具A12.6%、調理具B10.4%、貯藏具9.3%、茶道具6.

表31 小碗と小皿の組成表

分類	口縁部残存率(x/12)	破片数
小碗	165.6	39
小皿	206.7	49
合計	372.3	88

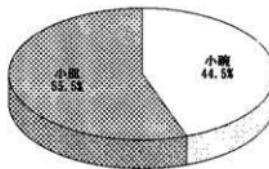


表32 中世前期中国磁器の器種別組成表

器種・分類名		口縁部残存率 (x/12)	破片数
白磁	碗II・III類	1.4	9
	碗IV類	9.1	20
	碗V・VI類	2.2	9
	碗(分類不明)	0	43
	皿	4.6	16
	蓋	0	2
青磁	碗(龍泉窯系) I-2・3	0.9	2
	I-5a	0	1
	I-5b	2.3	12
	分類不明	0	12
	碗(同安窯系)	0.3	2
	小碗	1-1b	0
	皿(同安窯系)	0	2
	杯	0.1	4
青白磁	碗	0.3	2
	皿	0	1
	合子	0	1
	合計	21.2	139

図61 小碗と小皿の組成図

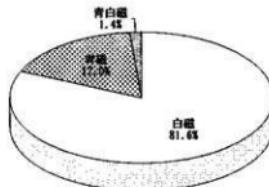


表33 中世後期中国磁器の器種別組成表

器種・分類名		口縁部残存率 (x/12)	破片数
白磁	碗	0	1
	皿	3.7	8
	杯	0.3	2
青磁	碗	蓮弁文B群	1.2
		無文端反	1.8
		分類不明	0
	皿	0.3	2
	盤	1.8	1
	合計	9.1	25

図62 中世後期 中国磁器の組成図

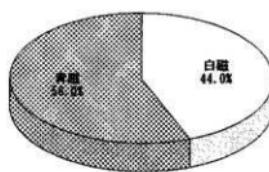


表34 古瀬戸の器種別組成表

時期	供耕具			籠類			調理具A		調理具B			野叢具			茶道具		不明
	平輪	端反輪	輪縁小皿	折縁平皿	印目付大皿	波紋大皿	鉢	櫛鉢	四寸耳皿	内耳鉢	梅瓶	片口小瓶	天目茶碗	白玉茶碗			
中期後半										1(2.2)							
後期	前半	1(0.7)		2(0.4)	1(0.5)					5(3.2)							
	後半	5(6.4)	1(0.9)	11(15.8)	1(0.8)	7(2.8)	2(1.6)	5(3.3)	9(3.2)	1(0.7)	2(2.4)		3(3.2)				
	不明			3(1.3)											2(1.7)	2(0.6)	
不明																	
計	6(7.1)	1(0.9)	16(17.5)	2(1.3)	7(2.8)	2(1.6)	10(6.5)	9(3.2)	1(2.2)	1(0.7)	2(2.4)	2(1.7)	3(3.2)	2(0.6)			

()外の数字は口縁部破片数、()内の数字は口縁部残存率X12

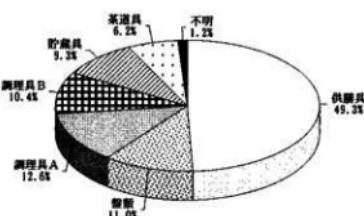


図64 古瀬戸の器種別組成図

表35 中世前期の土器組成表

器種	口縁部残存率 (%)	口縁部破片数
山茶碗	23.8	439
小皿・小豆	69.5	37
鉢	7	11
常滑盤・甕	12	15
中国磁器	21.2	42
土師器皿・羽釜	3.2	6
土師器皿	40.8	51
合計	381.7	601

表36 中世後期の土器組成表

器種	口縁部残存率 (%)	口縁部破片数
山茶碗	3.4	5
小皿	3.2	1
常滑鉢	3.75	6
常滑盤・甕	0.3	1
古瀬戸	51.7	64
中国磁器	9.1	15
土師器皿	0.2	2
土師器皿	38.3	417
瓦質土器	2.8	3
大甕	6.1	9
合計	463.55	523

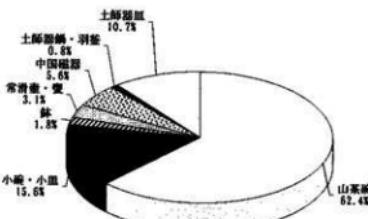
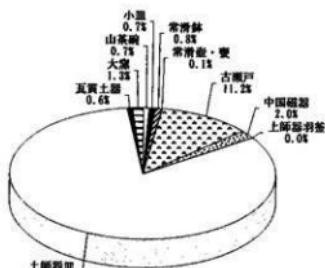


図65 中世前期の土器組成図



2%、不明1.2%から構成され、供膳具の縁釉小皿が全体の33.8%と多いのが特徴である。この他体部破片で茶壺が1点認められた。常滑鉢は7型式と9・10型式、甕・甌は10~12型式のものを1点確認した。中国磁器の内訳（小野分類に依る）は表33に示した通りである。口縁部残存率の組成比率（図63）で青磁が全体の56.0%、白磁が44.0%を占め、青磁が優勢となり中世前期と異なっている。土師器については鍋がなく代わりに羽釜が1点認められた。北村分類で羽釜A4類としたものである。土師器皿は出土量が多い。まとまった数量が出土したSK22では、口縁部残存率の組成比率では井川分類でB1類8.4%、C1類38.3%、C2類53.3%から成る⁶。遺跡全体でみてもC1類が目立ち、A4類・B1類・B3類・C2類・C3類が少量認められた。畿内の瓦器・瓦質土器9点⁷は小片であり、多くは中世の前・後期のいずれに伴うか判断が難しい。信楽壺2点も同様である。大甕の器種には天目茶碗・丸碗・志野丸皿・擂鉢が少量ずつ認められたが、中世末と近世初頭のものを区別することはできなかった。ここでは中世末の可能性も存在すると仮定して組成に入れている。土器組成の比率（図66、表36）は山茶碗（0.7%）、小皿（0.7%）、古瀬戸（11.2%）、常滑鉢（0.8%）、常滑盤・甕（0.1%）、中国磁器（2.0%）、土師器皿（0.04%）、土師器皿（82.6%）、大甕（1.3%）、瓦器・瓦質土器（0.6%）である。中世前期同様、中国磁器が比較的多いのが特徴である⁸。

近世については瀬戸美濃の碗類が大半で、皿・鉢・甕・瓶類の各種が認められ、常滑・肥前も少量伴出した。

2. 遺物の出土状況

図67は包含層出土の接合前破片を時期別に分類し、地区別に組成比率を示したものである。

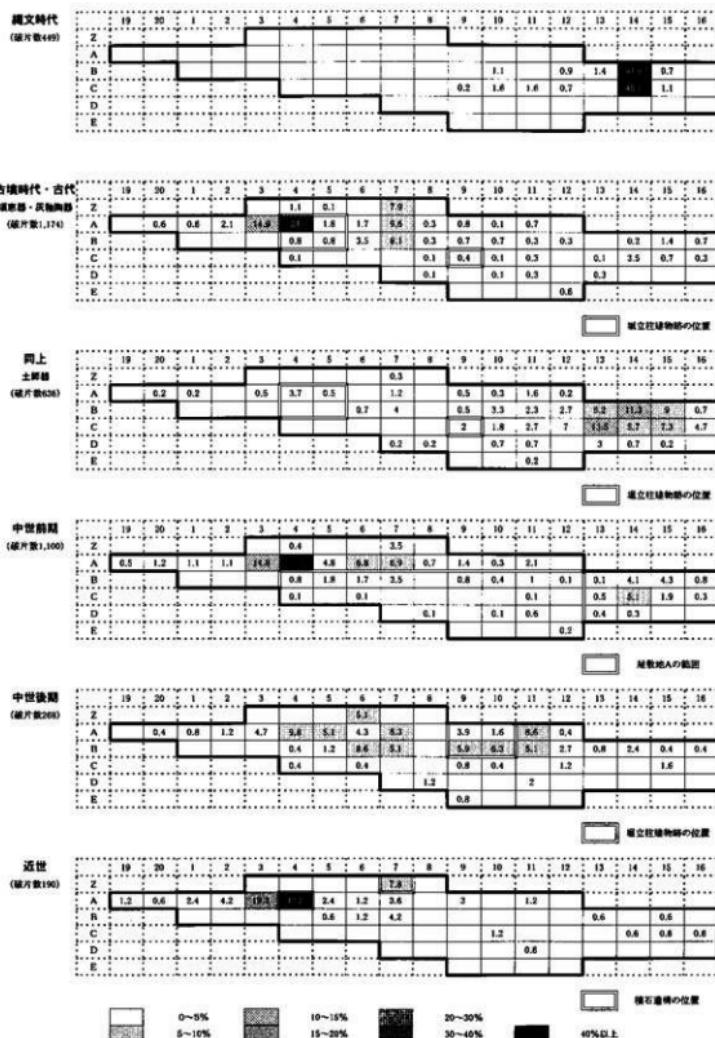


図67 包含層における時代別土器出土状況図

古墳時代・古代の土器のうち、須恵器・灰釉陶器はA 3・A 4区とA 7区、土師器はC13・B14区を中心に出土しており両者間で地点差が認められる。ただし古代以降に属する土師器の確認例が少ないことから、あるいは土師器の大半は古墳時代の所産である可能性もある。中世前期の土器はA 3・4区を中心に出土しており、該期の遺構の周辺に多いという特徴がある。中世後期の土器はA 4・B 6区とA11区を中心に出土している。前者は該期の遺構が少ない割りで出土量が多い点は、東地区に比べ周辺の削平などの後世の改変が多く遺構覆土上部の遺物が浮上した可能性が考えられる。近世については出土地点が限られ、遺構の位置とほぼ重なるのが特徴である。

以上述べた包含層出土土器は後世の土地利用の影響を受けて移動している恐れがあるが、遺構内出土土器はその可能性が少ない。検出した遺構は溝や自然流路跡のように平面規模の大きな場合があつて地区単位に示すことができないため、種別毎・時期別にまとめた(表37)。遺構の種別は掘立柱建物跡の各柱穴、樋の柱穴と小穴、土坑、溝、自然流路跡、道路状遺構2の各土坑、

積石遺構1・2、盛土状遺構の8種類である。このうち後3者は近世以降に属し、他は古代～中世後期の遺構である。表をみると、古墳時代・古代と中世前期では溝と自然流路跡からの出土量が多いが中世後期では少くなり、代わりに土坑と掘立柱建物跡の各柱穴からの出土量が増える。近世では出土量の大半が盛土状遺構である。この出土傾向は中世後期以前に自然流路跡がほぼ埋没したために、中世後期には土器の廃棄形態が自然窓地内投棄から土坑内廃棄に変化したことを示している。

また前述の包含層出土状況から廃棄地点も中世前期の屋敷外から中世後期の屋敷地近郊へと移動している。出土遺構別土器組成表(表38)をみると、前期では山茶碗、小碗、小皿、土師器皿の大半を自然流路跡に廃棄しているのに対し、中国磁器は自然流路跡と同程度の数量が溝から出土している。後期では、土師器皿の大半を土坑に、古瀬戸も土坑と溝に廃棄している。今回の調査では遺物出土数が少ないため不明な点が多いが、今後も土器の各器種と廃棄場所との有機的関係を探る必要がある。

表37 遺構別土器出土状況

遺構名	古墳・古代		中世前期		中世後期		近世	
	破片数	%	破片数	%	破片数	%	破片数	%
掘立柱建物跡	47	5.3	46	4.5	108	16.7	0	0
樋・小穴	49	5.5	32	3.1	41	6.3	0	0
土坑	163	18.4	81	7.9	365	56.5	1	0.8
溝	154	17.3	117	11.4	52	8.4	3	3.4
自然流路	279	31.5	554	53.8	33	5.1	3	2.3
道路状遺構2	33	3.7	18	1.7	12	1.9	3	2.5
積石遺構1・2	71	8	68	6.6	8	1.2	7	5.9
墓土状遺構	90	10.2	113	11.3	27	4.2	100	84
計	886	100	1029	100	646	99.9	118	99.8

■ 10~30% ■ 30~50% ■ 50%~

表38 遺構別中世土器出土状況

遺構名	中世前期						中世後期						古窓地 ・大窓地				
	山茶碗	小碗 小皿	鉢	青磁 白磁	青磁 白磁	土師器	山茶碗	小碗 小皿	青磁 白磁	青磁 白磁	土師器	土師器皿					
掘立柱建物跡	39(8.8)	4(1.0)	0	0	2(0.5)	0	12(2.7)	2(0.7)	0	3(1.9)	0	2(2.4)	0	122(86.3)	0		
樋・小穴	26(5.4)	3(2.8)	0	0	1(0)	0	2(0.9)	1(0)	0	2(1.1)	0	0	0	36(26.5)	1(0)		
土坑	41(9.2)	2(0)	1(0.3)	0	2(0.4)	0	24(2.0)	3(2.5)	0	4(0)	0	3(0.3)	0	1(0)	0		
溝	96(11.9)	3(0.8)	2(0.6)	1(0.9)	1(0)	0	6(1.0)	1(0)	1(0)	28(3.7)	0	5(1.5)	2(0.2)	10(9.2)	5(0.4)		
自然流路	41(4.7)	4(1.0)	0	2(1.6)	4(1.6)	1(0.4)	21(1.9)	26(1.4)	51(10)	1(0)	2(3.2)	6(1.1)	1(0.1)	6	0	29(5.8)	3(1)
道路状遺構2	9(0.8)	3(5.0)	0	0	4(0.1)	0	2(2.7)	1(0)	0	2(0.6)	0	1(0.3)	1(1.8)	0	6(3.0)	1(0)	0
積石遺構1・2	31(1.0)	3(2.2)	5(2.7)	8(4.5)	1(0)	0	0	0	0	1(0.3)	0	0	0	0	1(0.3)	0	1(0.3)
墓土状遺構	92(2.6)	4(0.9)	5(1.4)	0	12(3.9)	0	0	0	0	17(4.9)	0	0	1(0.5)	0	1(0.5)	0	8(0.1)
總合	758	66	16	13	52	26	97	9	3	77	1	1	12	2	520	20	
口縁廻存率(X/12合計)	146.3	48.7	6.6	7	8.8	1.4	31.6	3.2	3.2	26.1	0.1	0.3	6.5	0.2	299.6	1.9	

破片合計数が多い器種に現れる表示を示す。()内の数字は破片数、()内の数字は口縁廻存率4X/12

口縁廻存率比 ■ 10~30% ■ 30~50% ■ 50%~

その他の遺物について付記しておく。第5章第2節で指摘されたように、出土した鉄滓を観察したところ鉄製品に通有な組織が確認された。鉄滓の数量は少なく分布状況は散漫であり、関連遺構も検出されなかったため、所属時期は不明である。しかし分布調査によれば東隣の日守遺跡内でも広く散布していることから、周辺において製鉄が行われていた可能性があり注目される。金属製品については大方の出土地点が自然流路と溝と土坑であり、中世土器の廃棄場所と重なる。各々の具体的な用途については今後の検討が必要である。

3. 遺構の時期区分

今回の調査で検出された掘立柱建物跡・溝・道路状遺構などは遺構間の重複が少なく、そのためには各遺構の所属時期を決定する際には、遺構の軸の方位と出土遺物を最大の根拠とした。出土遺物については既に一覧表で示したので、ここでは各遺構の軸の方位の傾向を中心に検討する（図68）。

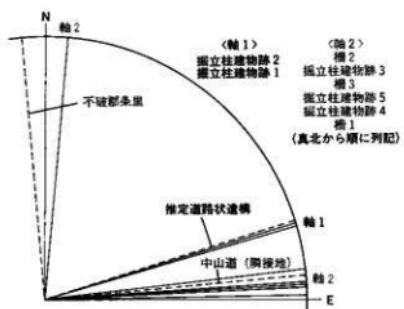


図68 各遺構等における軸の方位の傾向

掘立柱建物跡はN73°E前後（以下「軸1」とし、これに直行するものを含む）と、真東（以下「軸2」とし、これに直行するものを含む）前後の建物群の二群に分けることができる。軸1の建物跡の柱穴からは8世紀後半の土器、軸2の建物跡の柱穴からは混入土器を除くと12世紀後半～13世紀初頭を中心とする土器が出土している。溝については長軸方位が明確なものうち大半が軸2に属し、軸1に合うものはSD38のみである。しかしこの溝の2層から中世後期の土器類が出土しており例外とみなせる。これ以外にはSD21・23・36・37がN24.0～79.5°Wを示し、遺構密度の希薄な東端に分布が偏る。SD23は近世初頭の所産であるので、これに切られるSD21は近世以前である。SD36・37は出土遺物がなく所属時期が不明である。

以上のことから各遺構の長軸方位がおよそ時期差を反映すると理解できるので、軸1の遺構群をⅠ期、軸2の遺構群をⅡ期・Ⅲ期とし、さらに出土遺物によって次のように遺構の時期細分を行う。

- I 期 …古代（8世紀後半頃）
- II a 期 …中世前期（12世紀後半～13世紀初頭頃）
- II b 期 …中世後期（15世紀後半頃）
- III 期 …近世以降（17世紀以降）

4. 遺構の変遷

上記に従って主要遺構を時期別に分類したものが図69であり、各期の特徴を述べる。なお流路跡1～3については、前節の様相と近世初頭のSD23に切られることから、中世後期にはほぼ埋没していたと判断できる。ただし流路の規模については不明である。溝については軸の方位と出土遺物のみでⅡ期の細分はできなかった。各土坑については出土遺物から所属時期を確定できるものに限った。

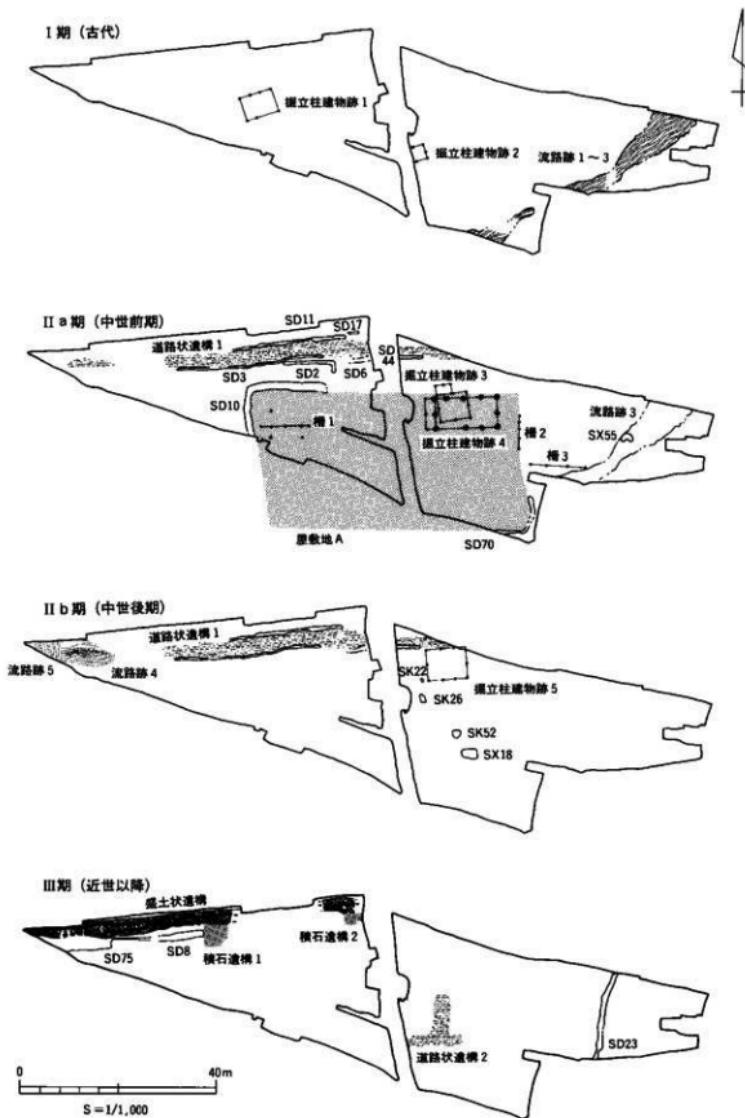


図69 主要造構変遷図

I期は掘立柱建物跡1・2、流路跡1～3がある。

溝の有無については不明である。前述したように西地区は遺構検出面が現地表面から浅く、掘方の浅い遺構は滅失している可能性がある。

IIa期は掘立柱建物跡3・4、櫛1～3、SD10・70、道路状遺構1、SX55、流路跡3などがある。大半の遺物の廃棄場所は流路跡3である。

軸の方位からみて、掘立柱建物跡3が先行して掘立柱建物跡4が後続し、櫛1～3は後者に伴う。なお櫛1は立地からみれば建物などの施設が適当に思われ、今後の検討が必要である。櫛1は近接するSD10とほぼ軸が一致し、SD10はSD70と共に共通点が多い。このことから掘立柱建物4と櫛1周辺を屋敷地とし、その北西隅と南東隅をL字形に区画する溝が存在した可能性が高い。仮にこれを一屋敷地の区画(屋敷A)と認めるとき、その推定面積は約1,531m²を測る。SD10は比較的長期の溜水状態が確認されたこと、この溝を介した導水施設がないこと、南北から北東に向かって傾斜する地形上にありすぐ東には自然流路跡が位置することから、屋敷地内への水の進入を防ぐ必要があったものと推測できよう。道路状遺構1については少なくとも硬化面が軸2に合う形で帯状に検出されたこと、SD2・3の東端とSD10の東端が一致することから、該期に位置づけられる。

IIb期は掘立柱建物跡5、道路状遺構1、SK22・26・52、SX18、流路跡4・5などがある。遺物の廃棄場所は掘立柱建物周辺の土坑や窪地である。

道路状遺構1は少なくとも近世初頭の盛土状遺構の構築までには機能を停止していることから、該期に流路跡4上層の堆積物によって埋没した可能性が高い。道路状遺構1と掘立柱建物跡5の共存はやや微妙である。

III期は積石遺構1・2、盛土状遺構、SD8・75・23がある。建物の存在を示すような礎石は確認していない。

盛土状遺構については合計2回の構築の様子が確認できた。盛土状遺構1期は盛土の有無は不明ではあるが、本遺構の外側を溝状(SD8・75)に掘削して段状に成形しており、盛土状遺構2期は石積遺構1付近の土層観察から盛土を行った可能性がある。2基の積石遺構はその機能が不明であるが、盛土状遺構1期の構築時期(近世初頭)とほぼ同時期と思われ、盛土状遺構2期の構築時には本来の機能から脱し、改変を受けたと解釈される。また周辺の包含層や盛土状遺構出土土器量よりも遺構内出土土器量が特に多いことから、意図的に混入させた可能性もある。

5. 道路状遺構の変遷

第2章第1節で述べたように、調査地北側で認められた帯状区割を仮に推定道路状遺構と認めるならば、畠地区割から推定される道幅は11.0～12.5mを測りその方位は軸1に一致する。調査地内の掘立柱建物跡1から約75m、掘立柱建物跡2から約95m北に位置する地点である。推定道路状遺構は式内社である伊富岐神社の一ノ鳥居を起点にして垂井町大字日守字不帰まで直線的に延び、相川の氾濫原ないし低湿地を避けるようにやや南に振って進むようにみえる(図5)。

道路状遺構1は側溝の可能性があるSD11・17とSD3を含めると幅3.7m～4.4mを測り、その方位は軸2に一致する。推定道路状遺構から道路状遺構1へ移設されたとすると、その時期は密接な関連が想定される屋敷Aの時期に最も近く、IIa期に位置づけられよう。ただしIIa期を遡るか否かは不

明である。移設の起点が伊富岐神社の一ノ鳥居と考えられる点は興味深い。

道路状遺構1は、再び改修され中山道と呼称される。現在の道路の幅は約5.3mを測り、調査地の隣接域の方位は軸2に一致する。移設の時期は沿道の盛土状遺構の構築時期から近世初頭である。

6. 結語

- ・調査地が集落の東端部に位置するために不明な点多いため、今後の発掘調査等の考古学的成果を待って、検出した掘立柱建物跡や周辺の遺構群が担う集落の中での役割を評価し、その上で中国磁器の割合が高い中世土器組成を、西瀬地方周辺の消費遺跡の様相と比較して再評価する必要がある。
- ・古代・中世集落の主要な道路状遺構の位置を推定・把握し、集落内の建物と道路状遺構の軸の方位が一致することを確認した。このことは当集落の形成と道路構築が密接な関係にあったことを示している。

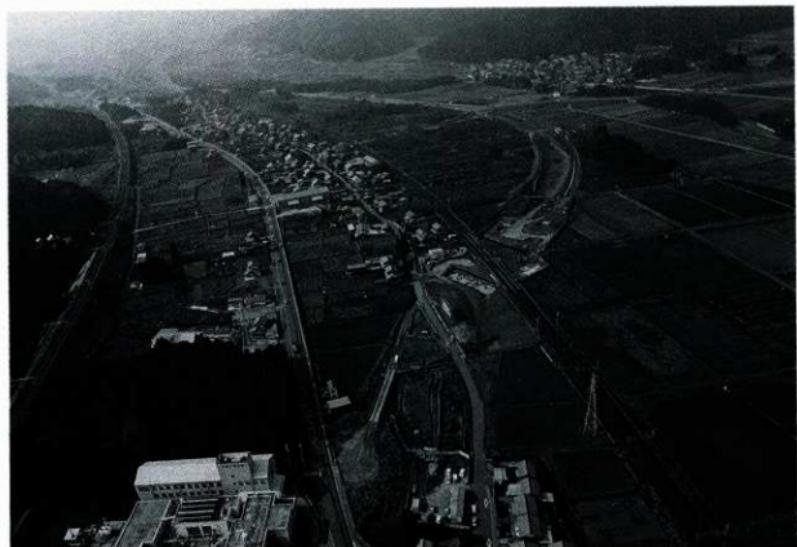
注

- 1) 遺物の計測方法は宇野1992に依り、1cm以上の全破片を対象とした。古墳時代・古代の土師器の中には中世土師器煮炊具が混入している可能性もある。また古代末～中世初頭の土器はSX55の出土状況も勘案し、便宜上中世前期に含めた。また常滑としたものは肉眼観察により判別したが、この中には渥美が混じる可能性がある。なお計測・分類に際して小野木学の助言と協力を得た。
- 2) 中世前期の土師器鍋・羽釜のうち、伊勢型鍋は1.1/12個体（破片数3）、清輝型鍋は0.7/12個体（破片数1）、羽釜は1.4/12個体（破片数25）である。中世後期については羽釜が0.2/12個体（破片数2）である。
- 3) 大垣市曾根八千町遺跡（鈴木1997）では山茶碗5型式を主体とし、破片数の組成比率で山茶碗80.12%、鉢0.58%、甕1.28%、輸入陶磁器1.01%、土師器3.56%、土師器皿10.53%、不明2.92%という構成である。これに対し揖斐川町角之御前遺跡（小野木1996）では山茶碗6型式を主体とし、口縁部破片数の組成比率で山茶碗12.8%、古瀬戸1.8%、常滑0.6%、中国磁器0.8%、土師器鍋0.3%、土師器皿83.4%、大甕0.3%という構成である。当遺跡の土師器皿の高比率について「遺跡の居住者がハレの場を意識できた階層の人々か、あるいは宗教関係に從事する人々であった」可能性を指摘している。両遺跡とも輸入陶磁器が土器組成比の1%前後にとどまっている点は、尾張地域の消費遺跡の一般的な傾向とも一致する（尾野1996）。今後角之御前遺跡のようないわゆる格の高い遺跡の性格と中国磁器の用途についてもさらに検討する必要があろう。
- 4) 手づくね成形の土師器皿は個体の中でも変異の幅が大きいので、出土土器のうち口縁部残存率1/12以上に限って計測した。計測の結果、B 1類は口径8.9cmのものが4.5/12個体（口縁部破片数4）、C 1類は口径6.95~8.7cmの小形品が20.4/12個体（口縁部破片数27）、C 2類は口径6.7~7.3cmの小形品が28.4/12個体（口縁部破片数21）であった。計測値の合計は全体の44.4%に当たり、これらの中にはB 3類やC 1類の中形品はこの数字に反映されていない。
- 5) 器種の内訳は楕円2点、瓦質土器羽釜3点・鍋1点、火鉢2点、不明1点（いずれも破片数）である。
- 6) やや時期が下るが、15~16世紀前半の大垣市曾根城跡（鈴木1998）では破片数の組成比率で山茶碗0.5%、常滑4.7%、輸入陶磁器0.4%、土師器0.9%、土師器皿75.5%、瀬戸美濃10.3%、漆器7.7%という構成である。漆器の遺存状況の良い環境下ではさらに割合が増す可能性があることを示唆しているが、中世前期同様輸入陶磁器は土器組成比の1%前後にとどまっていることに注意したい。

参考文献

- 井川祥子 1997 「15世紀後半から16世紀前葉の土器器皿—中濃地域を中心にして—」『美濃の考古学』第2号 美濃の考古学刊行会
- 伊藤祐伸 1996 「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」第4回東海考古学フォーラム「鍋と甕そのデザイン」東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 内堀信雄編 1991 「千葉敷II—財团法人加藤崇三・東一記念館建設に係る緊急発掘調査の記録ー」岐阜市教育委員会
- 内堀信雄・井川祥子 1996 「美濃における古代土器器皿炊具の様相」古代の土器研究会第4回シンポジウム「古代の土器研究—一律令的土器様式の西・東4 炊煮具ー」古代の土器研究会編
- 内堀信雄・横幕大祐 1998 「山中～宇田式併用期の美濃西部城土器編年」第6回東海考古学フォーラム岐阜大会 土器・墓が語る「東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会編
- 宇野隆夫 1992 「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗資料館研究報告』第40集
- 大岡明臣 1976 「長尾遺跡調査とその考察」
1981 「大滝野潮遺跡調査とその報告」
1982 「閑ヶ原町遺跡調査報告」
- 大知正枝・藤科哲夫 1997 「小国御祭田跡」岐阜県文化財保護センター調査報告書第31集
- 小野木学 1996 「角之御前遺跡出土の中世遺物について」『美濃の考古学』創刊号 美濃の考古学刊行会
1997 「美濃地方における中世前期の土器器皿の様相」『美濃の考古学』第2号 美濃の考古学刊行会
- 小野正敏 1985 「出土陶よりみた15・16世紀における面筋の素描」『MUSEUMJ』416
- 尾野善裕 1996 「東海地方の尾張地域を中心とした中長の土器・陶磁器組成について」『中近世土器の基礎研究』 XI 日本中世土器研究会
- 北村和宏 1996 「尾張の『伊勢型鍋』」第4回東海考古学フォーラム「鍋と甕そのデザイン」東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
1996 「尾張の羽釜」同上
- 岐阜県教育委員会 1990 「改訂版岐阜県遺跡地図」
- 岐阜県遺跡調査会編 1996 「塙田・城之内一岐阜市坂田土地区両側理事業に伴う発掘調査ー」
- 佐藤公保 1986 「中世土器研究ノート(1)(2)朝日西遺跡の様相ー」『午報 明和60・61年度 財團法人愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木 元 1997 「曾根八千町遺跡」大垣市教育委員会
1998 「曾根城跡第一次発掘調査ー」大垣市教育委員会
- 関ヶ原町編 1990 「閑ヶ原町史」通史編上巻
- 爭井町編 1996 「新修争井町史」通史編
- 突帯文土器研究会編 1993 「第1回東海考古学フォーラム豊橋大会 突帯文土器から条痕文土器へ」
- 中井正幸 1990 「西濃地域の首長墓系と前期古墳」『大垣市埋蔵文化財調査概要 昭和63年度』
大垣市文化財調査報告書第16集
- 中井正幸編 1997 「大垣市道跡詳細分布調査報告書—解説編ー」大垣市教育委員会
- 中井正幸・原田義久 1998 「不破郡南宮山麓の古墳調査」第6回東海考古学フォーラム岐阜大会土器・墓が語る「東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会編
- 永井久美男編 1994 「中世の出土土器—出土土器の調査と分類ー」兵庫県考古調査会
- 永井宏幸 1996 「尾張平野を中心とした古代煮炊具の変遷」第4回東海考古学フォーラム「鍋と甕そのデザイン」東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 中野晴久 1996 「瓷器系中世陶器の生産」「古瀬戸をめぐる中世陶器の世界~その生産と流通~資料集」(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 中村 浩 1981 「和泉陶邑窯の研究—須恵器生産の基礎的研究ー」柏書房株式会社
- 橋崎彰一 1965 「東海道幹線增设工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」日本国有鉄道
- 野口哲也 1993 「突帯文土器」第1回東海考古学フォーラム豊橋大会 突帯文土器から条痕文土器へ」突帯文土器研究会編
- 波多野寿勝編 1978 「美濃不破國」岐阜県教育委員会・不破開闢調査委員会
- 藤澤良裕 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告書」「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要」V 瀬戸市歴史民俗資料館
1987 「本業焼の研究(1)～(3)」「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要」VI～VII 瀬戸市歴史民俗資料館
1994 「山茶碗研究の現状と課題」「研究紀要」第3号 三重県埋蔵文化財センター
1996 「中世瀬戸窯の動態」「古瀬戸をめぐる中世陶器の世界~その生産と流通~ 資料集」(財)瀬戸市埋蔵文化財センター
- 横田賢次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入陶磁器について—型式分類と編年を中心にしてー」『九州歴史資料館研究論集』4

図 版

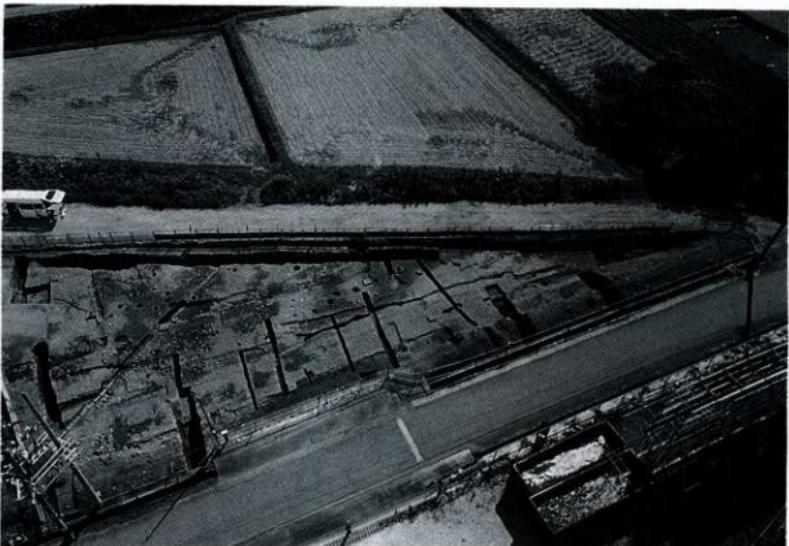


南整理遺跡遠景（東から）



同（西から）

図版 2



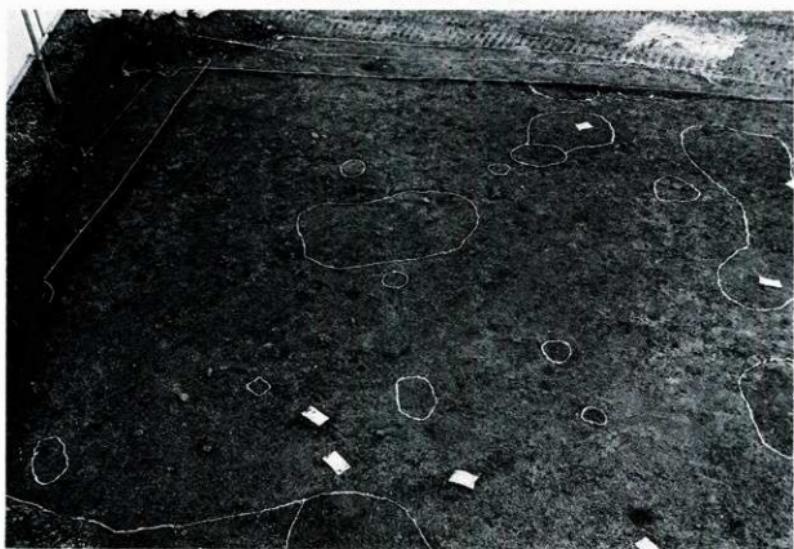
調査地全景（西地区・北東から）



同（東地区：北から）



掘立柱建物跡 1 (完掘状況: 西から)



掘立柱建物跡 2 (検出状況: 南から)

図版 4



掘立柱建物跡 4 (検出状況 : 西から)



掘立柱建物跡 3～5 (完掘状況)



柵 1 (検出状況: 東から)



同 (完掘状況: 南東から)

図版 6



積石造構 1 (検出状況: 南から)



同 (検出状況: 西から)



同 (半截状況: 西から)



同 (検出状況: 東から)



同 (半截状況の詳細: 西から)



積石遺構 2・石垣



積石遺構 2（西半の詳細：南から）



同左（半截状況：東から）

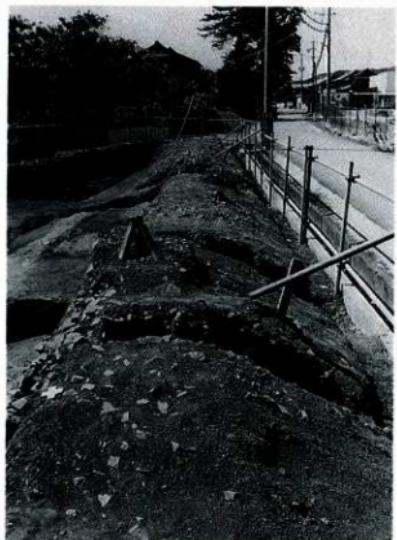


石垣（南から）



除去後の検出遺構（SD17：西から）

図版 8



盛土状造構（検出状況：東から）



同（検出状況：西から）



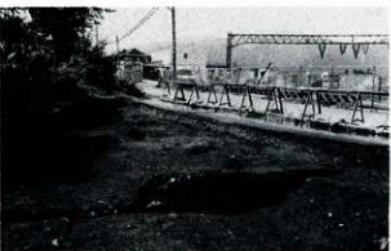
同（A - A'）半截状況：西から



同（C - C'）半截状況：西から



同（B - B'）半截状況：西から



同（D - D'）半截状況：東から

図版 9



SD10（検出状況：東から）



SD14（完掘状況：西から）



SD10（完掘状況：東から）



SD23（完掘状況：南から）



同左（完掘状況：北東から）

図版10



流路跡 3 (遺物出土状況: 南から)



同上 (完掘状況)



同上 (完掘状況の詳細: 北西から)



流路跡 5 (半截状況: 東から)



同左 (調査坑南壁: 北から)



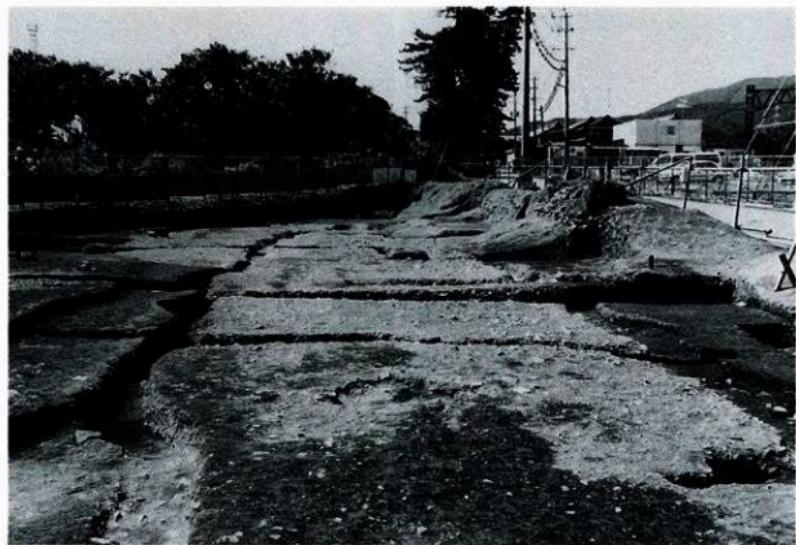
道路状遺構1 (SD 3検出状況: 東から)



同 (東地区: 西から)



同 (SD 2・3: 西から)



同 (完掘状況: 東から)

図版12



道路状遺構 2（検出状況：西から）



同（半截状況：南西から）



同（SX74半截状況：南西から）



同（完掘状況：西から）



同（同上：南東から）



SK22（遺物出土状況：西から）



同左（完掘状況：西から）



SK26（完掘状況：南から）



SK52（四分割状況：南から）



SX18（半截状況：南西から）



SK110～114（完掘状況：南西から）



同上（石列：東から）



同左（石列：北から）

図版14



第2調査面（全面：東から）



同（SD53・54：南西から）



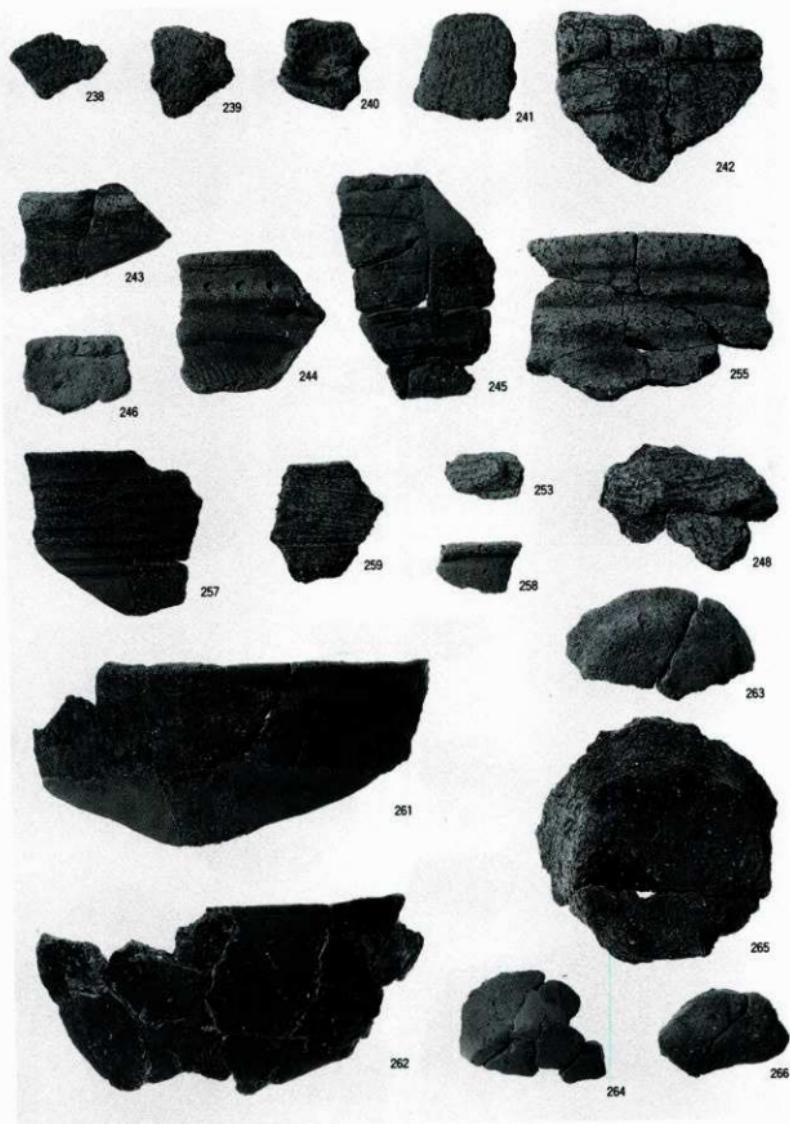
同（SX50：南から）



同（遺物出土状況）

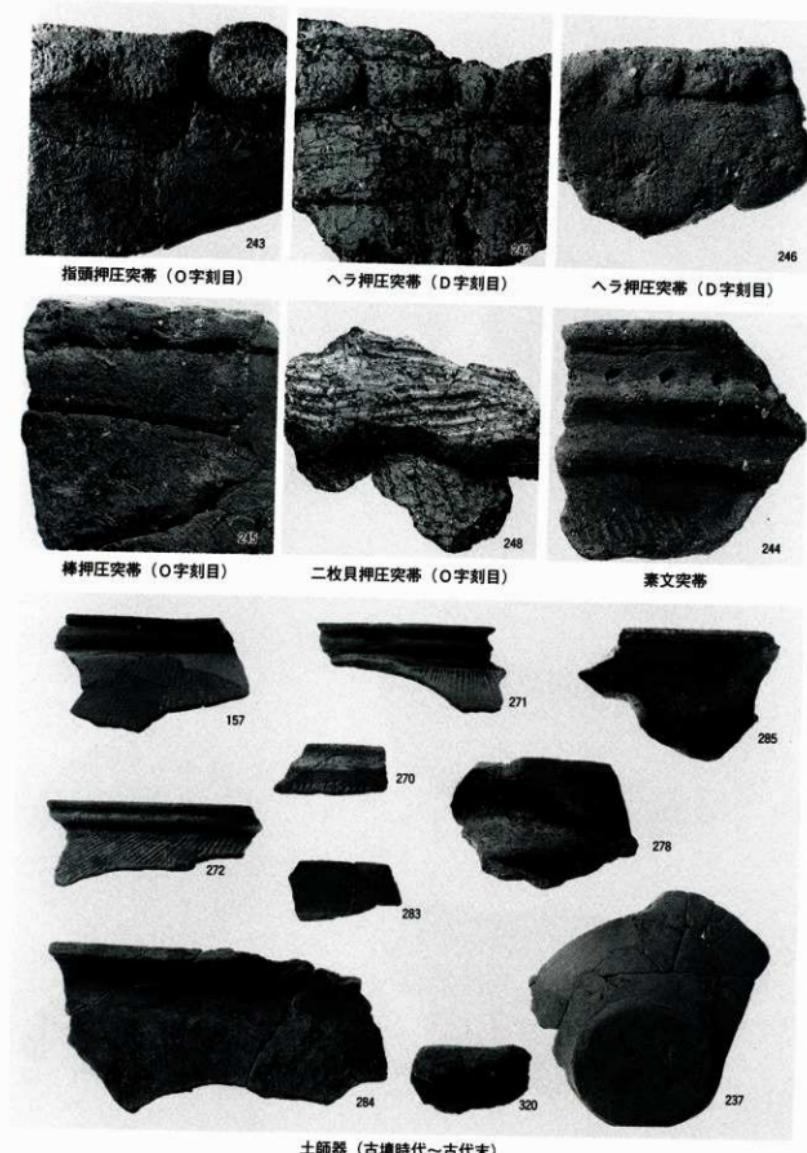


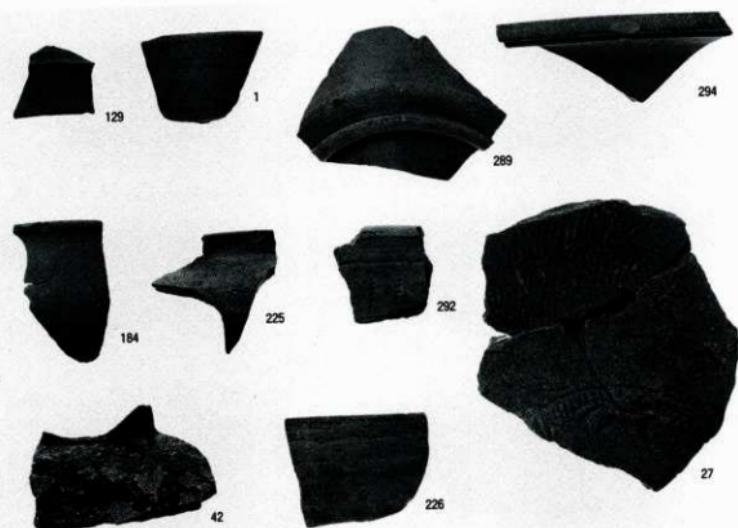
同（SX55：南西から）



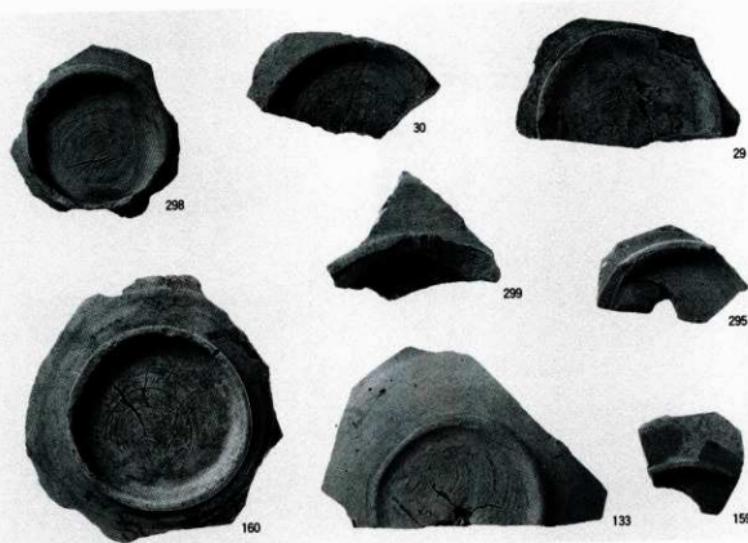
縄文土器・弥生土器 (266)

図版16



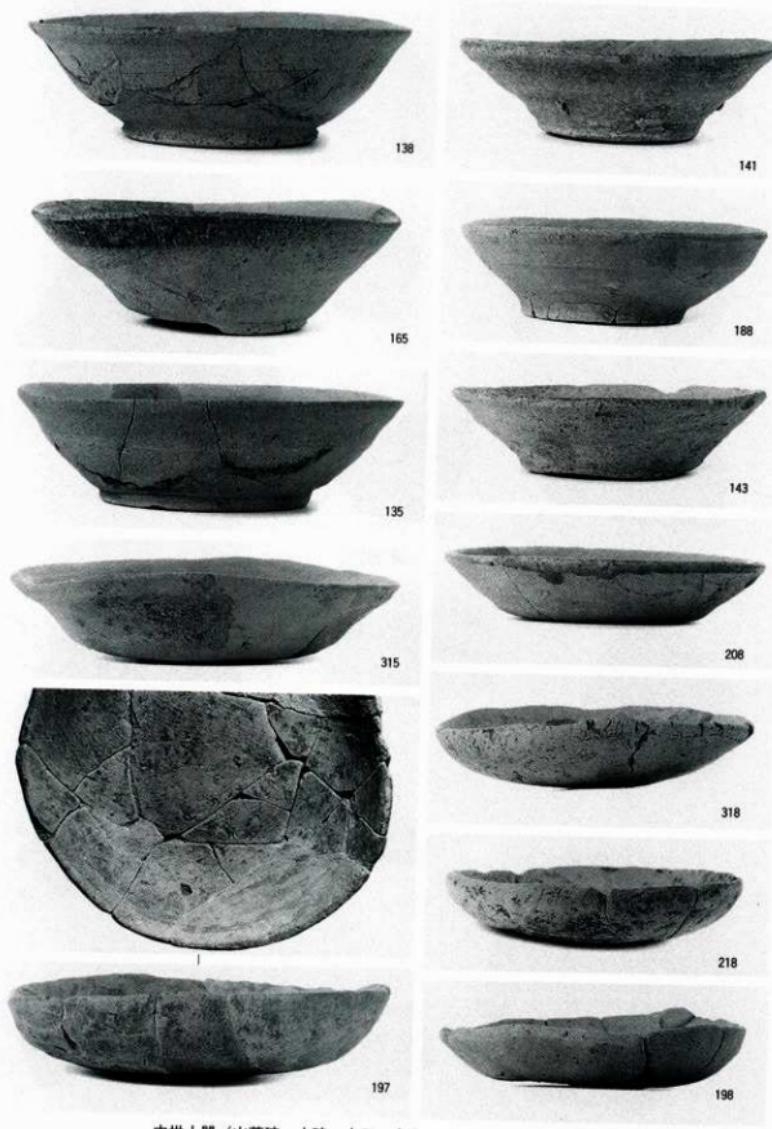


須恵器

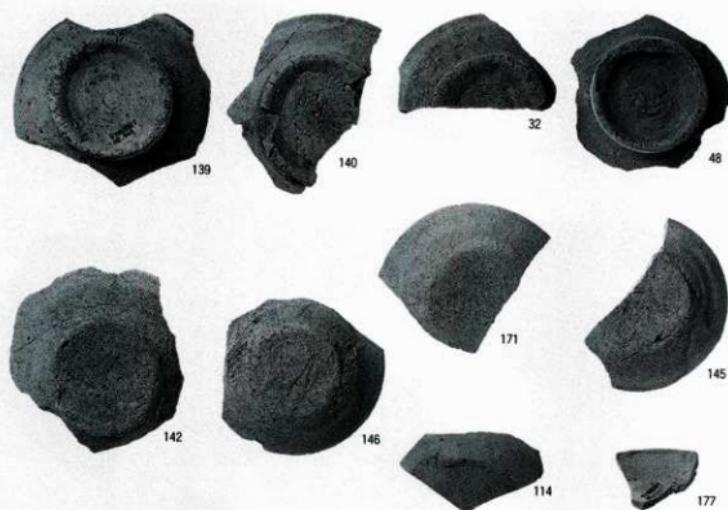


灰釉陶器

図版18



中世土器（山茶碗・小碗・小皿・古瀬戸縁釉小皿・土師器皿）

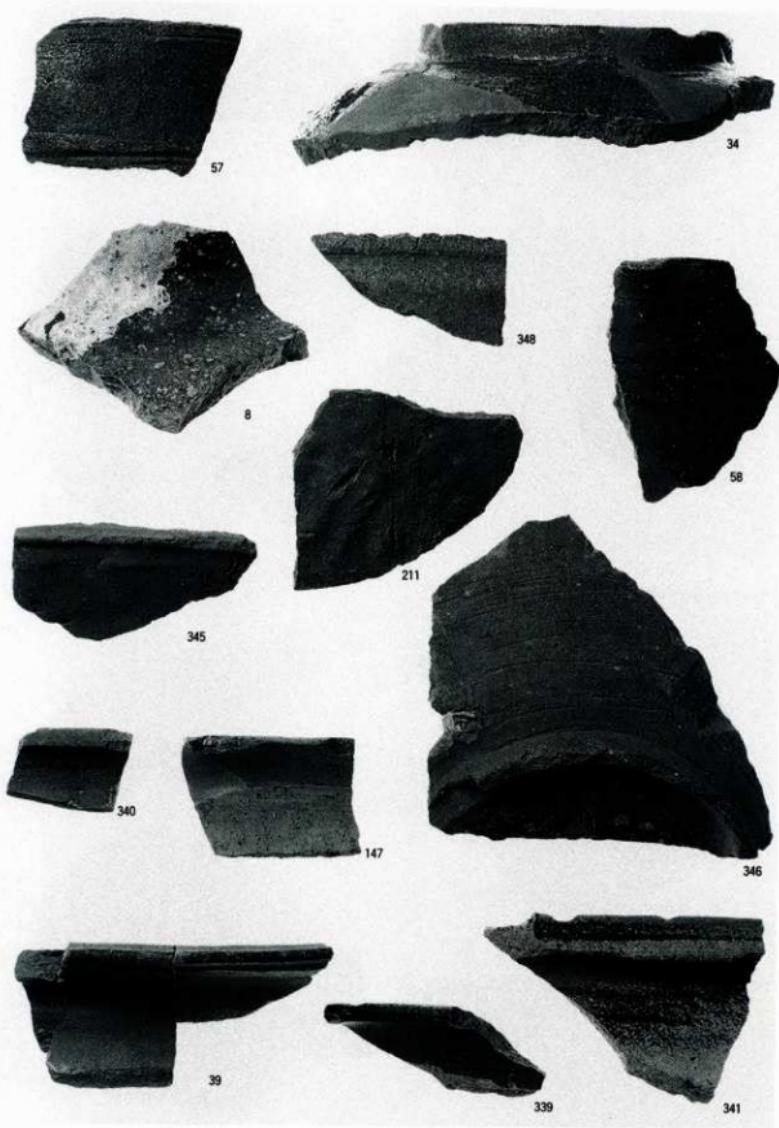


小碗・小皿

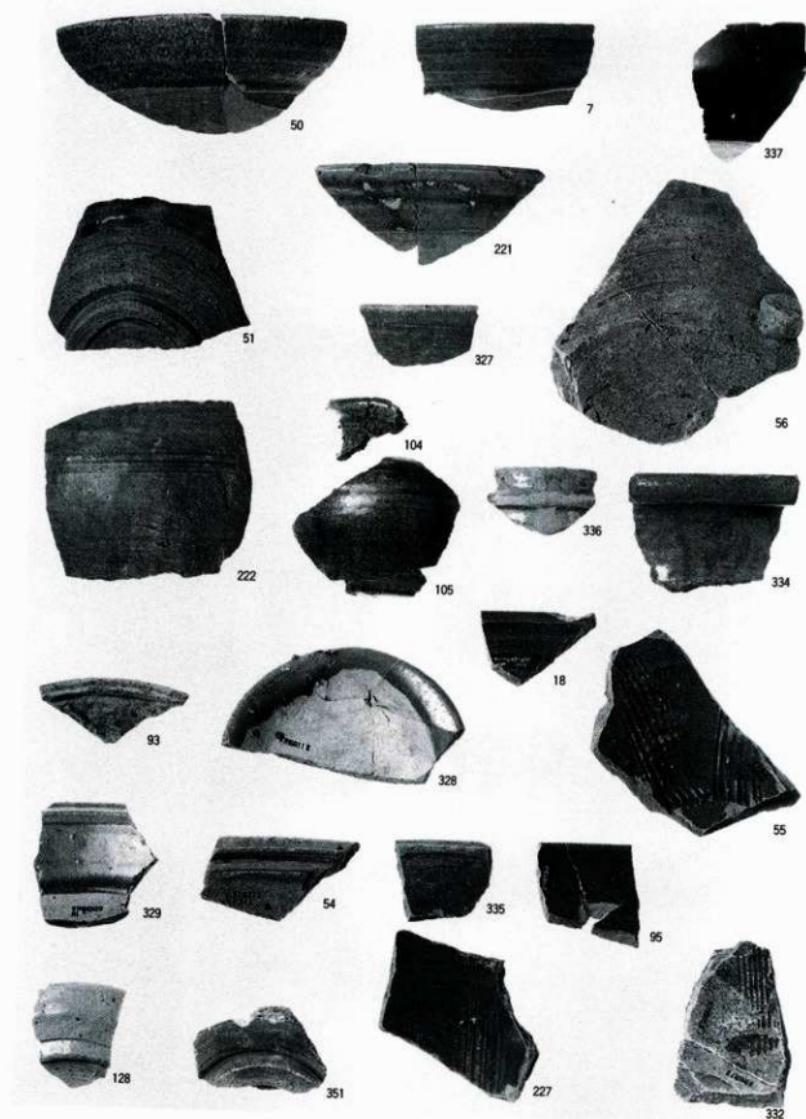


灰釉陶器 (161)・山茶碗

図版20

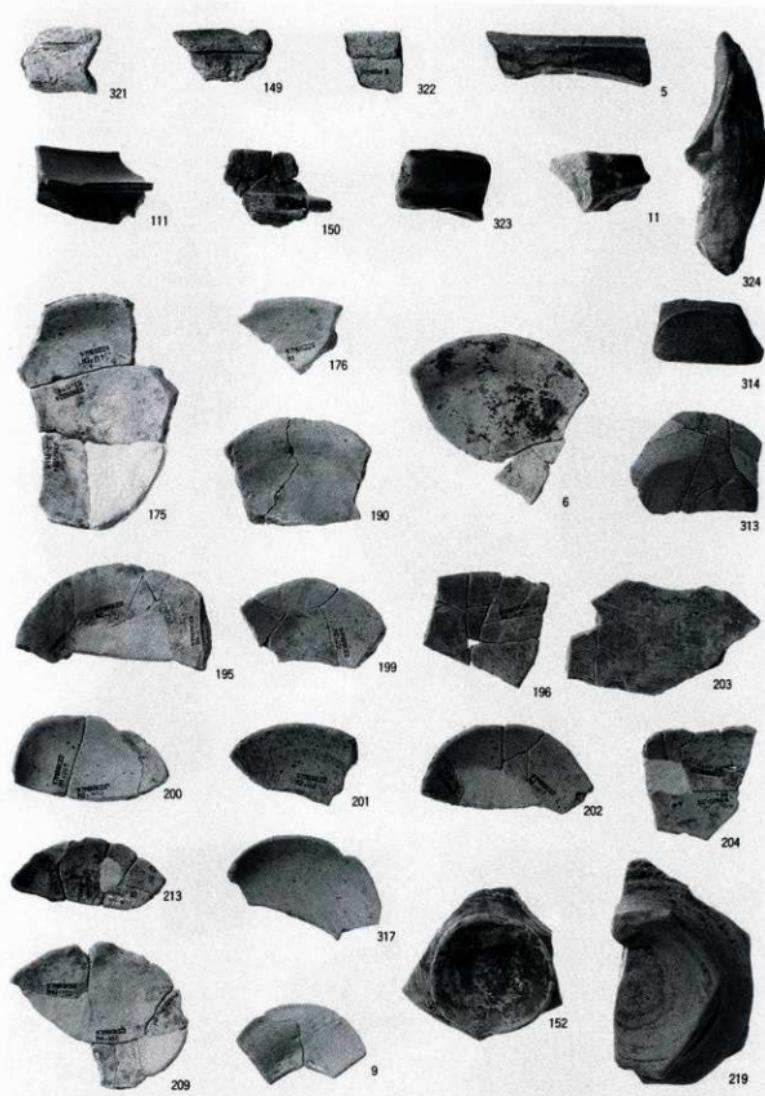


信楽(8)・常滑他

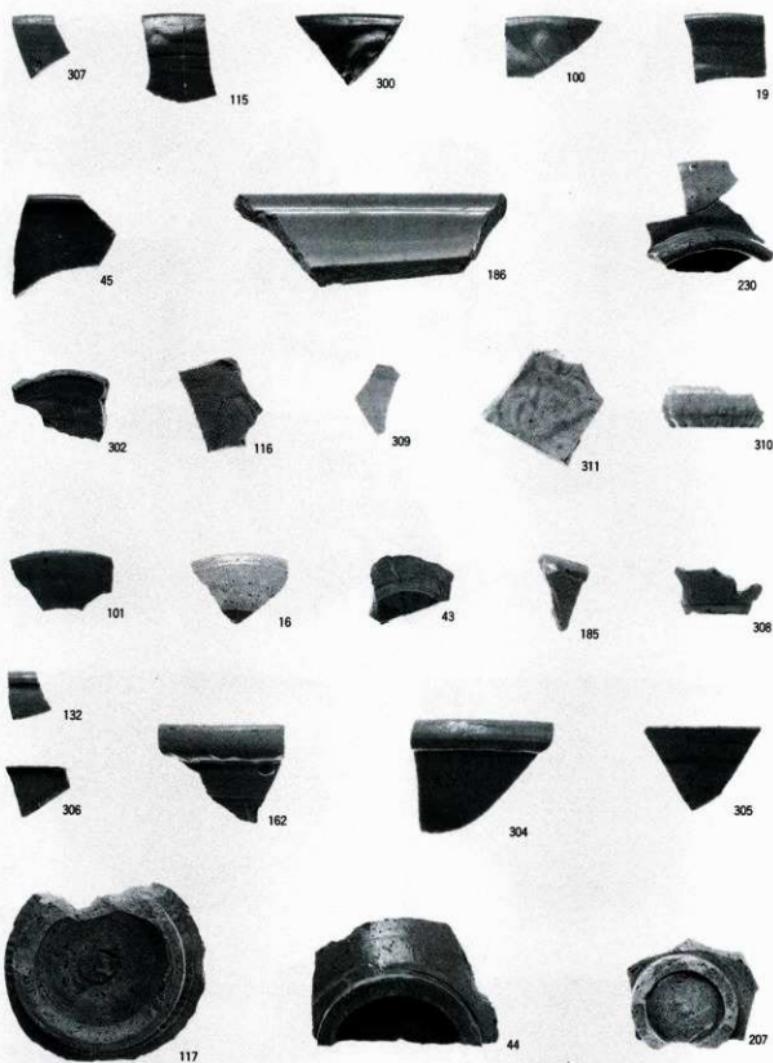


古瀬戸・大窯 (128・351・227)

図版22

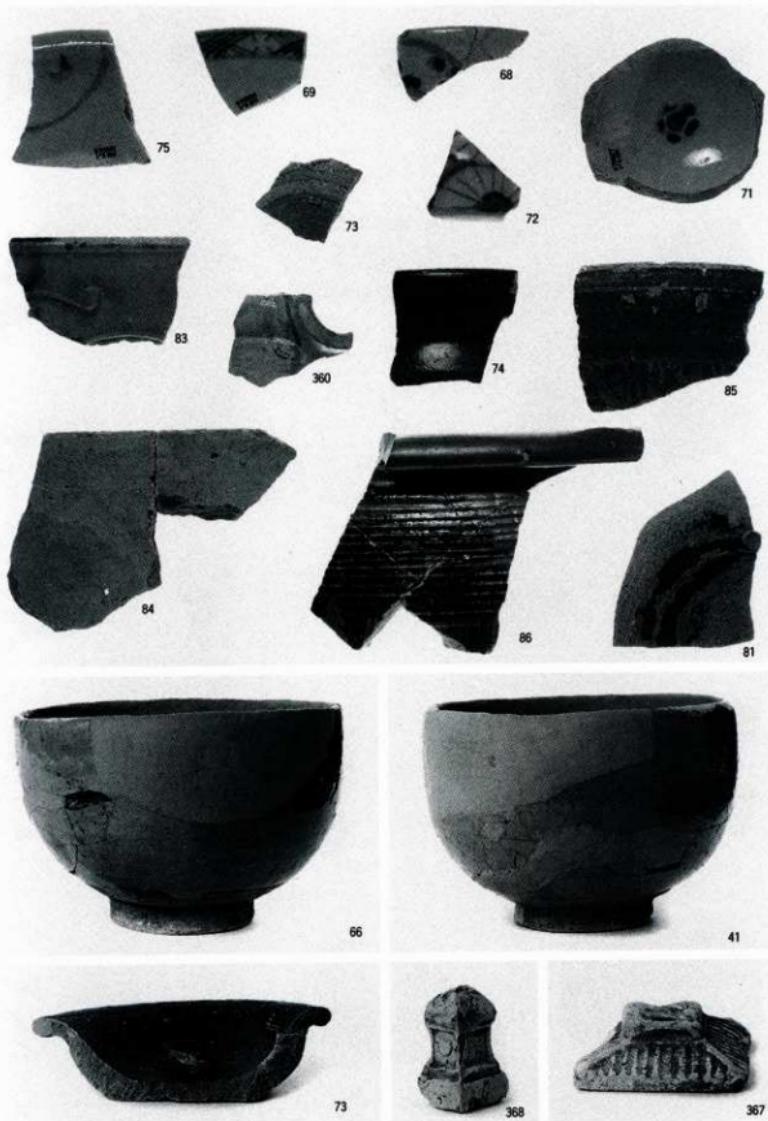


土師器（古代末～中世後期）

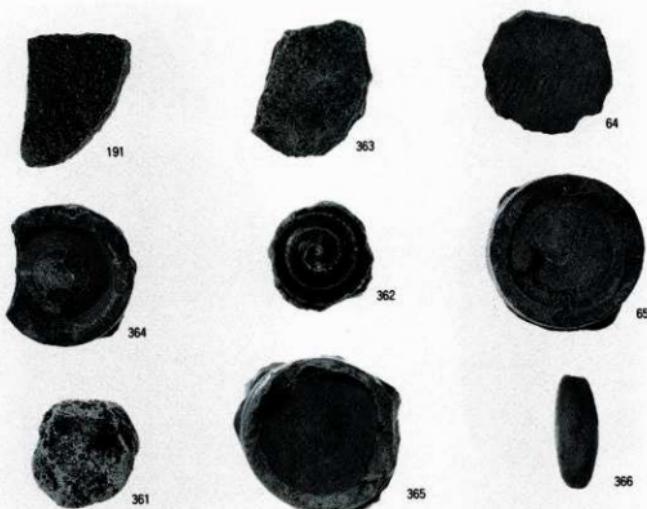


中国磁器（青磁・青白磁・白磁）

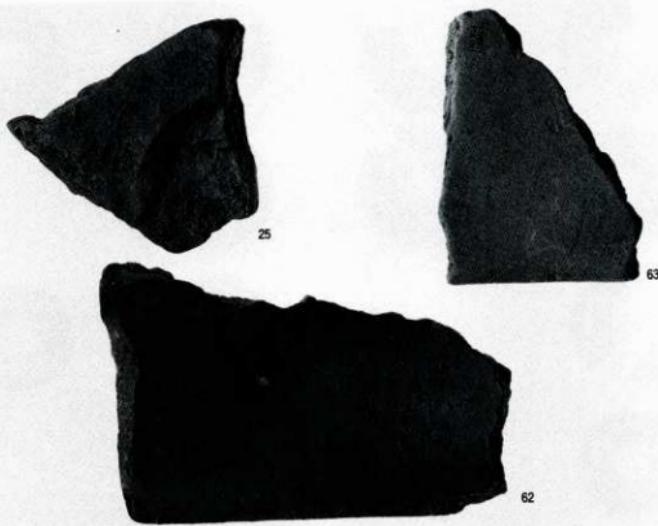
図版24



近世陶磁器・土製品（367・368）

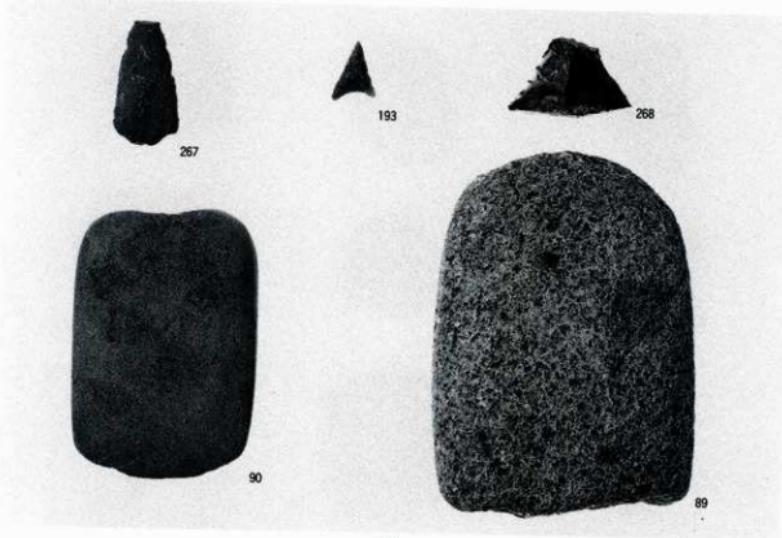


加工円盤・土錐 (315)

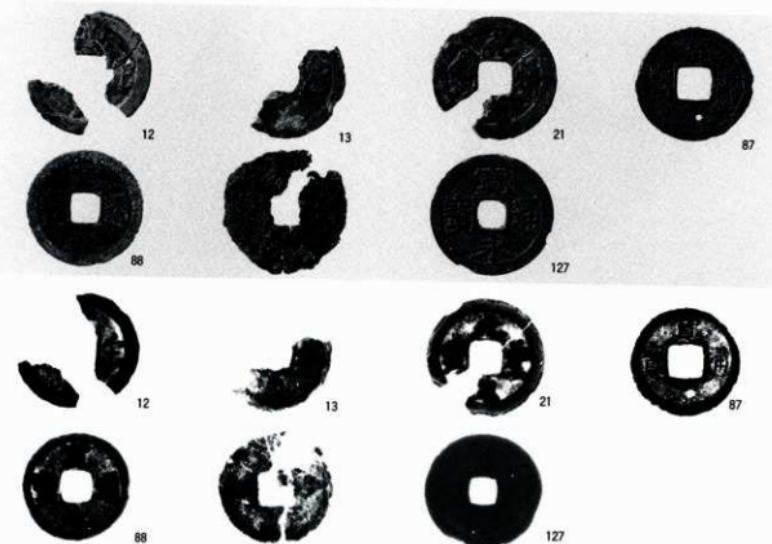


瓦

図版26



石器



錢貨



金属製品

図版28



鉄滓No.1



鉄滓No.2



鉄滓No.3



鉄滓No.4

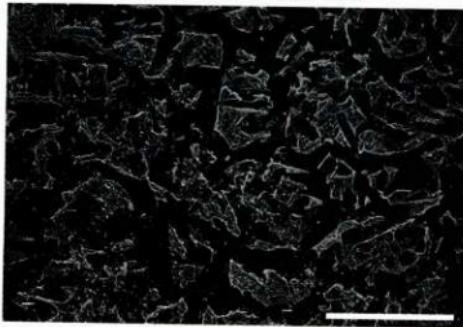
鉄滓の断面写真 (スケール 1 cm)



1. 金属部A (スケール100ミクロン)



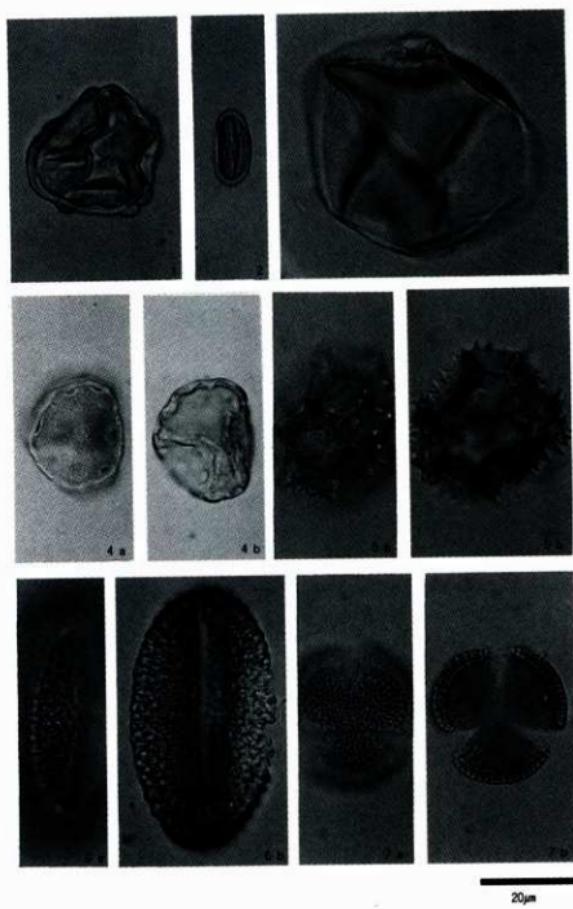
2. 金属部B (スケール150ミクロン)



3. 金属部Bの拡大 (スケール350ミクロン)

鉄津No.1 の金属部の電子顕微鏡写真

図版30



産出した花粉化石

報告書抄録

ふりがな	みなみせいりいせき						
書名	南整理遺跡						
副書名	一般国道21号関ヶ原バイパス建設に伴う発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター 調査報告書						
シリーズ番号	第57集						
編著者名	三輪晃三、宮野義則、藤根久、平野礼子、山形秀樹、新山雅弘						
編集機関	財団法人 岐阜県文化財保護センター						
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 Tel058(237)8550						
発行年月日	西暦2000年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在名	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積m ²	調査原因
みなみせいり 南整理遺跡	岐阜県不破郡 関ヶ原町	21362	01562	35° 22' 04"	136° 30' 32" + 19990506 19990320 19990601 19990922	2,000m ² 900m ² 計2,900m ²	一般国道21 号関ヶ原バ イパス建設 に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
南整理遺跡	集落跡	古代 ↓ 中世	掘立柱建物跡 柵 道路状遺構	5 3 1	須恵器、土師器 灰陶陶器 中世陶器 中国磁器 近世陶磁器	古代～中世の集落 跡を検出した	
		近世	積石遺構 盛土遺構 道路状遺構	2 1 1		近世中山道に伴う 遺構を検出した	

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第57集

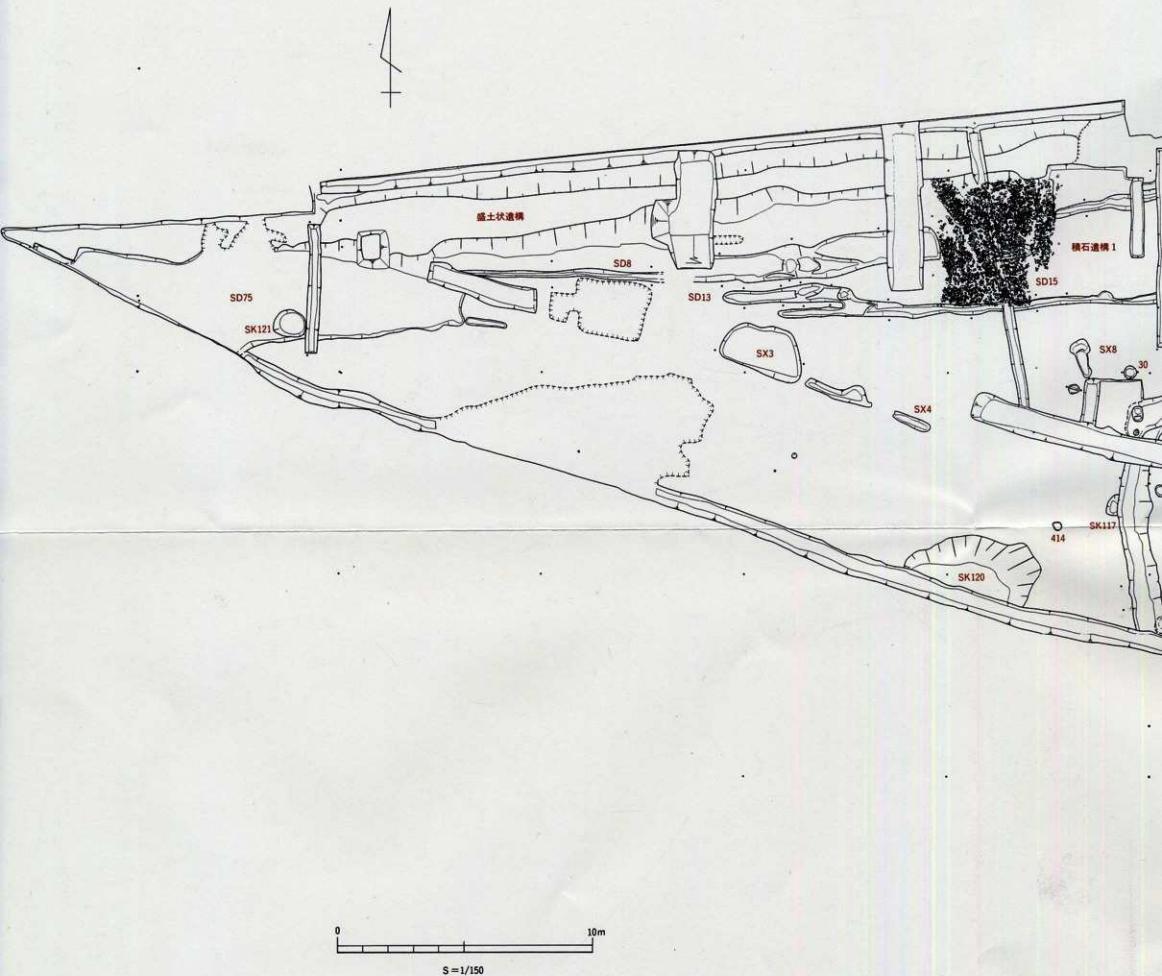
南 整 理 遺 跡

2000年3月31日

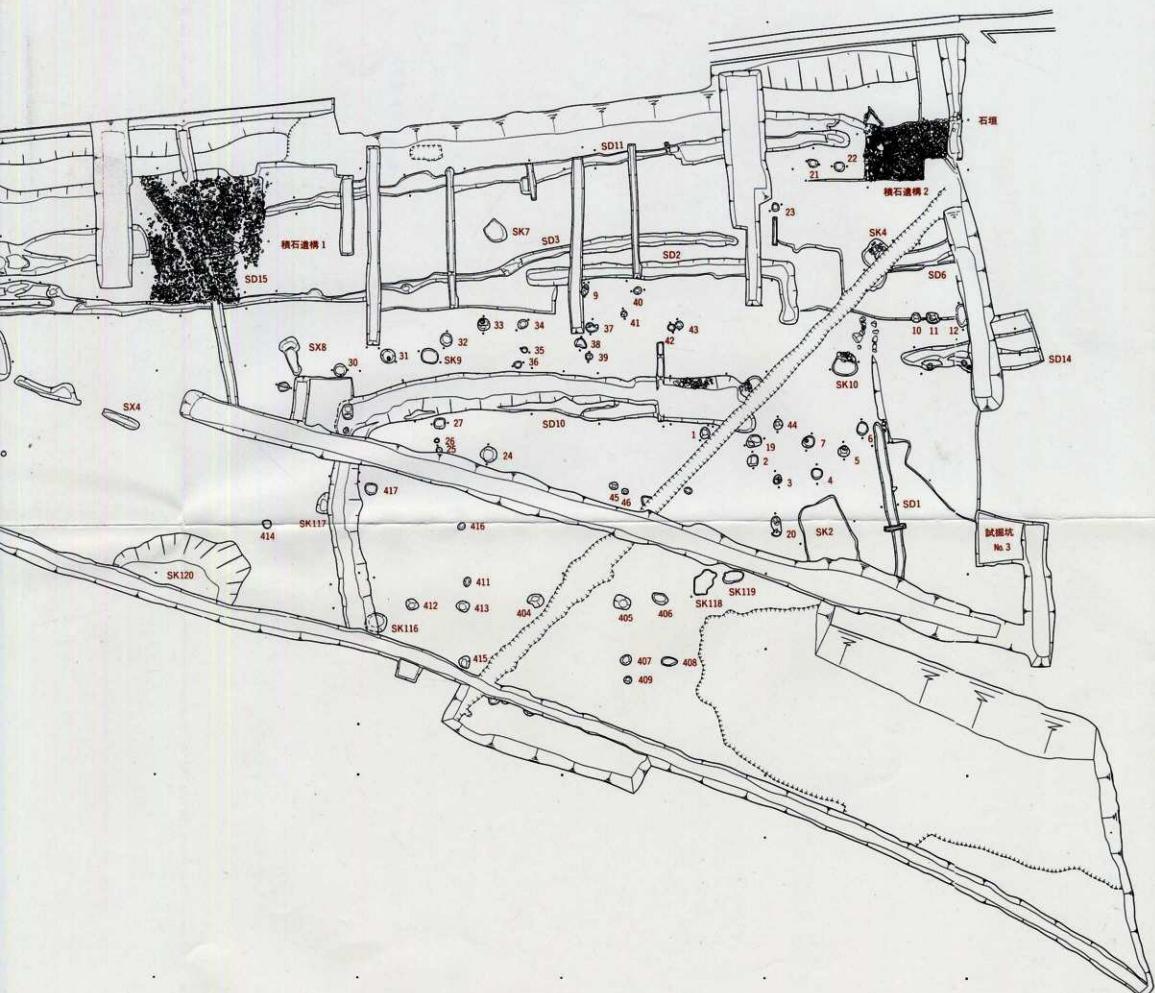
編集・発行 財団法人 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 西濃印刷株式会社

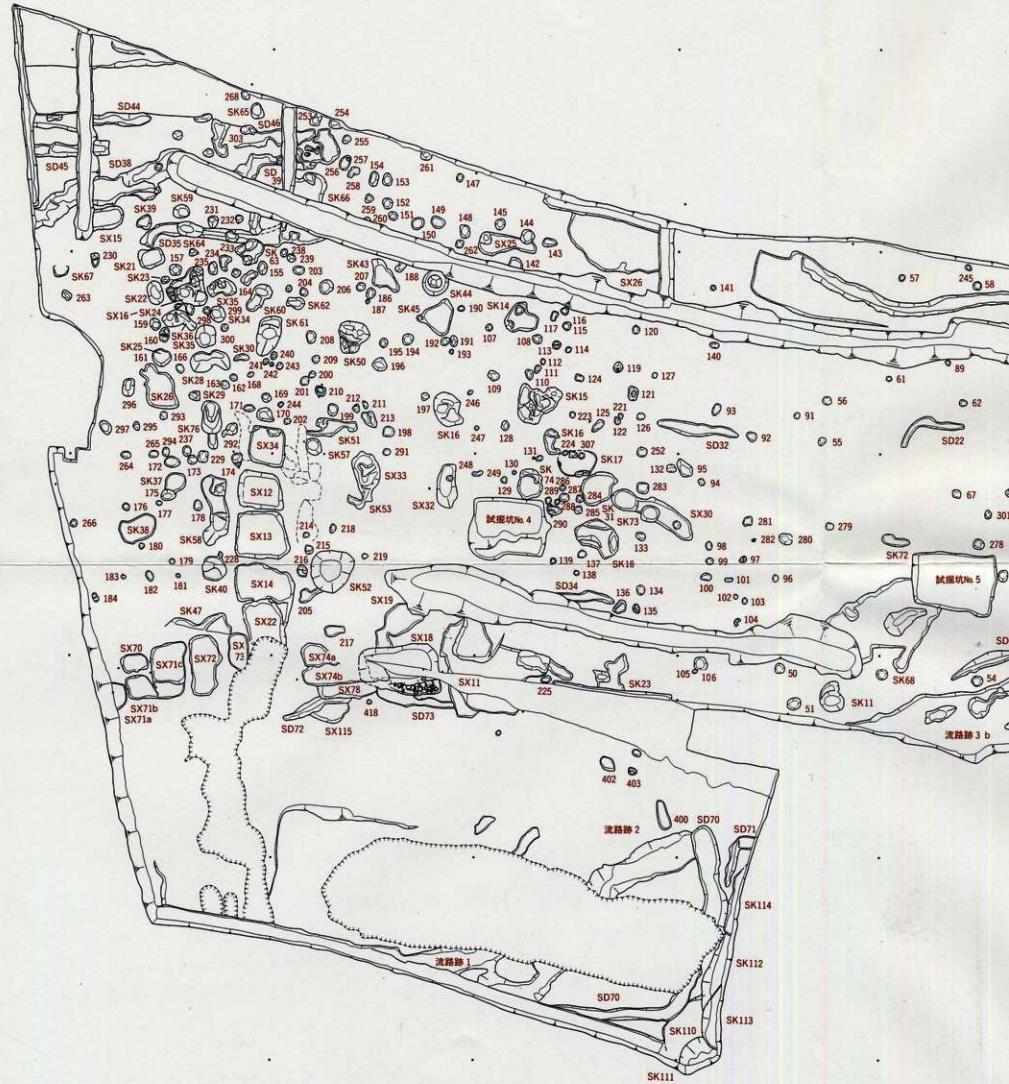


付図1 第1調査面西地区遺構全体図

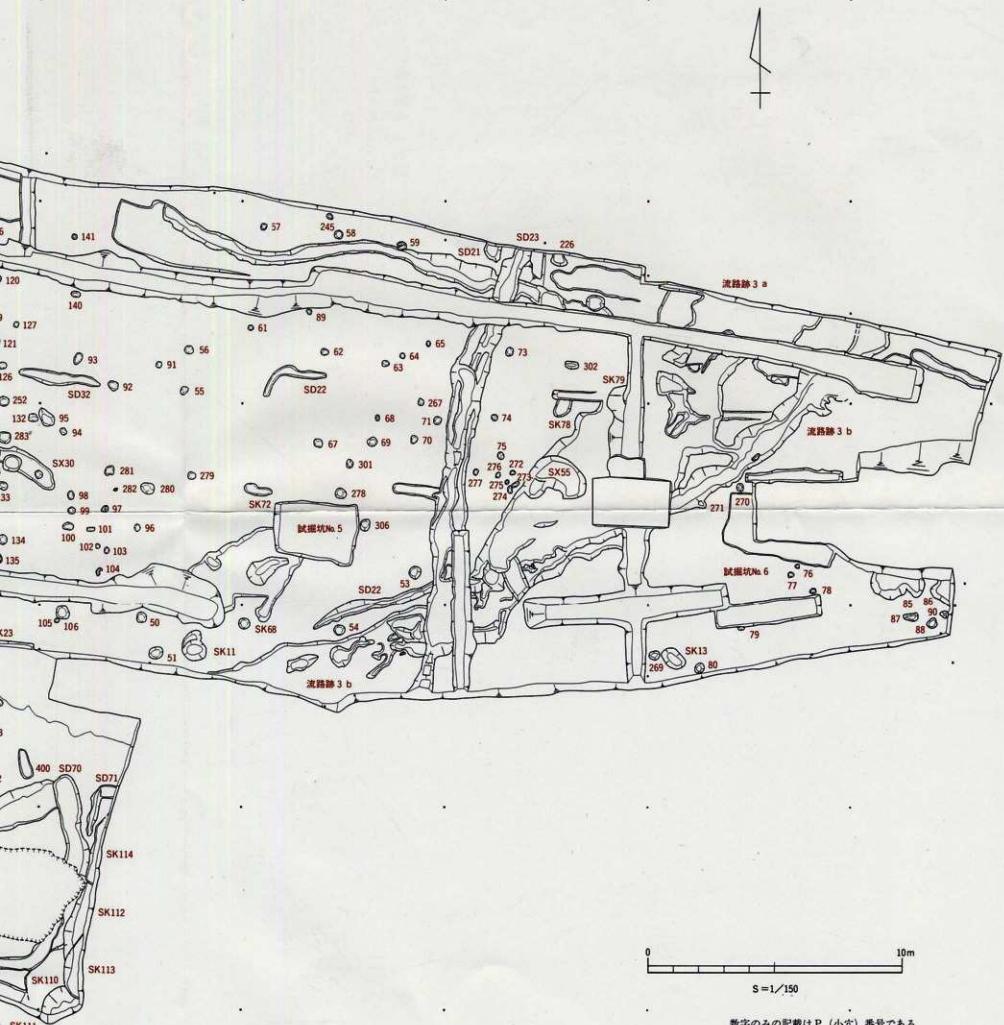


数字のみの記載はP(小穴)番号である

付図1 第1調査面西地区造構全体図



付图2 第1回査面東地区遺構全体図



付図2 第1調査面東地区遺構全体図